野津原II遺跡(西区) 女夫岩西遺跡 城山遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2000年3月

日本道路公団中国支社島根県教育委員会

野津原I遺跡(西区) 女 夫 岩 西 遺 跡 城 山 遺 跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2000年3月

日本道路公団中国支社島根県教育委員会

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施した ものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものでありま す。

平成12年3月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所長 村田 一 廣

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社から委託を受けて、中国横断自動車道尾道松江線の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を、平成8年度より実施しています。本報告書は、平成10年度に調査した、宍道町内の野津原Ⅱ遺跡(西区)、女夫岩西遺跡、城山遺跡の調査結果をまとめたものです。

宍道町周辺は、古くから陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきた地域であり、 数多くの遺跡が存在しています。また、奈良時代の文献『出雲国風土記』の記述 と、合致する可能性がある遺跡が存在するなど、古代を考える上で重要な地域で もあります。

今回の調査では、弥生時代後期の高地性集落や中世の山城跡などをはじめ、多くの成果をあげることができました。これらの成果は、この地域の歴史を解明する上での貴重な資料となるものです。

本報告書が地域の歴史を学ぶうえでの一助となり、また、埋蔵文化財への関心を高めるのに役立てば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査及び本書の刊行にご協力いただきました、 地元の皆様をはじめ日本道路公団、宍道町教育委員会ならびに関係の皆様に厚く お礼申し上げます。

平成12年3月

島根県教育委員会

教育長 山 﨑 悠 雄

- 1 本書は日本道路公団中国支社から委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年度に実施した、 中国横断自動車道尾道松江線の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 本書に掲載した遺跡は以下のとおりである。

野津原Ⅱ遺跡(西区) 八東郡宍道町大字白石

女夫岩西遺跡

八束郡宍道町大字白石

城山遺跡

八東郡宍道町大字佐々布

3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

(平成10年度)

[事務局] 勝部 昭(文化財課長)、宍道正年(埋蔵文化財調査センター長) 島地徳郎(課長補佐)、秋山 実(課長補佐)、松本岩雄(課長補佐) 川崎 崇(企画調整係主事)

[調査員] 林 健亮 (埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)、久保田一郎 (同主事) 是田敦 (同主事)、田原淳史 (同主事)、神柱靖彦 (同主事) 橘 弘章 (同教諭兼文化財保護主事)、難波孝之 (教諭兼文化財保護主事) 古藤浩夫 (同教諭兼主事)、石橋俊朗 (同教諭兼主事)、名越顕秀 (同教諭兼主事) 勝部幸治 (教諭兼主事)、田中玲子 (臨時職員) 月坂雄一 (臨時職員) 大西憲和 (臨時職員)、影山厚司 (臨時職員)、岡本育子 (臨時職員)

(平成11年度)

[事務局] 宍道正年(埋蔵文化財調査センター所長)、秋山 実(総務課長) 松本岩雄(調査課長)、今岡 宏(総務係長)、渡辺紀子(主任主事) 川崎 崇(主事)

[調査員] 林 健亮 (埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)、久保田一郎 (同主事) 田原淳史 (同主事)、柳野祐子 (同教諭兼文化財保護主事) 和田康宏 (同教諭兼主事)、田中玲子 (臨時職員)、岡本育子 (臨時職員) 池渕 茂 (臨時職員)

4 発掘作業については(発掘作業員雇用、重機借上げ、発掘用具調達)については、日本道路公 団中国支社松江工事事務所・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、 島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

[現場担当] 布村幹夫(現場事務所長)、永原正寛(技術員)、藤原 恒(技術員) 大野紀昭(技術員)

「事務担当」 深田明子

5 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

今岡 稔 (島根県文化財保護指導員)、山根正明 (松江南高校教諭)、 中井 均 (米原町教育委員会)

- 6 遺物の実測には以下の方の協力を得た。 松崎恵美子、小豆沢美貴、河野真由美、千本真生、伊藤純子
- 7 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
- 8 挿図中の方位は、国土調査法の軸方位を示す。
- 9 挿図の縮尺は図中に明示した。
- 10 本書の作成は、調査及び整理に携わったものが分担しておこない、文責は目次に明示した。
- 11 出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会(埋蔵文化財調査センター)で保管している。

本 文 目 次

第1章	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(和田)	1
第 2 章	位置と環境	(和田)	3
第 3 章	野津原Ⅱ遺跡(西区)	(林)	
第1節	調査の経過と遺跡の概要		9
第2節	縄文時代と考えられる遺構		14
第3節	弥生時代の遺構		15
第4節	遺構に伴わない遺物		33
第5節	道路状遺構		46
第6節	小 結		46
第 4 章	女夫岩西遺跡	(田原)	
第1節	調査の概要と経過		49
第2節	Ⅰ区の調査		49
第3節	Ⅲ区の調査		56
第4節	ま と め		58
第 5 章	城山遺跡	(久保田	1)
第1節	調査の概要		59
第2節	遺構と遺物		60
第3節	小 結		79
第6章	野津原Ⅱ遺跡と周辺の弥生集落	(林)・	85
	表目次		
第1表	野津原Ⅱ遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡と周辺の遺跡		5

挿 図 目 次

第1図	宍道町の位置1
第2図	尾道松江線(三刀屋~玉湯間)ルート上の遺跡
第3図	野津原Ⅱ遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡と周辺の遺跡7
野津原I	I 遺跡 (西区)
第4図	野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡の位置関係9
第5図	野津原Ⅱ遺跡(西区)の調査範囲とトレンチ配置図10
第6図	野津原Ⅱ遺跡(西区)土層断面図 11
第7図	野津原Ⅱ遺跡(西区)調査後地形測量図 12
第8図	野津原Ⅱ遺跡(西区)遺構配置図 13
第9図	土壙 7 実測図
第10図	土壙 6 実測図15
第11図	1 号建物跡平面図・土層断面図
第12図	1 号建物跡平面図
第13図	1号建物跡柱穴土層断面図(1)17
第14図	1 号建物跡柱穴土層断面図(2)
第15図	1 号建物跡出土遺物実測図
第16図	2 号建物跡平面図・土層断面図20
第17図	2 号建物跡柱穴土層断面図
第18図	2 号建物跡出土遺物実測図
第19図	3 号建物跡・溝平面図
第20図	3 号建物跡土層断面図
第21図	3 号建物跡柱穴土層断面図
第22図	3 号建物跡出土遺物実測図 24
第23図	4 号建物跡平面図・土層断面図25
第24図	4 号建物跡柱穴土層断面図
第25図	4 号建物跡出土遺物実測図 26
第26図	建物跡と思われる遺構群平面図 27
第27図	土壙 1 実測図
第28図	土壙 2 実測図
第29図	土壙 3 実測図
第30図	土壙 4 実測図
第31図	土壙 5 実測図
第32図	土壙 8 実測図
第33図	石器実測図

第34図	弥生土器実測図(1)34
第35図	弥生土器実測図(2)34
第36図	弥生土器実測図(3)
第37図	弥生土器実測図(4)
第38図	弥生土器実測図(5)
第39図	弥生土器実測図(6)
第40図	弥生土器実測図(7)
第41図	弥生土器実測図(8)
第42図	弥生土器実測図(9)
第43図	弥生土器実測図⑽
第44図	弥生土器実測図印
第45図	弥生土器実測図(12)
第46図	弥生土器実測図印 (13)
女夫岩西	
第47図	古墳調査前地形測量図 … 49
第48図	女夫岩西遺跡周辺地形図・調査区配置図 50
第49図	古墳地形測量図(表土除去後)51
第50図	古墳出土遺物実測図 1 51
第51図	古墳土層図
第52図	古墳溝遺物出土状況 53
第53図	古墳出土遺物実測図 2 54
第54図	SX01出土遺物実測図 ····· 54
第55図	SX01平面図・土層図 55
第56図	古墳調査後地形測量図 55
第57図	Ⅲ区調査後地形測量図 56
第58図	Ⅲ区土層実測図 … 57
城山遺跡	
第59図	城山遺跡調査区配置図 59
第60図	城山遺跡地形測量図(調査前) 61
第61図	Ⅱ 区地形測量図(調査後) 63
第62図	SE01·SE02実測図 ····· 64
第63図	Ⅲ区地形測量図(調査後) 65
第64図	Ⅳ 区地形断面図
第65図	Ⅳ区地形測量図 (調査途中)
第66図	Ⅳ区地形測量図(調査後) 69
第67図	₩区十層断面図71

第68図	II · IV 区土層断面図
第69図	1郭SK01実測図73
第70図	礫石出土状況 74
第71図	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・鉄器実測図 75
第72図	石製品及び土器実測図 76
第73図	石製品実測図 77
第74図	城山城縄張図(前段階)
第75図	城山城縄張図(後段階)
野津原Ⅱ	遺跡と周辺の弥生時代集落遺跡
第76図	山守免・野津原 Ⅱ 遺跡の弥生時代の遺構と主な出土遺物 87
	网 哇 日 %
	凶

野津原Ⅱ遺跡(西区)

図版 1	野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡全景(西から)
図版 2	野津原 II 遺跡·山守免遺跡全景
図版 3	野津原Ⅱ遺跡(西区)調査前近景(東から)
	調査前 道の状況(南から)
図版 4	トレンチ 2 土層堆積状況(南から)
	土壙 7 完掘状況(南から)
図版 5	1号建物跡完掘状況(南から)
	2号建物跡完掘状況(南から)
図版 6	1・2号建物跡完掘状況(北から)
	3 号建物跡壁体溝土層堆積状況(西から)
図版 7	3号建物跡完掘状況(南から)
	3 号建物跡完掘状況(西から)
図版 8	4 号建物跡完掘状況(東から)
	野津原Ⅱ遺跡(西区)全景(調査後・東から)
図版 9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)
図版11	出土遺物(3)
図版12	出土遺物(4)
図版13	出土遺物(5)
図版14	出土遺物(6)

図版15 出土遺物(7)

図版16 出土遺物(8)

図版17 出土遺物(9)

女夫岩西遺跡

図版18 女夫岩西遺跡遠景(上野遺跡より)

古墳調査前(東から)

図版19 古墳調査前(北から)

Ⅲ区調査前

図版20 古墳全景

古墳溝遺物出土状況

図版21 SX01

Ⅲ区調査後(北から)

図版22 Ⅲ区調査後(東から)

女夫岩遺跡の巨石

図版23 古墳出土遺物(1)

古墳出土遺物(2)

図版24 SX01出土遺物

大森神社

城山遺跡

図版25 城山遺跡全景 (調査前・南西より)

城山遺跡全景 (調査後・南西より)

城山遺跡遠景 (調査後・南西より)

Ⅱ区 (調査後・西から)

II区SD01 (西から)

図版27 竪堀8断面

II区SE01

II区SE02

図版28 Ⅲ区(調査後)

Ⅳ区 (調査途中)

Ⅳ区 (調査後・北東から)

図版29 Ⅳ区 (調査後・北西から)

1郭(第2段階)の盛土

3郭の盛土

図版30 4郭(第2段階)の盛土

4郭(第1段階)完掘状況

竪堀4底部に集積された礫石

図版31 竪堀4完掘状況

竪堀5上端

通路2東端の集石遺構(南から)

図版32 通路2東端の集石遺構(西から)

礫石除去後の通路2東端

通路1に続く主郭南側の段差

図版33 通路1(1郭の出入口付近)

土手状に削り残された通路2谷側部分

通路2 (北東から)

図版34 出土遺物(1)

図版35 出土遺物(2)

図版36 出土遺物(3)

第1章 調査に至る経緯

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国自動車道と接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の調査については、平成4年1月に建設省道路局長から日本道路公団に松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、同年4月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成5年9月には工事実施計画が認可された。このような状況を受け、県教委では平成6年3月から分布調査を実施し、全体の9割あまりを踏査した。

この調査結果をもとに、同年6月と8月に道路公団と調査の打ち合せを行った。この打ち合せで、今回の分布調査が500m幅を対象にしているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成7年4月に完了し、公団へ回答した。

同年4月に日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、8月に第1回の連絡会を開催した。この会議では平成8年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、侵入路、排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。その後2回の連絡会で調整し、平成8年度から調査を実施することが決定した。

これを受けて、調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、

社団法人中国建設弘済会、島根県教育 委員会の三者による埋蔵文化財発掘調 査覚書を平成8年3月26日に交わし、 本格的に調査に入ることとなった。

平成8年度は、試掘調査を含め、大谷I遺跡など7遺跡を発掘調査した。

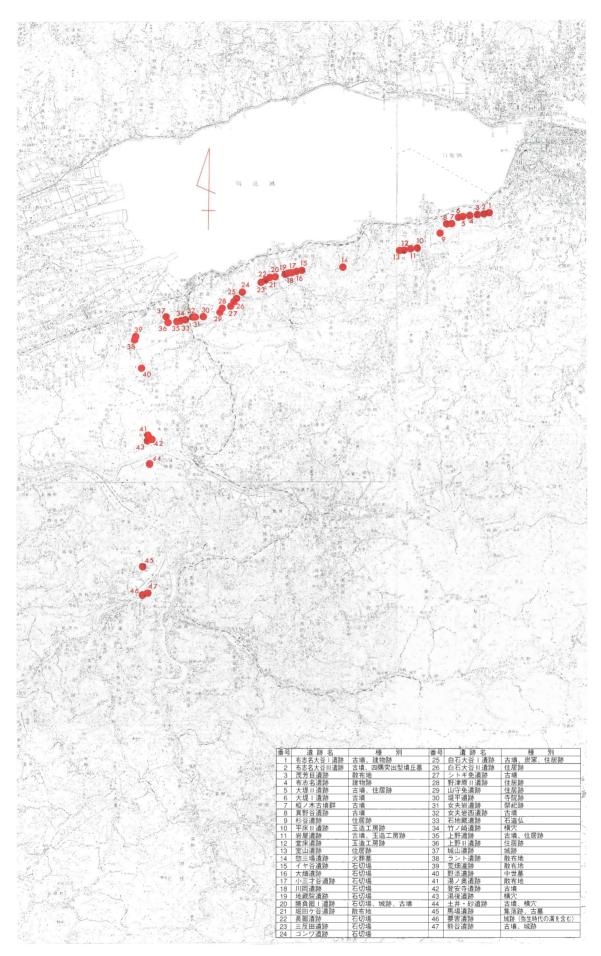
平成9年度は、試掘調査を含め、平 床遺跡など22遺跡を発掘調査した。

そして平成10年度は、試掘調査を含め、茂芳目遺跡など22遺跡の発掘調査を行った。

今回報告する野津原Ⅱ遺跡、女夫岩 西遺跡、城山遺跡は、いずれも八束郡 宍道町に所在し、平成10年度に発掘調 査を行ったものである。



第1図 宍道町の位置



第2図 尾道松江線(三刀屋~玉湯間)ルート上の遺跡 (S=1/150,000)

第2章 位置と環境

野津原Ⅱ遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡は、島根県八東郡宍道町に所在する。これらの遺跡は、 宍道湖西南端から南に1.5km付近に点在する。

宍道町は、宍道湖の西南端沿岸部に位置し、東は八東郡玉湯町、南は大原郡加茂町と大東町、そして西は簸川郡斐川町にそれぞれ境を接し、松江市から西に約17kmの地点にある。人口は約10,000人である。

天平5年(西暦733年)に書かれた地誌『出雲国風土記』(以下『風土記』と略す)から古代の宍道について多くの情報を得ることができる。それによると現在の宍道町域は、意宇郡の宍道郷(大字宍道、白石、佐々布に相当)、拝志郷の一部(来待地区に相当)、出雲郡建部郷の一部(大字伊志見に相当)に該当する。また宍道町佐々布付近には古代の山陰道の宍道駅があったことが推測され、古来より交通の要として栄えていたことがうかがえる。現在も町内には、鉄道ではJR山陰線、木次線が、道路では国道9号線、国道54号線が通っていて、今に至るまで宍道町は島根県の交通の要の一つである。

また、『風土記』には「宍道郷。郡家の正西三十七里なり。所造天下大神命の追ひたまいし猪の像、南の山に二つあり。(大きさ〜省略〜)猪を追ひし犬の像、(大きさ〜省略〜)其の形石となりて、猪と犬と異なることなし。今に至りても猶あり。故、宍道と云ふ。」という記述がある。注目されるのが、ここに登場する猪と犬の形をした石で、それが大字白石字宍岩に現存する「女夫岩」、あるいは大字白石字石ノ宮、森脇の石宮神社にある「猪石、犬石」ではないかと言い伝えられてきた。

宍道町には、宍道湖に向かって北流する川によってつくられた谷平野が幾筋も認められる。主なものは佐々布川、同道川、来待川がそれぞれ形成した谷平野である。これらの谷平野は、古くから耕地や居住地として利用されてきた。また、来待地区では、凝灰質砂岩である来待石が産出され、古墳の石棺や石室の石材として使われてきた。現在も来待石を庭石などに加工する地場産業が続いている。

以下、時代ごとに調査・報告されている遺跡について述べてみる。

[旧石器時代の遺跡]

この時代は現在より気候が寒冷であり、海水面はかなり低かったと推測される。宍道町周辺は、標高が200~400m程度の丘陵を背後にひかえ、大きな谷を見下ろす北向きの丘陵地で、居住しやすい環境だったであろう。この時代の石器は、町内では堤平遺跡のナイフ形石器 1 点と首谷遺跡の細石核 1 点とわずかしか認められないが、周辺の市町村では多数の遺跡が知られている。移動しながらの生活であったと考えられるので、大きな谷をめぐる宍道湖周辺地域はひとつの文化圏であった可能性が高い。

[縄文時代の遺跡]

この時代になると、海水面の上昇にともない海水が入り込み、沖積や砂州が発達することによって、宍道湖周辺の地形も現在に近くなったと考えられる。宍道町周辺は、眼前に水面をひかえて水

産資源に恵まれ、居住に適した環境であった。東来待の弘長寺遺跡から出土した多数の石錘などから、湖岸では漁労が行われていたと考えられる。

「弥生時代の遺跡〕

この時代になると稲作が生業の中心となり、宍道町周辺でも平野部の低地に遺跡が多く見られるようになる。各地に広がる沖積平野ごとに遺跡が展開していることから、宍道町においても来待川流域や佐々布川流域あたりにこの時代の遺跡が存在している可能性が高い。

この時代の後期には、防衛的役割の可能性がある高地性集落が出現する。宍道町内では野津原Ⅲ 遺跡や山守免遺跡がこれに該当するもので、全国的な争乱の波に宍道町周辺も巻き込まれていたと 考えられる。

[古墳時代の遺跡]

古墳時代に入ると、遺跡数、遺物量とも格段に増加する。町内でも多くの古墳、横穴墓が確認されているが、今後の調査によりさらに増加するであろう。

前期には、来待地区で知原1号墳、宍道地区で上野1号墳と佐々布下1号墳が築かれる。このうち、大型の円墳である上野1号墳からは斜縁神獣鏡や鉄剣、槍、豊富な玉類等が出土している。

中期からは、宍道地区で足頭古墳群、水溜古墳群が、来待地区では横田古墳、松石古墳群が築かれるようになる。これらの古墳は小さな谷を見おろす低丘陵上に立地し、多くの古墳群は数基から10基前後で構成されるが、水溜古墳群は30基より形成される規模の大きい古墳群である。墳丘は大部分が方墳である。また、このころから石棺の石材としてこの地域特有の来待石が使われるようになる。横田古墳の舟形石棺には、地元で「白粉石」または「白来待」と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩が使われていて、同じ石材が使われている玉湯町の徳連場古墳、玉造築山古墳の舟形石棺との関連が注目される。

後期には、横穴式石室をもつ古墳と、横穴墓が多く築かれるようになる。同道川流域では、前方 後円墳の椎山1号墳や、前方後方墳と推定され石棺式石室をもつ伊賀見1号墳、墳型は不明だがや はり石棺式石室をもつ下の空古墳が造られている。石室の石材としては来待石が使われている。ま た、横穴式石室をもつ古墳としては、来待川流域の知原2号墳と同4号墳および鏡川流域の鏡北廻 古墳などがある。鏡北廻古墳の石室も来待石の加工によるもので、閉塞石には門を表現した浮き彫 りが施してある。

横穴墓は、弘長寺横穴群、才横穴群等多数の遺跡があり、主に河川を臨む中流域及び宍道湖に面した低丘陵に広く分布している。宍道町において横穴墓の玄室形態をみると、隣接する簸川郡や大原郡のものとは構造上タイプを別にしている。簸川郡には三角断面妻入りやアーチ形が多くみられ、大原郡には三角断面妻入りを呈するものが多い。それに対して、宍道町では小地域ごとに平面プラン、天井形態などまとまりがみられるものの、形態的に混在した地域となっている。また石棺の石材からみると、来待石が利用されている例がこれら隣接する地域に共通してみられる。

[奈良・平安時代の遺跡]

律令時代になると、『風土記』がこの頃の様子を探る大きな手がかりとなる。前述のように宍道に関しては、古代山陰道が設けられ、佐々布付近と推定される場所に宍道駅があったことが書かれている。「宍道」という地名の成立に関わる「女夫岩」、あるいは「猪岩、犬岩」についての記述も興味深い。

荻田遺跡は宍道湖岸近くの鍛冶炉を持つ集落跡で、宍道湖周辺では貴重な鍛冶遺構である。堤平 遺跡からは布掘り建物跡や堀立柱建物跡が検出されたが、灯明皿や鉄鉢形土器が出土したことから 古代寺院跡と推察され、町内唯一のものである。瓦を持たない古代寺院の確実な例として、県内で も数少ない存在である。小松古窯跡群は、古代の手工業生産の体制を考える上で意義がある。

[鎌倉・室町時代の遺跡]

中世になると、宍道地区と来待地区の山間を中心として山城が築かれるようになる。応仁年間の頃よりこの地方で勢力を誇ったのが宍道氏である。その宍道氏が本拠地とした金山要害山城は、標高148m、比高130mという雄大な山塊を利用して築いたものである。交通路から考えれば南部の大原郡方面への通路にあたり、湖岸と湖上を利用しての東西方面への進出にも便利なところに位置している。ほかにも宍道要害山城、佐々布要害山城など、山城が多数築かれている。

[近世の遺跡]

中世から近世にかけては、来待石が石造物の石材として貴重な存在になる。三反田遺跡をはじめとする来待石石切場遺跡群の調査により、江戸時代以来の採石方法が明らかになった。

以上のように宍道町一帯は、弥生時代以降の遺跡を中心に数多くの遺跡が残されている。これまでの調査で明らかになった遺跡の実像と地理的な要因から、この地域は古くから交通路の要としての役割を持ちながら、周辺の地域とともに文化が発展してきたといえよう。

参考文献

山根正明 1991『宍道町の山城』宍道町教育委員会

西尾克己ほか 1993 『宍道町歴史資料集(古墳時代編Ⅰ)』宍道町教育委員会

島根県埋蔵文化財調査センター

1997『上野遺跡現地説明会資料』島根県教育委員会

丹羽野 裕ほか 1998『宍道町歴史叢書3』 宍道町教育委員会

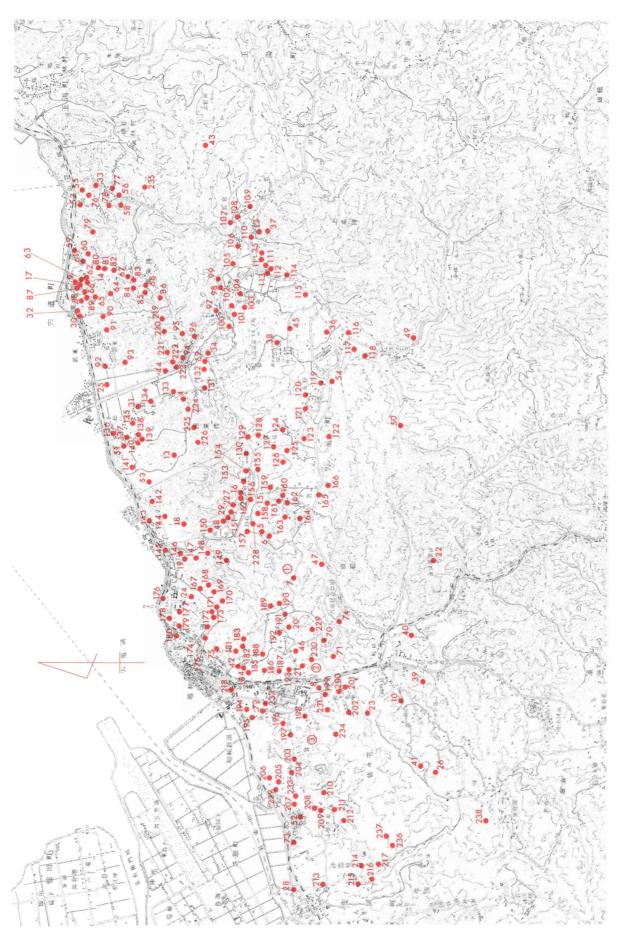
西尾克己ほか 1998 『出雲国風土記にみる宍道町』宍道町教育委員会

丹羽野 裕ほか 1999『宍道町史[史料編]』宍道町史編纂委員会

第1表 野津原Ⅱ遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種 別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種 別
1	野津原Ⅱ遺跡	住居跡	17	弘長寺古墳	古墳	33	鏡北廻古墳	古墳
2	女夫岩西遺跡	古墳	18	伊賀見古墳群	古墳	34	高松古墳群	古墳
3	城山遺跡	城跡	19	萩古墳	古墳	35	佐久多神社裏古墳群	古墳
4	勝負廻I遺跡	城跡、古墳	20	才古墳	古墳	36	菅原横穴群	横穴
5	白石大谷Ⅱ遺跡	住居跡	21	OM公園横穴	横穴	37	佐倉末の廻横穴群	横穴
6	シトギ免遺跡	古墳	22	金山要害山城跡	城跡	38	伝大野次郎左衛門の墓	古墓
7	山守免遺跡	住居跡	23	佐々布要害山城跡	城跡	39	大森経塚	経塚
8	石地蔵遺跡	石造仏	24	伝塩冶高貞首塚	古墓	40	金山五輪塔群	古墓
9	弘長寺遺跡	散布地	25	伝土御門親王墓	古墓	41	普門院跡	寺跡
10	平田遺跡	散布地	26	佐々布Ⅰ遺跡	散布地	42	宍道要害山城跡	城跡
11	栗屋山横穴群	横穴	27	佐々布Ⅱ遺跡	散布地(所在不明)	43	穂束城跡	城跡
12	佐倉横穴群	横穴	28	伊志見一里塚	一里塚	44	久戸千体地蔵	磨崖仏
13	西来待横穴群	横穴	29	犬石、猪石	祭祀遺跡	45	大野原古墳	古墳
14	弘長寺横穴群	横穴	30	三成遺跡	散布地	46	才横穴群	横穴
15	椎山古墳群	古墳	31	中垣遺跡	散布地	47	女ノ峠横穴	横穴
16	下の空古墳	古墳	32	三成古墳群	古墳	48	坪の内古墳	古墳

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種 別
49	菅原金屋子鈩跡	製鉄遺跡	113	紺屋田遺跡	散布地	177	深坪遺跡	散布地
50	上来待カナクソ谷鈩跡	製鉄遺跡	114	金子遺跡	散布地	178	小宮田遺跡	散布地
51	小松古窯跡群	窯跡	115	半ノ田遺跡	散布地	179	向野原遺跡	散布地
52	萩田遺跡	住居跡	116	沢田尻遺跡	散布地	180	下野原遺跡	散布地
53	伊野谷遺跡	散布地	117	ハゲの前遺跡	散布地	181	八斗久保遺跡	散布地
54	大野鈩跡	製鉄遺跡	118	上本郷遺跡	散布地	182	横町横穴群	横穴
55	大紋古墳	古墳	119	四斗尻遺跡	散布地	183	横町遺跡	散布地
56	草の上東遺跡	散布地	120	木実田遺跡	散布地	184	宍道要害山古墳	古墳
57	塚畑遺跡	散布地	121	中村遺跡	散布地	185	榎廻遺跡	散布地
58	草の上遺跡	散布地	122	反田遺跡	散布地	186	西代遺跡	散布地
59	松石横穴	横穴	123	鹿掘遺跡	散布地	187	長廻古墳	古墳
60	松石遺跡	散布地	124	十井遺跡	散布地	188	六反田遺跡	散布地
61	松石古墳群	古墳	125	堂床遺跡	散布地	189	外垣内遺跡	散布地
62	明寿廻古墳群	古墳	126	横見古墳群	古墳	190	原田遺跡	散布地
63	明寿廻遺跡	散布地	127	椿堀遺跡	散布地	191	佐賀利遺跡	散布地
64	多井古墳群	古墳	128	御崎廻古墳	古墳	192	向原遺跡	散布地
65	寺谷遺跡	散布地	129	的場遺跡	散布地	193	篠原遺跡	散布地
66	寺谷北遺跡	散布地	130	宮の前遺跡	散布地	194	掛屋山城跡	城跡
67	多井北遺跡	散布地	131	横田古墳	古墳	195	佐々布下古墳群	古墳
68	多井遺跡	散布地	132	大前遺跡	散布地	196	中屋敷遺跡	散布地
69	知原古墳群	古墳	133	槙綴遺跡	散布地	197	大畑ヶ遺跡	散布地
70	清水谷古墳群	古墳	134	八ツ面遺跡	散布地	198	西屋敷遺跡	散布地
70	<u> </u>	横穴・散布地	135	船分遺跡	散布地	199	竹ノ崎遺跡	横穴
72	大頭退跡群	横穴	136	段原遺跡	散布地	200	- 17 回 退 励 - 5 会 下 遺 跡	散布地
73		古墳	137	伊ノ坂遺跡	散布地	200	敷手遺跡	散布地
	足頭古墳群	古墳	138	東カナへ廻遺跡	散布地	201	矢谷上遺跡	散布地
74	水溜古墳群	横穴	139	カナへ廻遺跡	散布地	202	岩穴畑遺跡	散布地
75	随音寺横穴群					203		横穴
76	大門遺跡	散布地	140	宇由比神社古墳	古墳	_	鋤崎古墳群	古墳、横穴
77	<u>庄廻遺跡</u>	散布地	141	四つ口古墳	古墳	205	屋敷古墳群	
78	岩穴遺跡	散布地	142	イヅレ遺跡	散布地	206	椎ノ木廻古墳群	古墳
79	荒神谷遺跡	散布地	143	下白石遺跡	散布地	207	小界古墳	古墳
80	水行遺跡	散布地	144	平井廻遺跡	散布地	208	小佐々布古墳群	古墳
81	高狭遺跡	散布地	145	後原遺跡	教布地	209	鹿田遺跡	散布地
82	家の下遺跡	散布地	146	奥遺跡		210	北ノ廻遺跡	散布地
83	下多井遺跡	散布地	147	萩遺跡	散布地	211	ソラ田遺跡	散布地
84	立平遺跡	散布地	148	熊江遺跡	散布地	212	小佐々布横穴群	横穴
85	前田遺跡	散布地	149	空遺跡	散布地	213	原添遺跡	散布地
86	苅山遺跡	散布地	150	長畑遺跡	散布地	214	寺ノ前遺跡	散布地
87	明寿廻東遺跡	散布地	151	坪の内遺跡	散布地	215	廻田遺跡	散布地
88	竹の下遺跡	散布地	152	平屋敷遺跡	散布地	216	上ソリ田遺跡	散布地
89	寺谷西遺跡	散布地	153	上西遺跡	散布地	217	上遺跡	散布地
90	三成上遺跡	散布地	154	ホウジ遺跡	散布地		加茂分遺跡	散布地
91	坂広遺跡	散布地	155	ホウジ向遺跡	古墓	219	イヤ谷遺跡	石切場
92	日吉遺跡	散布地	156	五反田遺跡	散布地	220	大畑遺跡	石切場
93	舟山遺跡	散布地	157	イナエソ遺跡	散布地	221	小三才谷遺跡	石切場
94	水頭遺跡	散布地	158	椎山遺跡	散布地	222	川岡遺跡	石切場
95	高平遺跡	散布地	159	鴬遺跡	散布地	223	地蔵院遺跡	石造仏
96	山根遺跡	散布地	160	北垣尻遺跡	散布地	224	堀田ヶ谷遺跡	散布地
97	鍛冶屋遺跡	散布地	161	北垣遺跡	散布地	225	長廻遺跡	石切場
98	蔵敷遺跡	散布地	162	掛木遺跡	散布地	226	三反田遺跡	石切場
99	西廻遺跡	散布地	163	上後ヶ市遺跡	散布地	227	ゴンワ遺跡	石切場
100	蔵の前遺跡	散布地	164	鴨田遺跡	散布地	228	白石大谷Ⅰ遺跡	古墳、炭窯、住居跡
101	織部古墳群	古墳	165	宮原遺跡	散布地	229	堤平遺跡	寺院跡
102	平治割遺跡	散布地	166	荒田遺跡	散布地	230	女夫岩遺跡	祭祀跡
103	大森城跡	城跡	167	カシャク古墳	古墓	231	上野遺跡	古墳、住居跡
104	大畑遺跡	散布地	168	小昭廻遺跡	散布地	232	海部城跡	城跡
105	大坊遺跡	散布地	169	後谷横穴	横穴	233	長廻古墳群	古墳、横穴
	清水尻遺跡	散布地	170	元薬師遺跡	散布地	234	上野Ⅱ遺跡	住居跡
106	ニョニョニュニン ロベニンドノコ		171	山の神谷横穴	横穴	235	<u>工名 日 </u>	火葬墓
106		散化地		. F-1 : < 1.1 H 1857 \	1237			
107	常命壽遺跡	散布地 散布地			構穴	236	ラント遺跡	散布地
107 108	常命壽遺跡 柴木田遺跡	散布地	172	岩穴口横穴	横穴	236	ラント遺跡 売畑遺跡	散布地 数布地
107 108 109	常命壽遺跡 柴木田遺跡 岩屋遺跡	散布地 散布地	172 173	岩穴口横穴 打越遺跡	散布地	237	荒畑遺跡	散布地
107 108	常命壽遺跡 柴木田遺跡	散布地	172	岩穴口横穴				



第3図 野津原Ⅱ遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡と周辺の遺跡(S=1/40,000)



第3章 野津原Ⅱ遺跡(西区)

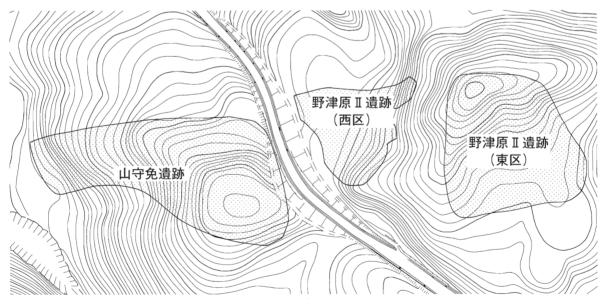
第1節 調査の経過と遺跡の概要

野津原Ⅱ遺跡(西区)は、宍道町才地区と下倉地区の境となる尾根の上の標高60~70mに位置している。平成9年度に調査を行った山守免遺跡と、平成8年度に調査をした野津原Ⅱ遺跡(東区)の間に位置し、一連の遺跡と考えられる。(第4図)

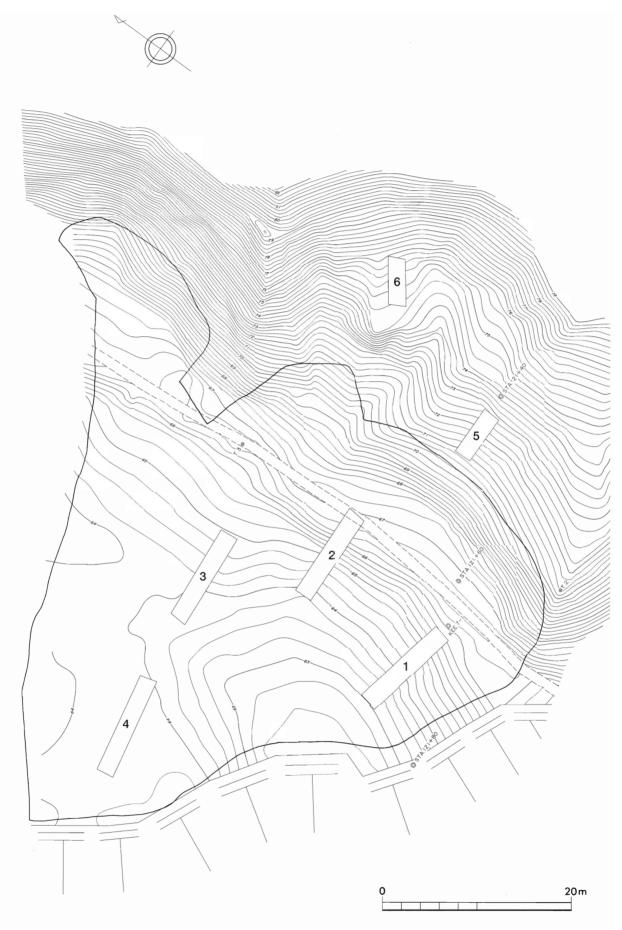
野津原Ⅱ遺跡は、中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う、平成7年度に行った分布調査によって発見された遺跡である。標高90mを測る丘陵頂部と南側と西側に延びる緩やかな斜面に、集落跡の存在が予想されたため、調査対象遺跡となったが、用地取得計画の境界が野津原Ⅲ遺跡の真ん中に引かれたため、東区と西区の調査年度が分かれることになった。この内、東区については、平成8年度に発掘調査を行い、報告書2により報告されている。

野津原 II 遺跡(西区)については、平成 9 年10月に 6 本のトレンチ(第 5 図)による範囲確認を行い、弥生時代後期の集落と遺物包含層の他、版築状の土盛りを施した道路状遺構が確認された。その結果を受け、平成10年 7 月29日から約3,000㎡を対象に全面調査を開始し、弥生時代後期の 4 棟の竪穴建物跡と多量の遺物、溝、土壙の他、縄文時代に作られたと考えられる落とし穴などを検出した。掘削を中心とした作業を10月30日に終え、その間、10月20日にはラジコンへリコプターによる空中写真撮影を行っている。

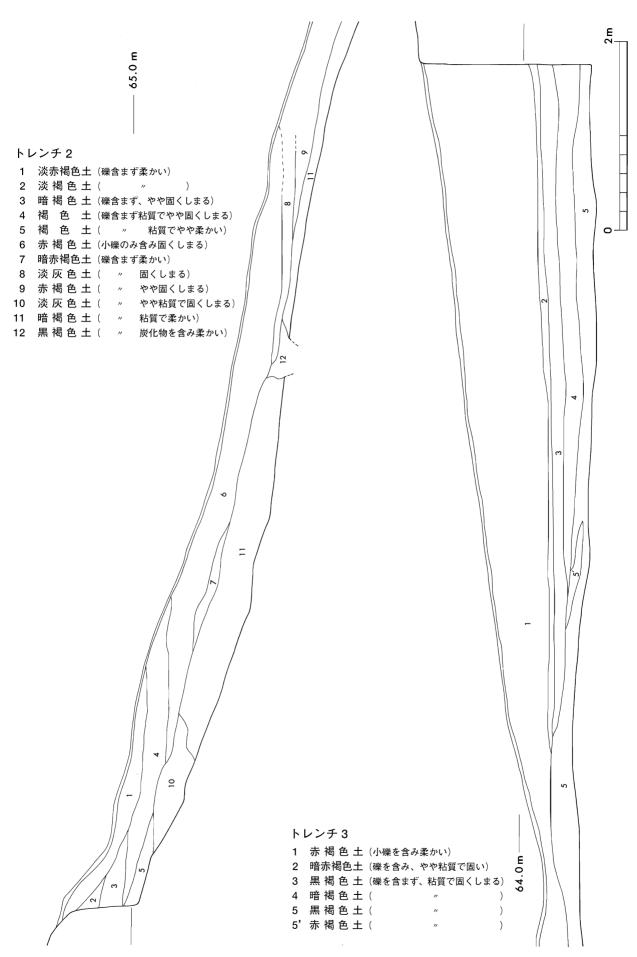
平成9年度に行ったトレンチによる調査では、標高70m以上の東側斜面(トレンチ5・6)からは遺構・遺物が確認できず、全面調査対象から除外した。遺跡西側のトレンチ4付近では、土壌の堆積が薄く、表土直下で建物跡(1号建物跡)を検出している。遺跡中程から西側にかけては、調査前段階でも平坦になっており、後世の削平が及んでいるようである。遺跡中程には南北に走る谷地形があり、黒色土層を中心に、弥生時代後期の土器を多量に含んだ遺物包含層が見られた(第6



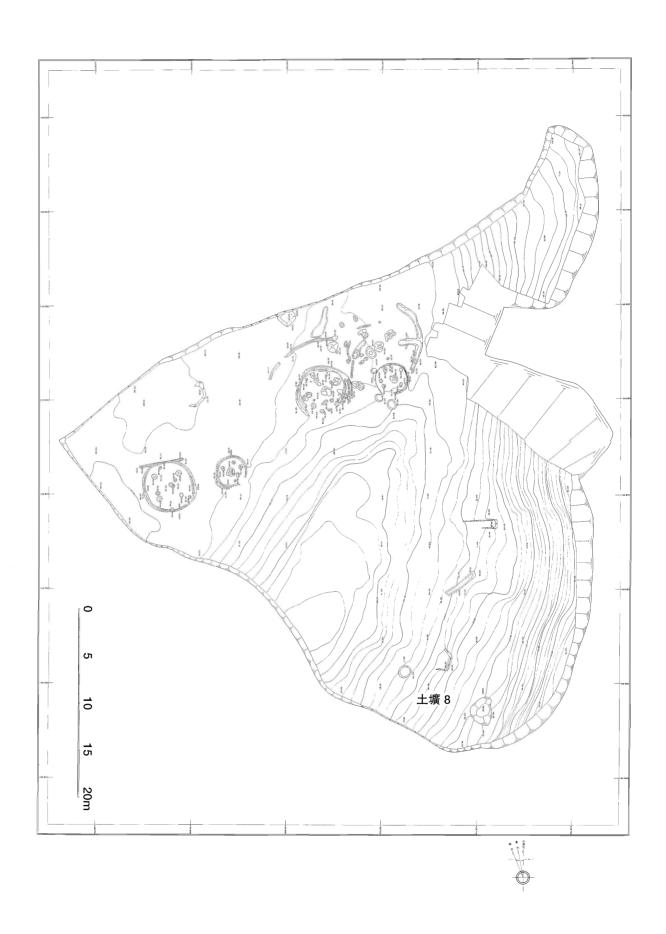
第4図 野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡の位置関係 (S=1:2000)



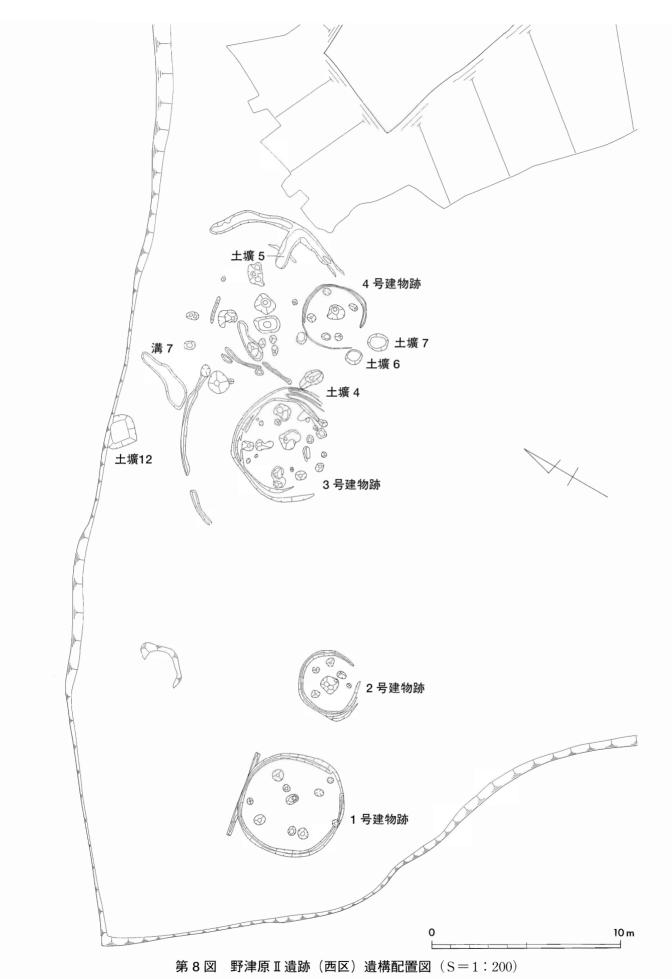
第5図 野津原 II 遺跡(西区)の調査範囲とトレンチ配置図 (S=1:400)



第6図 野津原II遺跡(西区)土層断面図 (S=1:40)



第7図 野津原Ⅱ遺跡 (西区) 調査後地形測量図 (S=1:400)

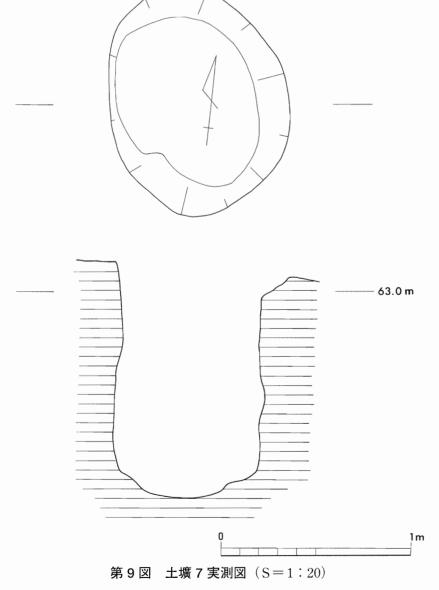


- 13 **-**

図)。また、トレンチ1・2の東側には、橙色土と黒色土が交互に堆積している土層が見られ、古代の道と判断された。この土層の直上には、来待石をステップ状に置いた近年までの道(図版3)が 残存していた。

平成10年度には、全面調査対象範囲3,000㎡の全てについて重機による表土掘削を行った後に、人力による掘削を行った。遺構は、遺跡北側から西側に集中している(第7・8 図)が、前述の通り、後世の削平が及んでおり、残存状態は良くない。遺跡南側にも土壙(第32図)1 基が見られたが、他に明確な遺構は見られなかった。遺跡中程には深い谷地形が入り、多量の遺物を含んでいたが、その多くは細片で、東側上方から流れ込んできたものと考えられる。

調査区北側から西側で検出した遺構は、竪穴建物跡 4 棟と多数の溝・土壙・柱穴である。竪穴建物跡は、発見順に西側のものから 1 号建物跡、2 号……、4 号建物跡とした。この内、3 号建物跡は北側に溝を伴っていることが判明した。また、3 号・4 号建物跡の北側には、弧を描く複数の溝と、その内側に集中する柱穴群が見られ、建物跡が削平を受けた痕跡と判断されることから、少なくとも、あと 2 棟は存在したものと思われる。



第2節 縄文時代 と考えられる遺構

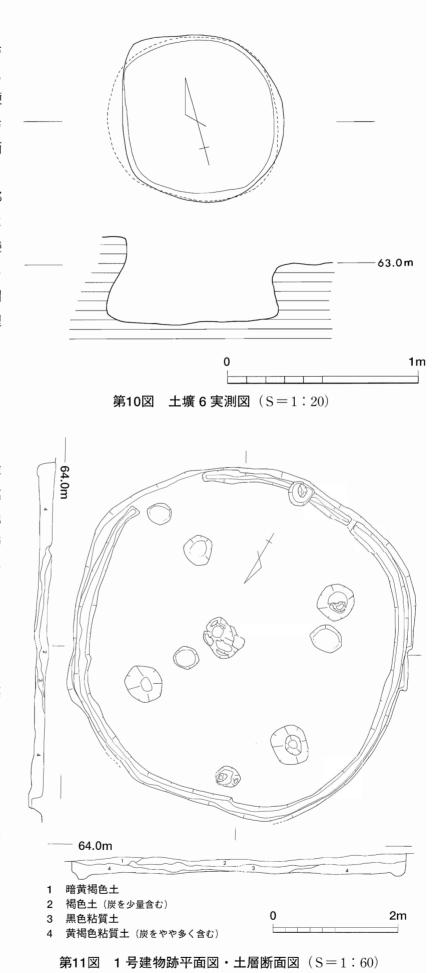
土壙7は落とし穴と考え られる遺構である。4号建物 跡のすぐ南側で検出したも ので、土壙7の南側からは 谷地形が始まっており、谷 筋のすぐ脇に掘られたもの である。長径約2.4m、短径 約1.9mの平面楕円形で、深 さは約2.4mもある。埋土は、 暗黄褐色から灰褐色を呈 す、硬く締まった土で、建物 跡等の埋土とは明らかに異な る。壁面は2mにわたって 垂直に落ちており、床面は ほぼ平坦である。床面には ピットなどは見られなかっ た。土壙7の埋土中からは 遺物は出土しなかった。

土壙6は土壙7の西側に 隣接して掘られていた土壙 である。直径約1.7mの平面 円形から隅丸方形を呈してお り、深さは約0.9mであった。 土壙7と同様に暗黄褐色の硬 く締まった土が詰まってお り、遺物は見られない。床面 は完全に平坦で、壁は大きく 内傾しているため、開口部 よりも床面の方がわずかに 広い。断面の形態から、袋 状貯蔵穴の可能性も検討し たが、埋土の状況から、開 口した状態のまま、徐々に埋 まっていったものと思われ、 落とし穴と判断した。落とし 穴としては浅いと考えられる が、上面は削平を受けている ものと思われる。

野津原Ⅱ遺跡(西区)で検出した遺構の大半は弥生時代後期の所産と考えられ、谷地形に堆積していた遺物包含層中にも弥生後期以外の時期の遺物は含まれていなかった。しかし、土壙 6・7 については埋土の状況が、他の遺構と異なることから、他の遺構より古いと考えられ、縄文時代のものと推定している。

第3節 弥生時代の 遺構

遺跡中央を横断する谷地形よりも東側は、遺物包含層は見られたものの、明確な遺構はほとんど見られなかった。 遺構は、谷地形の北側から西側の平坦面に集中しており、



- 15 -

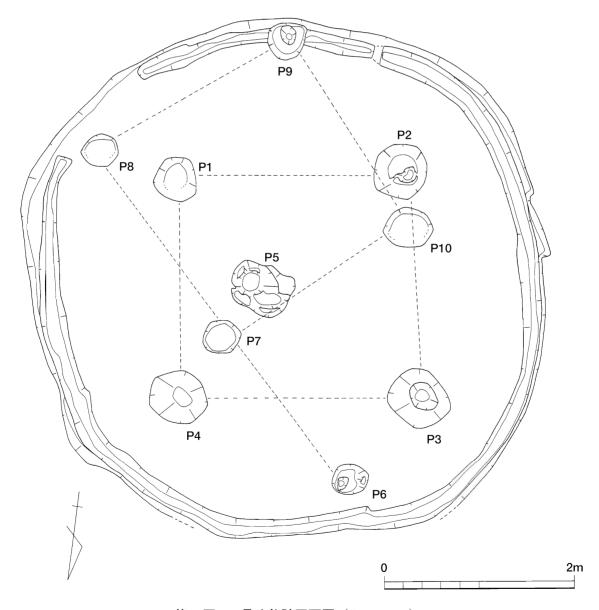
更に調査区外北側に広がっているものと思われる。

1 号建物跡 (第11~15図)

1号建物跡は、調査区西側で検出した竪穴建物跡である。直径約5.5mのやや歪な円形を呈しており、検出面から床面までは20cm程の深さしかない。柱穴が大小2種類見られる点や、東隅で壁面と壁体溝との間隔が開く部分が見られることから、同位置に2棟の建物跡が重なっているものと思われる。

第12図は、柱穴の位置関係を示したものである。P5は、竪穴建物跡の中央土壙と考えられる。その周囲には、 $P1 \sim P4$ が等間隔に配され、壁体溝を持つ 4 本柱の竪穴建物が復元できる。各柱穴の間隔は約2.4mである。竪穴建物跡の南東隅には、壁体溝が途切れる部分が見られるが、検出面が浅かった事による残存状態の問題であり、入り口などの機能は推定していない。

上記の竪穴建物跡には伴わないと考えられるのが、P6~ P10の柱穴である。西隅の1穴分が検

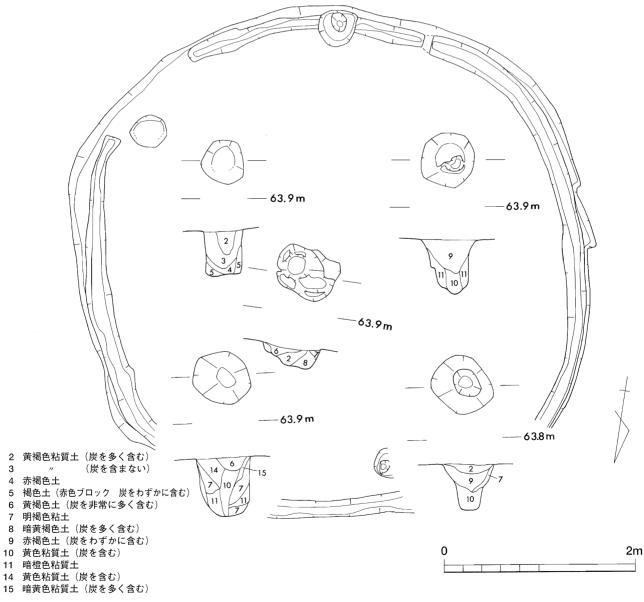


第12図 1号建物跡平面図(S=1:40)

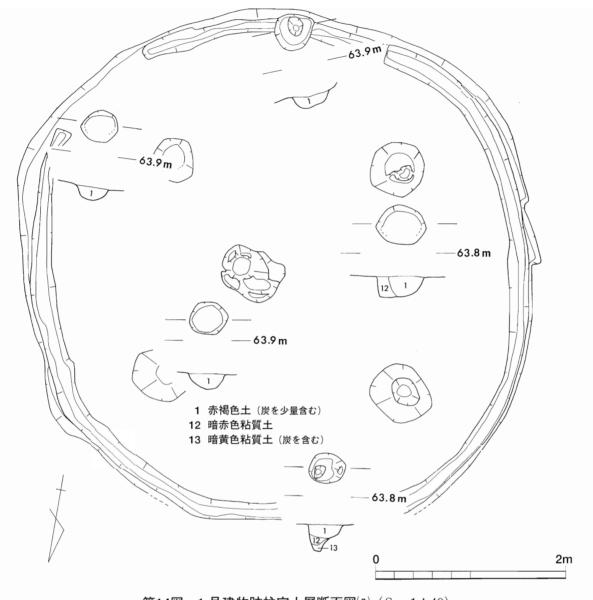
出できなかったと考えると、2 間 \times 1 間の掘建柱建物が復元できる。柱間は、桁行き梁行きとも約 2.3mを測る。

第11図の土層断面には切り合いが見られず、竪穴建物だけが埋没した事を示す土層になっており、 掘建柱建物跡の土層は見られない。また、P9が竪穴建物跡の壁体溝の中に位置しており、その切り合い関係からも、掘建柱建物跡が竪穴建物跡に先行するものであることが解る。

竪穴建物跡の部分について、柱穴の土層図を示したのが第13図である。中央土壙であるP5 は長径約60cm、短径約50cmの楕円形を呈している。断面形状には凹凸が見られる他、土層堆積状況からも、何度かの掘り直しが考えられる。埋土中に炭を含んでおり、火を使った施設と考えられる。P1~4 は柱穴と考えられ、P2 には柱根と思われる土層も見られる。P4 については、植物の根などによる攪乱の影響が考えられる他、P1の黄褐色粘質土も柱根ではない。P2の黄色粘質土を柱根と考えると、柱の直径は20cmに満たない細いものになり、柱穴に対して細い印象がある。柱根の周りの土層も特に厳重に行われている様子はなく、比較的軽い上屋構造が想像される。



第13図 1号建物跡柱穴土層断面図(1) (S=1:40)

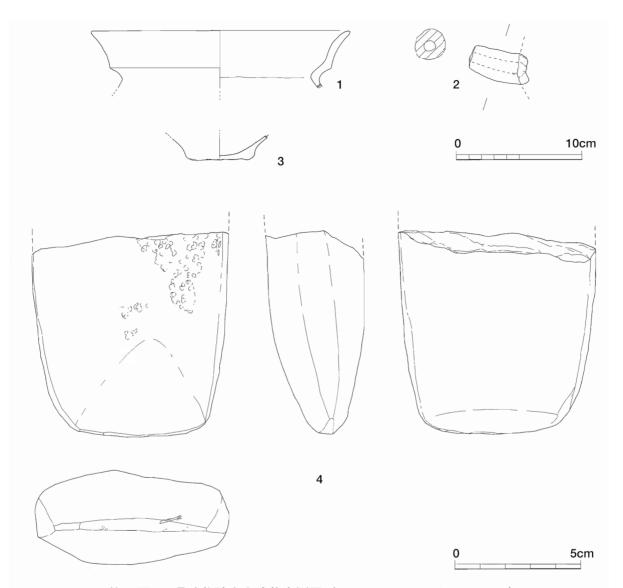


第14図 1 号建物跡柱穴土層断面図(2) (S=1:40)

この建物跡は、4 穴全ての柱穴について、最上面の土層が緩やかに落ち込んでいる点が注意される。柱根が残っていると考えられる P2 であっても、柱根が床面まで達しておらず、上層の土は柱穴内に緩やかに流れ込んでいる。特に P3 については、東側から掘り込んでいったように見える土層となっており、建物を放棄した段階で、柱を抜き取った(P2 については、中程で切断した)可能性があるのではないだろうか。

第14図は、掘建柱建物跡に伴う柱穴の土層断面であるが、いずれも非常に浅く、柱根を残すものは見られない。2 間×1 間の掘建柱建物とした場合、西隅の1 穴分を欠く。他の柱穴の位置関係から竪穴建物跡の壁体溝より内側に位置するはずであるが、検出できなかった。他の柱穴も浅いことから、竪穴建物を作った時点で削られたものと思われる。ただし、 $P7\sim10$ と P6 では、明らかに埋土が異なっている上、P6 の位置が、他の柱穴の軸線に対し、僅かにずれているように感じる。

P6 について他の用途の穴と考えると、掘建柱建物跡は、 1×1 間の小規模なものであったと考えられる。



第15図 1 号建物跡出土遺物実測図 (S=1:3,40) S=2:3

前述の通り、掘建柱建物跡は竪穴建物跡に先行すると考えられるが、竪穴建物跡の柱穴に比べ、 掘建柱建物跡の柱穴が極端に浅いことから、この建物跡の床面は、更に上方に位置し、竪穴建物を 作った際に深く削られたものと考えられる。

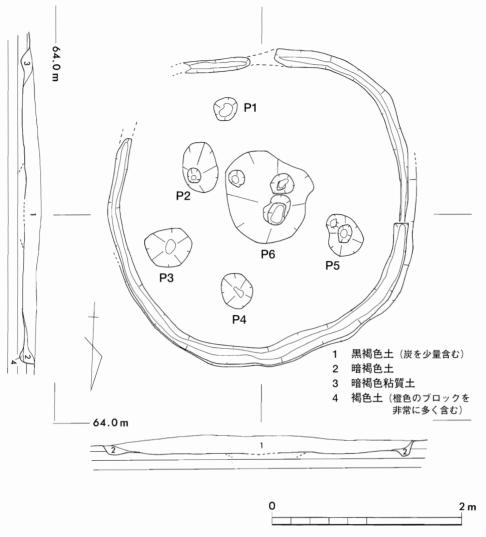
1号建物跡出土遺物(第15図)

第15図には、1号建物跡出土遺物を図示した。

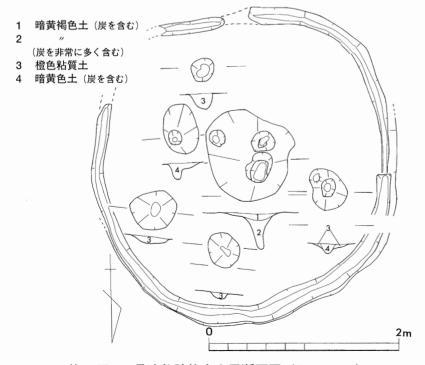
15-1は、復元口径20.4cmの弥生土器甕の口縁部の小片である。口縁端部は、つまみ出すように僅かに外反して尖り、口縁の複合部の稜は、あまり突出しない。全体的に磨滅しているが、口縁部外面には文様は入らないようである。淡桃褐色を呈し、胎土中に1mm前後の白色の砂粒を多く含んでいる。

15-2 は、注口土器である。接合部近くで、僅かに上向きに折れ曲がり、先端に向けてやや細くなっている。明黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を多く含んでいる。

15-3は、底部の小片である。底径は4.8cmを測り、中心付近は薄く作られている。底部外周近



第16図 2号建物跡平面図・土層断面図 (S=1:40)



第17図 2号建物跡柱穴土層断面図 (S=1:40)

くは厚く補強され、体部は直線的に立ち上がる。磨滅のため、調整は見えない。橙色から黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

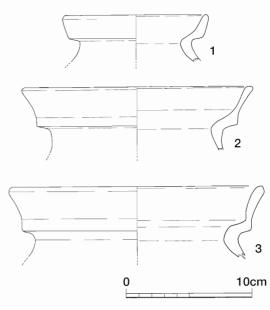
15-4は、3のでは、15-4は、3のでででででででででででででででででいる。これでは、15でででのでは、15でででのでででででででいる。ののでは、15でででのでは、15ででででででででいる。ののでは、15ででは、

おり、欠損してからの転用では ない。灰色を呈す目の細かい硬 質の石材を使用している。

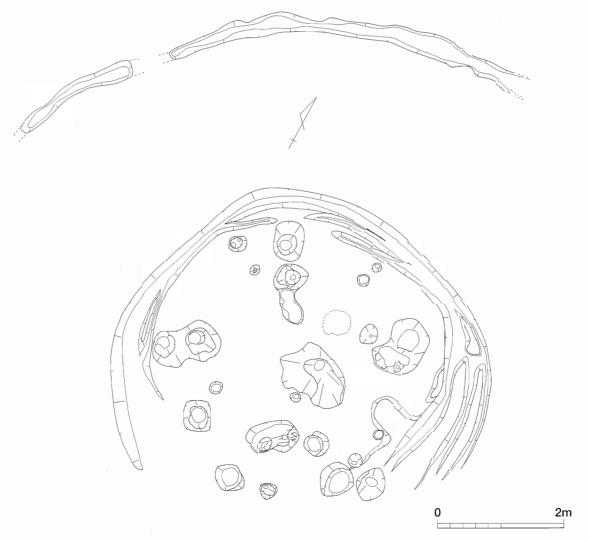
2号建物跡(第16~18図)

2号建物跡は、1号建物跡の 東側に隣接して検出した、小型の竪穴建物跡である。遺跡 西側の平坦面が終わり、谷地 形に向けて落ち込む傾斜変換 点に当たる位置で、遺構の残 存状況はあまり良くない。第16 図の通り、遺構全面にわたっ て、野津原Ⅱ遺跡での主要な 堆積土である黒褐色土だけで 埋没しており、壁体溝など周囲の部分にだけ、他の 土が見られる。

2号建物跡の平面形は、直径約3.2mの、やや歪な円形を呈している。前述の通り、埋土が非常に薄く、谷地形に向かって落ち込む南東側では、壁体溝すら検出できなかった。6カ所で柱穴状の落ち込みを検出したが、柱穴としての整った並びは見られない。壁体溝の深さから考えると、床面や柱穴に削平が及んでいるとは考えにくい。P3・4が極めて浅いレンズ状の堆積になっているいる点や、P5とP1の間に柱穴を検出できなかったことから、P2・5を生かし、2本柱の、又は、P1を加え三本柱の建物が復元できないだろうか。位置関係から、中央土壙と考えられるP6は、直上に灌木が生えていたため、攪乱を受けており、凹凸の激しい形状になっている。



第18図 2 号建物跡出土遺物実測図 (S=1:3)



第19図 3 号建物跡・溝平面図 (S=1:60)

2号建物跡出土遺物(第18図)

2号建物跡からは3点の弥生土器甕が出土している。18-1は、復元口径11.6cmを測る小型の甕である。厚く作られた口縁部は、短く、端部を丸くおさめる。全面的に磨滅しており、調整は不明である。黄褐色を呈し、胎土中に1 mm大の白色の砂粒を含んでいる。

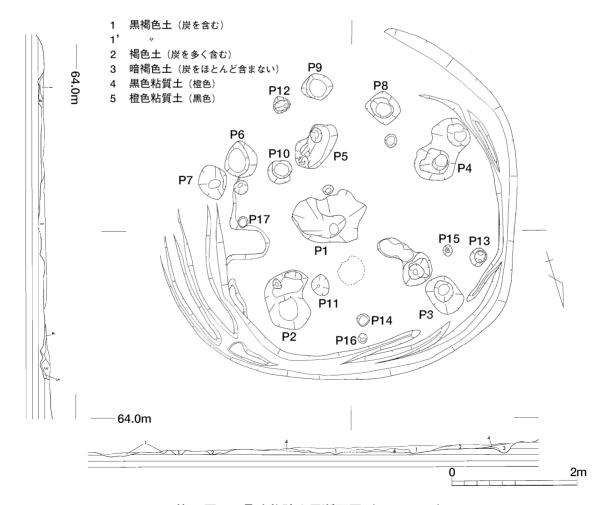
18-2は、復元口径18.4cmの甕で、破片の一部はP4内から出土した。口縁端部を肥厚させて丸くおさめるもので、内外面ともヨコナデで調整する。頸部外面に文様は見られない。橙色から黄褐色を呈し、胎土中に少量の砂粒を含んでいる。

18-3 は、復元口径20cmの甕である。18-2 と同様に口縁端部を肥厚させ丸くおさめるものである。口縁部は内外面ともヨコナデである。淡黄褐色を呈し、胎土中に 1 mm大の砂粒を少量含んでいる。

3 号建物跡 (第19~22図)

3号建物跡は遺跡中央で検出した、周囲に溝を伴う竪穴建物跡である。少なくとも2回の建て替えを行っていることが、壁体溝の状況から推定されるが、検出面が低く遺構の残りが悪いことから、何棟が重なっているか、判別できなかった。

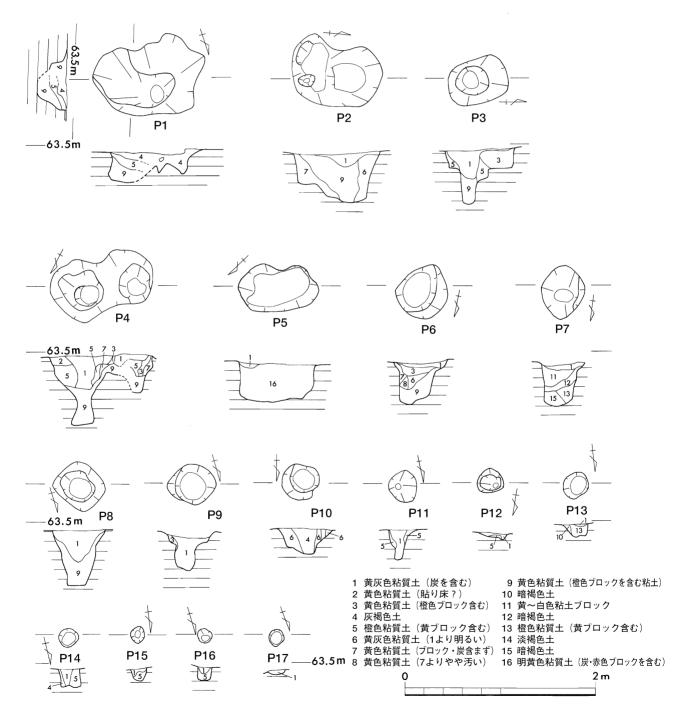
3号建物跡の北側で、長さ8mにわたって、弧形に展開する溝を検出し、3号建物跡に伴う溝と 判断した。広いところでも、幅約40cm、深さ10cm程の小さなものであるが、建物跡本体と同様に、



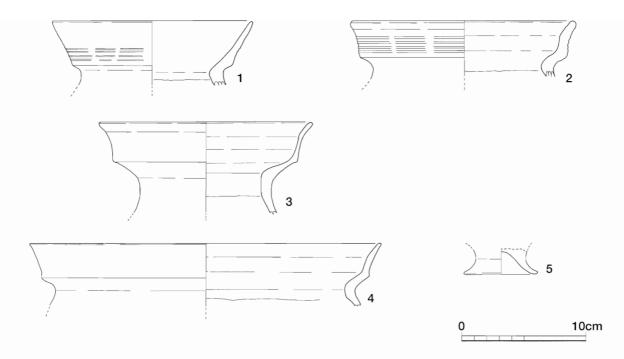
第20図 3 号建物跡土層断面図 (S=1:60)

大きく削平されているものと思われる。埋土は明褐色土1層で、建物跡本体の最外周の壁体溝の埋土に似る。弥生土器が出土しているが、磨滅した体部の小片で、図示できなかった。溝を検出した位置は、地形的に3号建物跡の上方に当たっているが、3号建物跡の南側が谷地形となって、大きく落ち込むことから、この溝は、一周していなかったものと思われる。

3号建物跡の本体部分の最大幅は約5.6mで、壁体溝の様子から、円形のものと隅丸方形のものが重なっているものと思われる。土層図(第20図)に見える1黒褐色土は、この付近の基本堆積土であり、削平が及んでいたことが想像される。3条以上の壁体溝が見られ、北側の壁体溝の切り合い関係から、建て替え時に、必ずしも拡張していったわけではないことが解るが、ほとんど埋土が見



第21図 3 号建物跡柱穴土層断面図 (S=1:40)



第22図 3 号建物跡出土遺物実測図 (S=1:3)

られない状況で、切れ切れに続く壁体溝同士の繋がり方は解らない。中央土壙を含め、柱穴状の落ち込みも、数多く検出したが、それぞれの関係は明確ではない。第20図の土層断面北隅の状況からは、2 褐色土、3 暗褐色土、4 黒色粘質土が 3 本の壁体溝のそれぞれの埋土と思われるが、他の部位では上面の遺物包含層である 1 黒褐色土が入っており、検討できない。

第21図には、柱穴と思われる落ち込みのそれぞれの土層図を示した。

P1は、柱穴などが複雑に切り合っているものと思われるが、木の根が入り、床面形状の不安定な ものとなっている。位置関係から中央土壙と思われ、4 灰褐色土には焼土・炭化物が混入している。

 $P2 \sim 4$ がいずれかの建物跡の主柱穴と思われるが、それぞれ切り合いが見られ、2回以上の使用が認められる。中心的な埋土は9黄色粘質土で、同様の土で埋没している柱穴は $P6 \cdot P8$ である。

これらの柱穴は、P1を中央土壙とし、4本柱の建物を想定できる位置関係にある。

1 黄灰色粘質土が深く落ち込んでいる柱穴は、 $P3\cdot 4\cdot 8$ の上半、 $P9\cdot 11$ があり、4 本柱か 5 本柱の建物が想定できそうである。

P7の埋土は、他の柱穴の埋土と関係が認められない。壁体溝と直接切り合う位置関係にあり、建物跡とは無関係の他の遺構である可能性も高い。他の柱穴との先後関係は不明である。P5の埋土も他に見られない埋土で、床面も不安定な形状となっており、何らかの攪乱であった可能性がある。P5の大半を埋める16明黄色粘質土は、比較的軟らかく、3号建物跡を構成する他の柱穴より新しいものと思われる。P12~P17は、浅く小さいが、上面が大きく削平されていることから、柱穴であった可能性は高い。

最外周の壁体溝の 3 暗褐色土に対応すると見られるのが、 $P3\cdot 4\cdot 8$ の上半、 $P9\cdot 11$ で、 建物跡北側に廻る溝も、この一群に伴うと思われる。最も新しい切り合いである 2 褐色土に対応するのが $P2\sim 4$ と見られる。内側を廻る 4 黒色粘質土に対応する柱穴群は見られない。

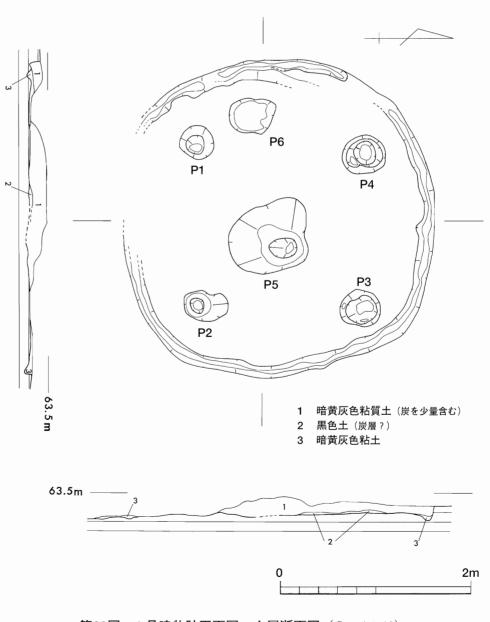
3号建物跡出土遺物 (第22図)

3号建物跡は、削平により、直接的な埋土がほとんど残存しておらず、規模の割には、出土遺物が少ない上、出土した遺物も細片がほとんどであった。

22-1は口縁部が直線的に開く甕である。復元口径は約16cmとやや小さい。口縁部内面は屈曲が小さく直線的に作られている。口縁部は、直線的に長く延び、端部は丸くおさめる。複合部の稜は、ほとんど突出しない。頸部内面にはケズリが施されるが、かなり厚く作られている。口縁部外面下方に貝による平行線文が見える。口縁部上半は剥落しているが、その形態から、疑凹線は、上端までは達していないようである。黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

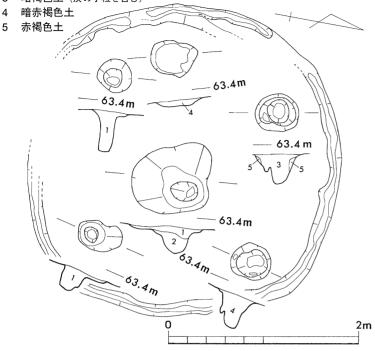
22-2は、3号建物跡壁体溝内から出土した甕である。復元口径は18cmを測り、全体に厚手に作られている。口縁部内面は、中程で明瞭に屈曲し、端部は丸くおさめている。口縁部外面に貝による平行線文を施し、複合部の稜は突出しない。黒灰色を呈し、胎土中に1mm前後の白色の砂粒を多く含んでいる。

22-3は、復 元口径17cmを測 る壺である。口 縁部は薄く作ら れ、端部は丸く おさめる。複合 部は、僅かに下 方に向けて突出 する。頸部より 上は、内外面と もヨコナデで調 整され、無文で ある。黄褐色を 呈し、胎土中に 白色の砂粒を含 んでいる。



第23図 4 号建物跡平面図・土層断面図 (S=1:40)

- 1 暗褐色土 (炭を含む)
- 2 暗褐色土 (1より暗い、炭を含む)
- 3 暗褐色土 (炭の小粒を含む)



第24図 4 号建物跡柱穴土層断面図 (S=1:40)

に水平方向に突出する。外面調整は、磨滅により不明であるが、 ヨコナデであろう。 黄褐色を呈 し、胎土中に少量の砂粒を含ん でいる。

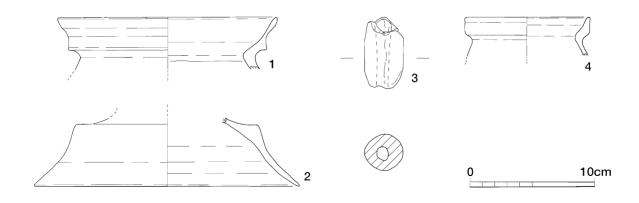
22-5は、低脚坏の脚部である。緩やかに外反する脚部を持ち、内外面ともにナデ調整である。坏部の欠損は、剥落によるものである。黄褐色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を含んでいる。

3 号建物跡出土遺物も大半は 小片で、図示できたものは上記 5 点であるが、 $22-1 \sim 3$ と $22-4 \cdot 5$ の 2 時期に分けられそうで ある。

4 号建物跡(第23~25図)

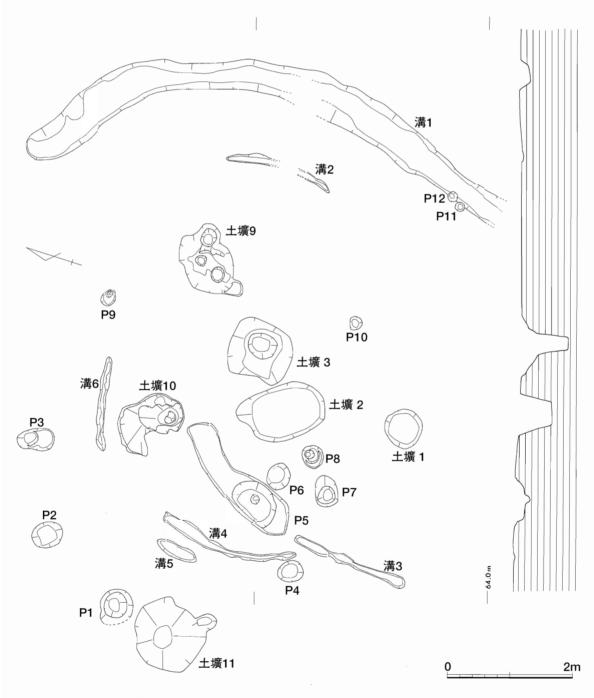
4 号建物跡は、谷地形に落ち込む平坦面の端に作られた竪穴建物跡で、3 号建物跡からは 3 m程しか離れていない。最大幅約3.3mを測る小型の建物跡で、僅かに角張る隅丸方形に近い形状である。 北側から東側の壁体溝をかろうじて検出したが、南側は谷地形の肩部に当たり、残存していなかった。

3号建物跡と同様に、直接の埋土はほとんど残存していなかったが、土層断面の西側で、2条の壁体溝と、その切り合い関係が見られ、1回の建て替えを行い、僅かに拡張していることが解る。4号建物跡からは6カ所の柱穴状の落ち込みを検出した。この内、P6は極めて浅いもので、柱穴以外の用途が考えられる。また、P5は、その位置関係から中央土壙と考えられるものである。よって、4号建物跡の柱穴と考えられるものは $P1\sim4$ の4基しか無いことになる。

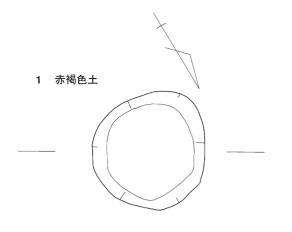


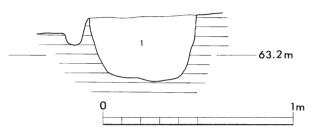
第25図 4 号建物跡出土遺物実測図 (S=1:3)

柱穴と考えられる P1~4 は、直径約30cm、深さ20~50cmの穴で、直線的に深く掘り下げられている P1を除き、壁面や床面に明瞭な凹凸がつくもので、掘り直しが考えられるが、土層断面で見る限りは、切り合い関係は見られない。壁体溝の土層から建て替えが予想されるにも関わらず、柱穴に切り合い関係が認められないのは、ほぼ同位置に深く大きな柱が立てられたためと思われる。 P5 は、位置関係から中央土壙と考えられるもので、炭化物を含む 2 暗褐色土が流入している。 P6 は、柱穴とは思えないが、土層堆積状況からは、他の柱穴と、明瞭な差が見られず、4 号建物跡に直接伴うものと思われるが、その用途は不明である。壁体溝は、北西隅の一角と南側が検出できなかったが、北西隅については他の遺構との切り合いに、南側については谷地形に関わる流失によるものと思われ、入り口などの用途は想定していない。

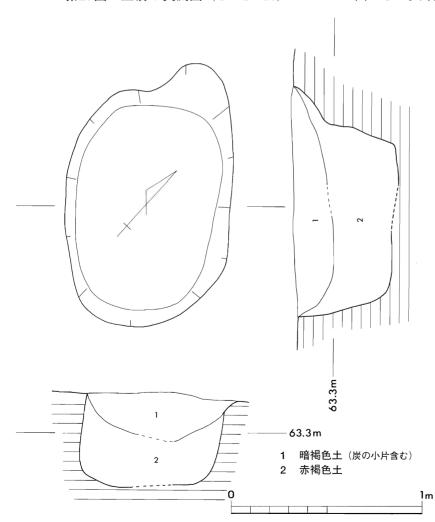


第26図 建物跡と思われる遺構群平面図 (S=1:60)





第27図 土壙 1 実測図 (S=1:20)



第28図 土壙 2 実測図 (S=1:20)

4号建物跡出土遺物(第25図)

4 号建物跡からは、土器 3 点と土錘が出 土した。

25-1は、復元口径約18cmの甕である。 口縁部内面は直線的に頸部まで続くが、口 縁部外面は中程で大きく屈曲する。口縁端 部は、一旦肥厚して丸くおさめる。複合部 の稜は、僅かに水平方向に突出する。口縁 部は、ヨコナデによって調整し、文様は施 さない。橙色を呈し、胎土中に1 mm以下 の白色の砂粒を含んでいる。

25-2は、鼓形器台の脚台部である。脚部は、緩やかに外反しながら先端に向けて細くなり、先端を尖らす。複合部の稜は突出しない。外面調整はヨコナデで、内面には

横方向の丁寧なケズリが施される。黄褐色を呈し、胎土中に1mm程度の白色の砂粒を含んでいる。

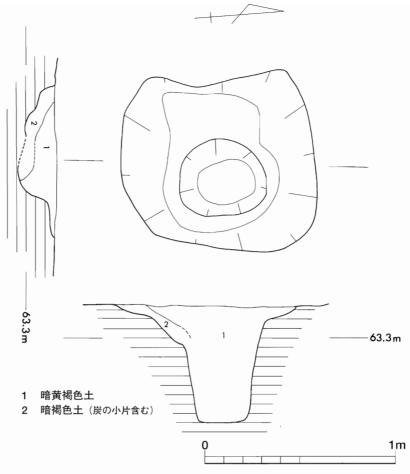
25-3は、土錘である。 一端を欠くが、残存長 5.8cmを測る柳葉形を呈し ており、太さは、3.1cmで ある。口径9mmの穴を直 線的に穿つ。明黄褐色を呈 し、胎土中に1~3mmの 砂粒を含んでいる。野津原 II遺跡(西区)では、他に 3点の土錘が出土してい る。

25-4は、復元口径約10cmの、小型の甕である。 全体に磨滅しており、細かい形態は解らないが、口縁部外面に、へラによる凹線文を数条持つと思われる。 厚く、短い口縁部は直立す る。黄褐色を呈し、胎土中に少量の砂粒を含んでいる。25-1・2とは時期差が見られ、混入と考えられるものである。

建物跡と思われる遺構群(第26~30図)

3・4号建物跡の北側には、6条の溝と多数の柱穴と考えられる落ち込みが見られた。この付近は、相当の削平が及んでいるものと見られるが、溝の多くは弧を描いていることから、3棟程度の竪穴建物が存在したものと思われる。

溝1は、調査区東端を廻る大きな溝である。長さ7.3mにわたって検出し、緩やかに弧を描いている。南



第29図 土壙 3 実測図 (S=1:20)

側は、谷に向かって消えており、更に続いていたものと思われる。第26図の点線部分は、土壙 5 によって切断されている部分である。幅約60cm、深さ約40cmを測り、断面「U」字形を呈している。土層断面の切り合い関係から土壙 5 の方が新しいことを確認している。埋土上面から弥生土器小片を採取しているが、直接伴うと思われる遺物は出土していない。

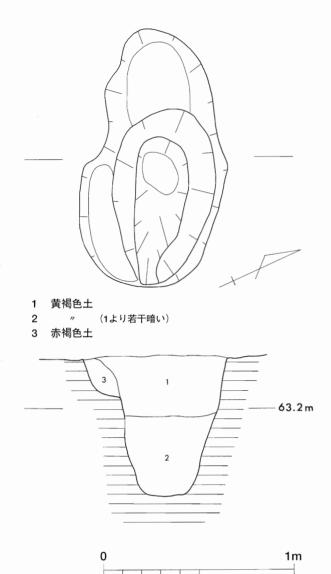
溝2は、溝1に並ぶような位置で検出した細く浅い溝である。検出できた長さは約1.7mで、更に両側に続くものと思われる。中程の点線部分は、土壙5によって切断されている部分(第26図)である。断面箱形を呈した幅約10cm、深さ5cm程の溝で、僅かに弧を描く形になっていることから、円形の竪穴建物の壁体溝の一部と思われる。それぞれの位置関係から、溝2を壁体溝とする竪穴建物があり、その外周に溝1が巡っていたものと考えられる。

土壙 9 は、溝 $1 \cdot 2$ に関係するものと思われるが、複数の切り合いや、木の根等の攪乱があり、 床面の形状も凹凸が激しい。性格は不明である。

土壙 1 (第27図) は、4 号建物跡の壁体溝の外側で検出したもので、土壙としたが、柱穴であった可能性が高い。床面はほぼ平らで、壁面は真っ直ぐに立ち上がっている。直径約60cmの円形で、深さは約30cmである。

土壙 2(第28図)は、長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形の土壙である。深さは約50cmあり、床面は平らである。

土壙3(第29図)は、一辺約1mの方形の土壙である。2段になって落ち込んでおり、深さは約



第30図 土壙 4 実測図 (S=1:20)

70cmである。検出面から斜めに入る 2 暗褐色土には、炭を含んでおり、建物跡の中央土壙として使用されていた可能性がある。最深部は直径約30cmの円形で、平坦になっており、壁面は、床面から50cmほどの高さまで、垂直に立ち上がっている。建物跡の中央土壙として使用される以前に、同位置に柱穴があり、切り合っているものと思われる。

溝3(第26図)は、検出長2mの、直線的に延びる溝である。幅は15~20cmあるが、深さは5cmに満たない。方形の竪穴建物跡の壁体溝とも考えられ、土壙1との関係も考えられる。野津原Ⅱ遺跡(西区)では、方形の建物跡は検出していないが、東斜面上方に位置する野津原Ⅱ遺跡(東区)や、西側の山守免遺跡では方形の竪穴建物跡が見られる。

溝4(第26図)は、弧状に延びる、検出長2.2mの溝である。幅約20cmで、溝3と同様に極めて浅い。溝4が描く円弧の内側には、4カ所で、柱穴状の浅い落ち込みがあり、円形の竪穴建物を構成するものと思われる。

溝5は、溝4の外側に並んで見られる溝で、 長さ70cm程しか検出できなかった。壁体溝 と考えると、溝4が構成する竪穴建物の建て 替えなどが考えられる。

溝 6 (第26図) は検出長1.5mの東西に延びる溝で、西側で僅かに南に曲がって消滅する。西側の 消滅点からの延長上には、溝 4・5 があり、そのいずれかに続くものと思われる。

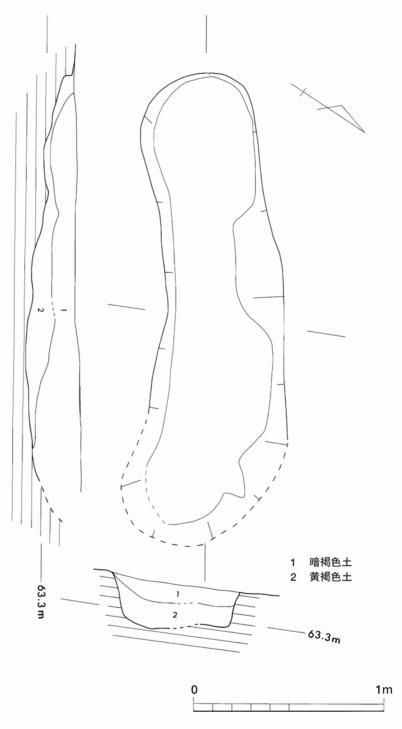
溝 $4\sim6$ の北側から西側にかけても、柱穴状の落ち込みが、いくつか見られる。第26図の P1~3 は、いずれも直径50cm前後の穴で、ほぼ1.5mの間隔で弧を描いて並んでいる。柱穴と仮定すると 8 本柱程度の大型竪穴建物が想像される。また、P4~8 が集中して見られる部分が建物跡の一部 と思われる他、P9~12など非常に小さい穴も柱穴であった可能性がある。

土壙10は、複雑な切り合いや、木の根による撹乱が入っていたが、溝6や土壙3、P5などに関係する可能性がある。

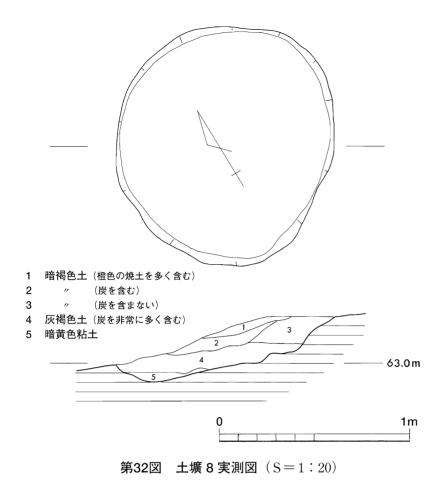
土壙 4 (第30図) は 3 号建物跡東側で検出した楕円形の土壙である。長径約1.3m、短径約0.7mを 測る。3 基以上の小さな土壙が切り合っているものと考えられ、当初は、深さ30cm程度の土壙 2 基であったと思われる。第30図の土層断面では、3 赤褐色土が他の土層によって切られており、後に

深さ70cmの土壙が掘られ、現在の形状になったものと思われる。当初の2基の土壙は、長さ70cm程度、後に掘られた土壙が長さ90cm程度であったと考えられる。土壙4の機能や、周辺の建物跡との関係は不明で検出し、3号建物跡と無関係と考えたP7と、柱穴の可能性を指摘した土壙1を結ぶと、この土壙4を挟んで一直線に続く、等間隔の位置となっている。それぞれの間隔は約2.4mとなる。

土壙 5 (第31図) は、調査 区東端に位置する、溝1・2を 切って東西方向に延びる長楕 円形の土壙である。南側に向 けて僅かに湾曲している。東 側で溝1と切り合っているた め肩が明瞭ではないが、土層 断面からは、長さ2.5mを測る。 中程から西側では幅約60cm、 深さ約20cmを測るが、東側で へ向かうとやや広く、深くな る。床面は平坦に近く南北の 壁は急傾斜で立ち上がるが、 東西の端部は、緩やかになっ ている。土壙全体の深さや、 西側の壁面の形状から、これ



第31図 土壙 5 実測図 (S=1:20)



土砂の流入が東側から見られたが、土壌5の土層堆積状況は、主に西側からの流入になっている。よって、土壌5が人為的に埋め戻されたものでない場合、土壌5より東側の斜面は、植物が繁茂した状態になっており、東側からの土砂流入が少なかったと考えられる。

以上の遺構の他、3 号建物 跡北側には、溝7・土壙12が ある(第8図)。

溝7は、南北に延びる長さ約3.4m、幅約0.8mの浅い溝で、西側に向け、僅かに湾曲している。溝7からは弥生土器と思われる土器小片が出土しているが、図示

できなかった。溝7付近から西側、1・2号建物跡より北側にかけては後世の削平面で、完全に平坦になっており、遺構の残存は望めなかった。なお、この付近からは、全く遺物が出土していない。土壙12は、その削平面中に見られる、一辺約1.6mの正方形の土壙であるが、埋土が非常に軟らかく、新しいものと思われる。

調査区北東側では、溝 $1\cdot 2$ 、土壙 5 を検出した段階で、遺跡が更に北側に広がる可能性が考えられたため、遺跡北東側の緩斜面の部分(第 7 図)について拡張したが、遺構の広がりは見られなかった。また、この付近からは、遺物もほとんど出土しなかった。

調査区中程を南北に横断する谷地形は、溝 1 北端付近を分水嶺とし、それぞれ北と南に落ち込む(第7図)。南へ向かう谷地形の内側は、黒色土が厚く堆積し、多量の遺物を含んでいた。含まれる遺物は、弥生土器の小片がほとんどで、他に僅かに石器類を含んでいるが、古墳時代以降の遺物は含まれなかった。1~4号建物跡など野津原 II 遺跡(西区)のほとんどの遺構は、この谷地形の北から西側の肩部に立地している。谷地形内部からは遺構は検出できなかった。

東側斜面の土壙 (第32図)

野津原 II 遺跡(東区)から続く遺跡東側の急斜面では、ほとんど遺構が見られなかったが、調査区南側の標高63 m付近(第 7 図)で、土壙 8 を検出した。土壙 8 は平面楕円形で長径約1.3 m、短径約1.1 m、深さは20 cmほどである。土層図で見ると、 $1\cdot 2$ の土は流入土と考えられるが、土壙内に堆積している $3\sim 5$ は、水平堆積となっており、斜面下方に当たる西側の壁が、少なくとも20 cm は高かったものと思われる。床面には小さな凹凸があるものの、一応平坦で、周囲の壁面は緩やか

に立ち上がる。4 灰褐色土には、焼土ブロック、炭化物を含んでおり、火を使う施設(炭窯か)と 考えられる。土壙 8 やその周辺からは遺物は出土していないが、埋土が比較的軟らかいことから、 少なくとも弥生時代より新しいものと思われる。

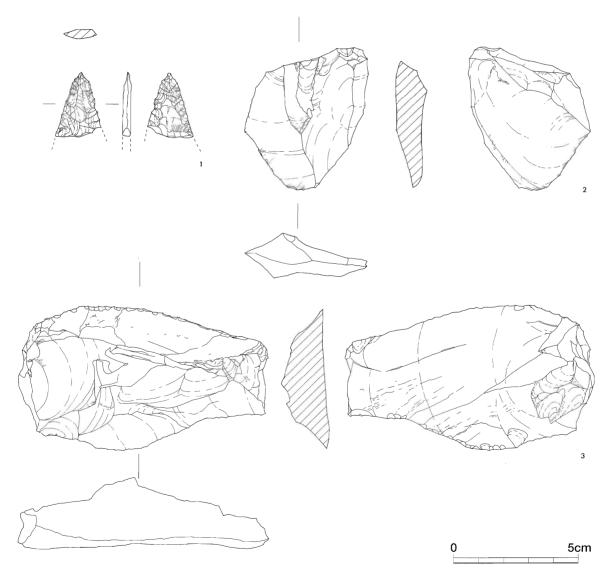
第4節 遺構に伴わない遺物

野津原Ⅱ遺跡(西区)では、谷部に多量の弥生土器を含む遺物包含層が見られたが、その大半は 小片で、図示できたものは僅かであった。

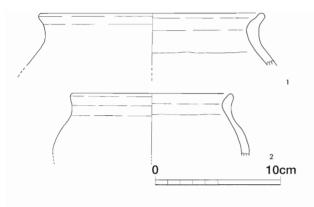
石器(第33図)

谷部より、黒曜石や玉随が多く出土しているが、石器として機能・用途を推定できるものは少なく、大半が、剥片と判断されるものであった。

33-1は、黒曜石製の石鏃である。基部を欠くが、残存長27mm、厚さ3mmを測る。一部不規



第33図 石器実測図 (S=2:3)



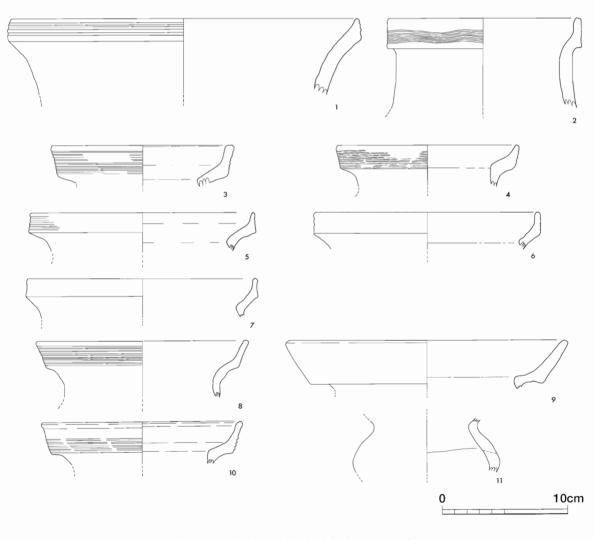
第34図 弥生土器実測図(1) (S=1:3)

則になっているが、面毎の剥離の順番が逆方 向になっている。

33-2は、スクレーパーと考えられるものである。褐色〜乳白色を呈す硬質の石材(玉随か)を使用している。刃部には、下端の大半を使用しており、使用による削痕が僅かに見える。各面で剥離方向が異なっており、計画的に取られた剥片ではない。

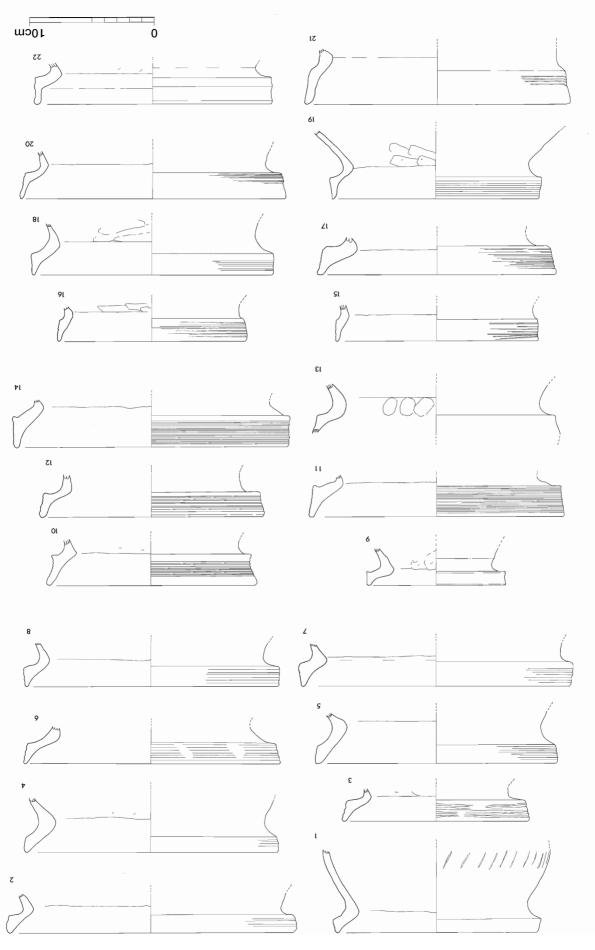
33-3も、33-2と同様の石材を使用した スクレーパーと考えられるものである。 ネガ

面上半は自然風化面をそのまま残しており、その端部には、刃潰し状に、小さな剥離が多く見られる。下端を刃部として使用しているが、使用痕は僅かしか見えない。ポジ面刃部の小さな剥離は、刃部を成形したと言うよりも、使用による剥落に見える。全体の剥離方向は一定せず、計画的に剥離されたものではない。



第35図 弥生土器実測図(2) (S=1:3)

(E:I=S)(E)図順実器土主統 図**9**E策



壺 (第34・35図)

34-1・2は頸部より上が極端に短いもので、壺と判断したものである。34-1は、復元口径 18cmで、口縁端部を丸くおさめるものである。内面頸部より下方には、横方向のケズリが入るが、一部でその上をナデている。34-2もほぼ同様の器形を呈しており、内面にもケズリの痕跡を残さず、縦方向にナデている。両者とも、胎土中に白色の砂粒を含み、橙褐色から黄褐色を呈す。

35-1は、口縁部外面に3条の直線文を施す壺である。口縁端部は内面側からつまみ上げるようにアクセントを持ち、頸部から緩やかに外反している。内外面ともヨコナデで調整し、ミガキは見えない。暗橙褐色を呈し、胎土中に1~3mmの砂粒を含んでいる。

35-2は頸部が直立する壺である。口縁複合部は僅かに下方に突出し、上端部は丸くおさめる。 口縁部外面に櫛による直線文を施す。頸部外面は磨滅により調整不明だが、内面はヨコナデである。 淡褐色を呈し、胎土中に微砂粒を含んでいる。

 $35-3\sim7$ は、口縁部が直立から内傾するものである。35-3は、口縁端部に面を持つもので、口縁部外面には貝による直線文を施す。明灰色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。 $35-4\cdot5$ も同様の直線文を持つものだが、口縁端部を薄くし、尖らせるものである。 $35-6\cdot7$ は口縁部外面をヨコナデし、無文にしたものである。いずれも黄褐色から赤褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

35-8~10は、口縁部を外側に向けて開くものである。35-9では磨滅しているが、いずれも口縁部外面に平行線文を施す。35-9は、複合部を下方に向けて突出させる。いずれも黄褐色を呈し、胎土中に比較的大きな白色の砂粒を含んでいる。

35-11は、小型の壺の体部で、接合痕を残している。磨滅により調整は不明である。明黄褐色を呈し、胎土中に1mm程度の白色の砂粒を多量に含んでいる。

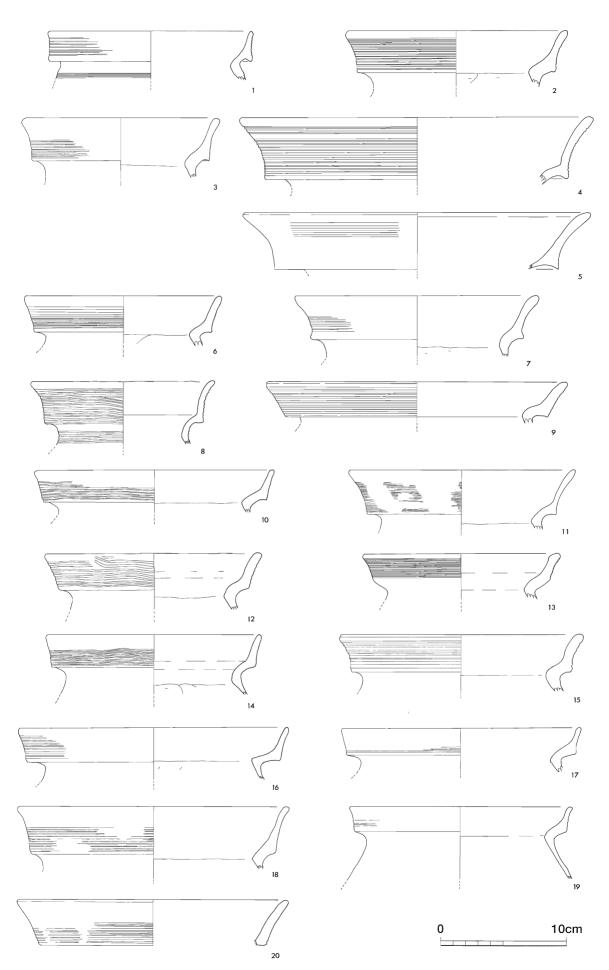
甕 (第36~40図)

36-1-8 は、口縁部の拡張が短いものである。36-1 は、口縁部外面をヨコナデし、無文にしている。複合部の突出はいずれもほとんど無い。36-1 は、口縁部をほとんど拡張しないもので、頸部付近から厚手に作り、口縁端部を上に持ち上げるように突出させる。体部外面に貝による刺突文を施す。36-2 は、36-1 と同様の器形を呈すものであるが、口縁部外面に丸みを持ち、ヘラによる直線文を施したものである。同様の器形のものに36-4 があるが、磨滅しており、細かい特徴は不明である。36-5-8 は、同様の器形で、櫛か貝による平行線文を施すものである。36-1-8 は、褐色から橙褐色を呈すものが多く、胎土中の砂粒が小さいものが多い。

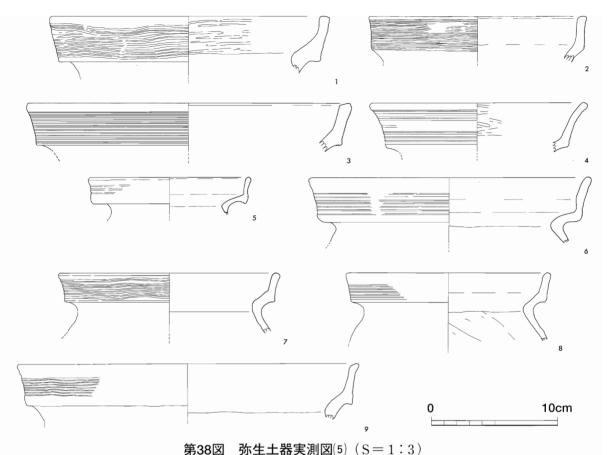
36-9は、小型の甕である。口縁部外面を強くヨコナデし、直立して立ち上がる口縁端部は丸くおさめている。複合部は下方に突出させている。赤褐色を呈し、胎土中に2mm程度の白色の砂粒を含んでいる。

36-10~14は、口縁複合部を垂下させるものである。口縁部外面に、36-10は貝による、他は櫛による平行線文を施す。黄灰色から桃褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含んでいる。口縁部内面をヨコナデし、頸部付近から下方にケズリを施すが、36-13は、頸部内面に指頭圧痕を残す。暗赤褐色を呈し、胎土中に白色の微砂粒を僅かに含んでいる。

36-15は、頸部の短いもので、口縁部外面にヘラによる直線文を引く。複合部は僅かに下方に突



第37図 弥生土器実測図(4) (S=1:3)



3,500 H 3,522 HB 56,535 (6 1 1 0

出する。

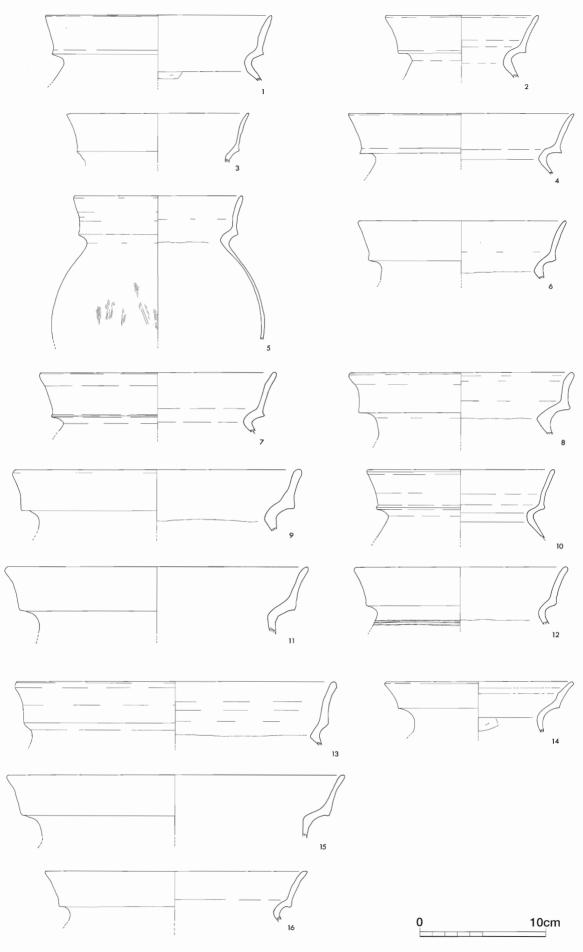
36-16~21は、口縁端部を尖り気味に細らせるものである。口縁部外面には櫛か貝による平行線 文を施し、複合部の突出はほとんど無い。黄灰色から褐色を呈し、胎土中に1mm以下の小砂粒を 含むものが多い。

36-22は、短く無文の口縁を持つものである。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともヨコナデを施す。淡褐色を呈し、胎土中に少量の砂粒を含んでいる。

 $37-1\sim5$ は、口縁部外面に貝による疑凹線を施し、複合部を垂下させるものである。37-1は、比較的短い口縁部を直立させ、複合部を下方に大きく垂下させる。 $37-2\sim5$ は、僅かに外傾する口縁部を長く取り、口縁端部を丸くおさめるものである。 $37-4\cdot5$ は、口縁部を薄手に作り、大きく外反させるものである。淡褐色から黄褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含むものが多いが、37-5は、2 mm前後の砂粒を多量に含んでいる。

37-6~20は、複合部の突出がほとんど無いものである。いずれも口縁部外面に貝による平行線文を施す。37-8は、口縁部と同じ原体を使って、頸部にも平行線文を施す。37-11を除き、口縁部を厚手に作り、端部を丸くおさめるものが多い。37-11は、口縁部を薄手に作り、やや外反させるもので、貝による平行線文をナデ消そうとしている。37-13は、全体に丸みを持つ器形で、口縁端部を丸くおさめるが、やや内側にアクセントを持つものである。暗黄褐色から褐色を呈し、胎土中に1mm程度の砂粒を含むものが多いほか、37-15は、明灰色を呈し、多量の砂粒を含んでいる。37-10は、外面にススが付着している。

38-1~9は、口縁部外面に平行線文を施し、口縁端部に面を持つものである。38-1.2は櫛



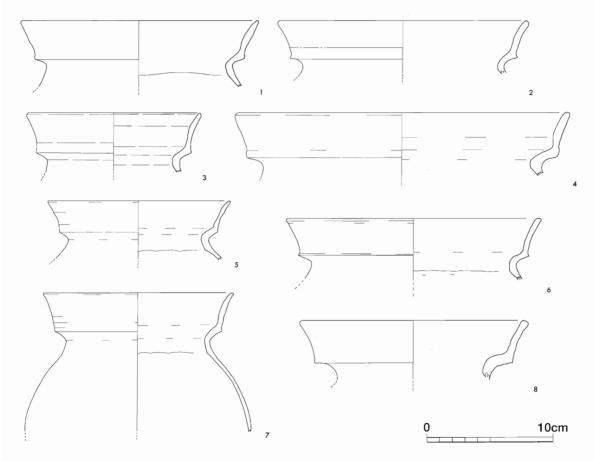
第39図 弥生土器実測図(6) (S=1:3)

による、他は貝による平行線文である。口縁端部の形状は、完全な面を持つ38-1-4と、丸みを帯びる38-5-8 があり、38-9 は、外面側に更にアクセントを持つ。口縁部内面は、基本的にヨコナデだが、 $38-1\cdot4$ は横方向のヘラミガキが見える。38-5 は小型のもので、複合部を下方に僅かに突出させている。胎土中に砂粒をほとんど含まないもの($38-1\cdot3\cdot4\cdot6\cdot8\cdot9$)と $2\,\mathrm{mm}$ 程度の砂粒を多く含むもの($38-2\cdot5\cdot7$)がある。明橙色から褐色を呈している。38-3 は、外面にススが付着している。

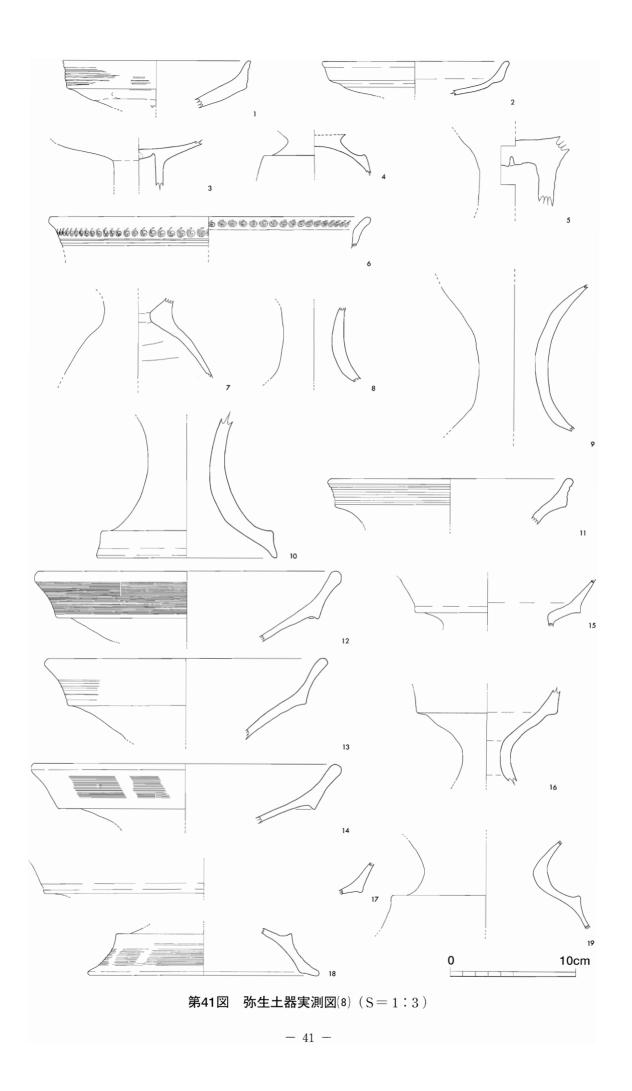
 $39-1\sim6$ は、口縁部外面が無文で、口縁端部を尖らせるものである。口縁部を、比較的薄手に作り、緩やかに外反させた後、口縁端部を尖り気味につまみ出している。いずれも、複合部を僅かに水平方向に突出させる。頸部より上は内外面ともヨコナデする。39-2 は、小型のもので、復元口径は約12cmである。39-5 は、体部外面が縦方向のハケメ、内面がケズリである。いずれも黄褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含んでいる。体部まで残る39-5 は、外面にススが付着している。

39-7~16は、口縁端部を丸くおさめるものである。いずれも口縁部は薄手に作られ、緩やかに外反する。 $39-7\cdot14$ は、口縁部内面で明瞭に折れ曲がっている。複合部は水平方向に僅かに突出するが、 $39-16\cdot17$ は垂下する。39-12は、ハケメ原体を使用して、体部上方に平行線文を施す。暗黄褐色から橙色を呈し、胎土中に比較的大きな砂粒を含んでいるものが多い。

 $40-1 \sim 8$ は、口縁端部に面を持つものである。口縁部は緩やかに外反しながら、長く延びる。複合部の稜は、僅かに水平方向に突出するものが多く、40-6 は、明瞭に段を持っている。口縁部内面は、中程から複合部近くで、一旦窪むように稜を持つ。口縁部は内外面とも、ヨコナデである。



第40図 弥生土器実測図(7)(S=1:3)



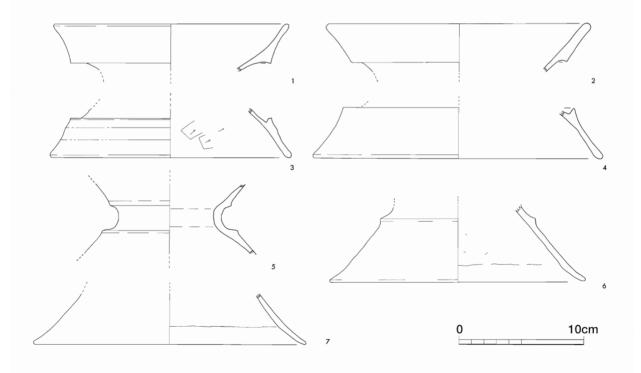
頸部内面には、面を持つようにナデが施され、その下方から横方向にケズリを施している。40-4 は、口縁部を直線的に延ばしており、強くは外反しない。40-5 は、口縁部を非常に薄く造るもので、口縁部外面には強いヨコナデによる稜を残している。40-6・8 は、口縁端部の面が広く作られるもので、外側に向けて、強く突出する。橙褐色から黄褐色を呈すものが多く、比較的大きな砂粒を含むものが多いが、40-4 は、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。40-2 は、外面にススが厚く付着している。

高坏・器台(第41・42図)

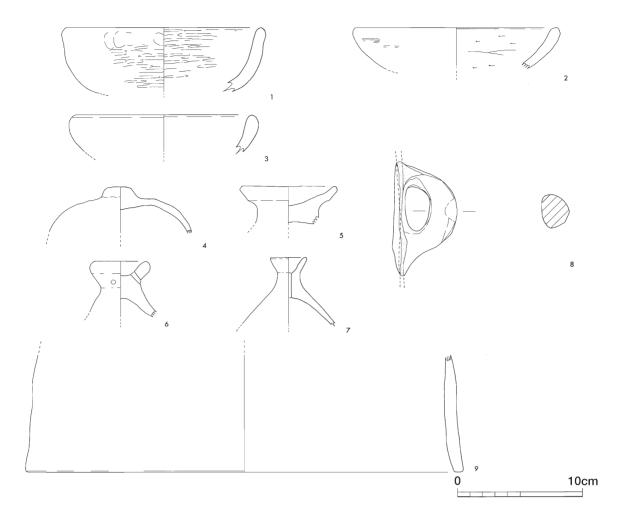
41-1は、複合口縁を持つ高坏である。ほぼ直立して立ち上がる口縁部を持ち、外面には、櫛による平行線文を施す。複合部の突出は見られない。全体に磨滅しており、内面調整は見えないが、外面の坏部下方には、僅かにハケメが見える。淡黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を多量に含んでいる。

41-2は、口縁部が内湾する高坏である。口縁部が肥厚して内湾するもので、坏部下面が複合口縁状に僅かに窪む。内面はミガキと思われるが、磨滅しており不明である。黄褐色を呈し、胎土中に1mm大の砂粒を含む。

41-3は、脚部が直線的に延びるものである。円盤充填法で作られているようである。黄褐色を呈し、胎土中に1 mm大の砂粒を多く含んでいる。41-4は、小型の、複合口縁状の脚台部を持つものである。筒部が非常に短く、複合部の稜は上方に向けて突出する。磨滅しており調整は不明である。黄褐色を呈し、胎土中に少量の砂粒を含んでいる。41-5は、坏底面に脚接合時の刺突痕を3カ所で持つものである。全体に厚手に作られている。磨滅しており、調整は不明だが、淡褐色を呈し、胎土中に1 mm前後の砂粒を含んでいる。



第42図 弥生土器実測図(9) (S=1:3)



第43図 弥生土器実測図(10) (S=1:3)

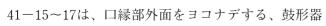
41-6は、器台の口縁部であろうか。内面で大きく屈曲し、外反する器形で、口縁端部は肥厚して丸くおさめる。内外面ともヨコナデの後、渦巻き状のスタンプを密に押している。外面には、スタンプ文下側に2条の凹線を引く。黄褐色から黒褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含んでいる。

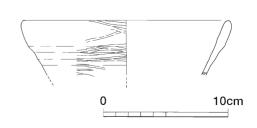
 $41-7\sim9$ は、器台の筒部である。筒部が短く内湾するもの(41-7)と、長く直線的に延びるもの($41-8\cdot9$)がある。いずれも黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

41-10は、鼓形器台の筒部から脚台部である。脚台部は複合口縁状を呈し、無文である。複合部の稜は、上に向けて僅かに突出する。黄褐色を呈し、胎土中に1 mm前後の砂粒を含んでいる。

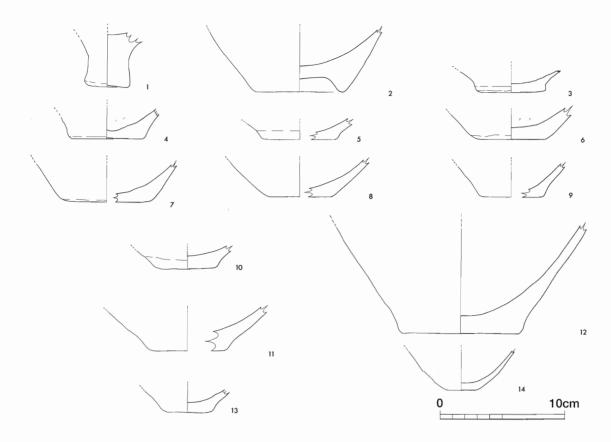
41-11は、鼓形器台の口縁部で、外面に櫛による平行線文を施すものである。短く厚い複合口縁を持ち、端部は丸く作っている。黄灰色を呈し、胎土中に小砂粒を含む。

41-12~14は、鼓形器台の口縁部で、口縁部外面に 貝による平行線文を施すものである。複合部の稜は、 41-14は大きく垂下するが、他のものは、あまり突出 しない。黄褐色から橙色を呈し、胎土中に白色の砂粒 を僅かに含む。41-14は、外面にスス状の黒色付着物 が見られる。





第44図 弥生土器実測図(11) (S=1:3)



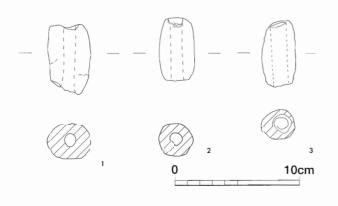
第45図 弥生土器実測図(12) (S=1:3)

台の受け部である。いずれも磨滅しており、調整は見えない。黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く 含む。

41-18は、鼓形器台の脚台部である。外面には、貝による平行線文が施され、複合部は上に向けて突出する。端部を丸く作り、内面側で稜を持つ。黄褐色を呈し、胎土中に 2 mm以下の砂粒を多く含む。

41-19は、口縁端部を無文にする鼓形器台の内、筒部が比較的短いものである。脚台部外面は磨滅しているが、ヨコナデであろう。淡黄褐色を呈し、胎土中に1mm前後の砂粒を多く含んでいる。

 $42-1\cdot 2$ は、鼓形器台の口縁部である。直線的に大きく開く口縁部を持ち、端部は丸く作る。 外面はヨコナデで調整し、複合部は僅かに下方に垂下する。淡黄色を呈し、胎土中に 2 mm前後の



第46図 弥生土器実測図(13) (S=1:3)

砂粒を含む。 42-3・4は、鼓形器台の脚台部である。

42-3・4 は、鼓形器台の脚台部である。 僅かに内傾しながら直線的に延びるもの で、端部は丸く、複合部の稜は上方へ強く 突出する。外面はヨコナデ、内面は横方向 のケズリが施される。黄褐色を呈し、胎土 中に白色の砂粒を多く含む。

42-5 は、鼓形器台の筒部である。筒部の短い器形で、口縁部、脚台部は直線的に長く延びる。複合部の稜は、あまり突出し

ない。淡黄褐色を呈し、胎土中に少量の砂粒を含む。

42-6・7 は、脚台部の長い鼓形器台である。筒部の短い器形と考えられ、薄手の脚部が直線的に長く延び、脚端部近くで、折れ曲がるように外反する。明黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を多く含む。

43-1~3は、鉢か低脚坏と考えられるものである。いずれも厚手の体部が緩やかに内湾して口縁部を丸く作るもので、43-1は、口縁部外面を除き、内外面ともヘラミガキで仕上げている。口縁部外面には指頭圧痕が僅かに残る。43-2の内面は、ケズリに見えるが、表面が剥落したものかもしれない。外面調整はヨコナデと考えられるが、僅かにハケメ状の痕跡が見える。43-3は、ヨコナデである。橙褐色から赤褐色を呈し、胎土中に1mm大の白色の砂粒を含んでいる。

43-4 は、蓋であろうか。断面台形のつまみが付き、体部は緩やかに内湾する。全面的に磨滅が進んでおり、調整は不明である。淡褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含んでいる。

 $43-5\sim7$ は、蓋のつまみと考えられるものである。43-5 は、つまみが広く開くもので、外面に複合口縁状の段を持つ。暗褐色を呈し、胎土中に 3 mm程度の砂粒を含んでいる。43-6 は、2 方向に円形のスカシを持つ蓋である。淡黄褐色を呈し、胎土中に 2 mm程度の砂粒を含む。43-7 は、形態から蓋と判断したが、縦に貫通する孔が開けられているものである。つまみは、外傾して立ち上がり、体部はやや狭く、広がらない。黄褐色を呈し、胎土中に $1\sim2$ mmの砂粒を含む。

 $43-8\cdot9$ は、山陰系甑形土器である。43-8 は、把手部分の破片で、底部への取り付けは、孔を開けて差し込むものではない。43-9 は、下端部の破片で、僅かに内傾して立ち上がるものである。淡黄褐色を呈し、胎土中に $1\sim3$ mmの白色の砂粒を含む。

44は、外面にヘラミガキを施す土器の口縁部の小片で、鉢であろうか。復元口径は約16cmである。口縁部近くで、肥厚して端部を丸くおさめるもので、体部は直線的に延びる。明黄褐色を呈し、胎土中に、1 mm前後の白色の砂粒を含んでいる。

底部(第45図)

底部の破片は多く出土しているが、上半の形態や調整が解るものは無い。

45-1 は、底部が柱状に高くなるものである。内底面までの高さは約 $4~{
m cm}$ あり、底面は僅かに上がる。底径は $33{
m mm}$ である。

45-2 は、底部を、断面三角形の高台状に作り出すものである。体部は、僅かに内湾して立ち上がる。底部内面には指頭圧痕が多く残り、外面はナデである。内面は、磨滅しており、調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土中に1~2 mmの砂粒を含んでいる。

45-3~14は、平底のものである。この内、45-12は、体部の下半まで残るもので、体部は、外傾して直線的に立ち上がっている。磨滅しており、調整は不明である。黄褐色を呈し、胎土中に1mm大の白色の砂粒を含んでいる。

45-14は、底径の小さいもので、復元底径約2 cmほどのものである。赤味がかった黄褐色を呈し、胎土中に1 mm大の砂粒を含んでいる。

土錘 (第46図)

谷部の包含層中からは、少量の土錘が出土している。いずれも両端が僅かに窄まる平面柳葉形を

した管状土錘である。全面磨滅しており、調整の確認できたものは無いが、ナデであろう。いずれ も淡黄褐色を呈し、胎土中に3mm以下の白色の砂粒を含んでいる。

第5節 道路状遺構(第6図)

平成9年に行ったトレンチによる調査では、表土直下から始まる版築状に突き固めた道路状の遺構 (図版4上)を確認した。遺物を含んでいなかったことから、調査区両端の壁面で再度確認できるものと考えていたが、版築状に突き固めた部分は、第2トレンチ付近だけで、他の部分には僅かしか見られなかった。版築状になった部分は、橙色の粘質土と、黒色土を交互に積み重ねたもので、斜面谷側に明瞭に残り、斜面山側では不明瞭になっている。急斜面の谷部分を山側から埋め立てて、平坦な道を造成したものと思われる。遺物が出土しなかったため、造成時期は不明である。なお、その直上には、来待石をステップ状に並べた道 (図版3下)が残っており、最近まで機能していたことが解る。

第6節 小結

野津原 II 遺跡(西区)では、弥生時代後期の集落跡の他、多量の土器を含む遺物包含層を検出している。この遺物包含層の土器は、周辺の野津原 II 遺跡(東区)や、山守免遺跡からの流入遺物も多く含んでいるものと思われ、この周辺の弥生集落の存続期間を示すものと思われる。また、この遺跡からは、落とし穴や石器類が出土しており、縄文時代の遺物が含まれている可能性がある。包含層出土の石器類については、時期を推し量りがたいが、スクレーパーの形態や落とし穴などとの関連から、この丘陵付近が、縄文時代から生活の場であった可能性は否定できない。

最も古い様相を示す土器は、 $36-1\cdot2$ などで、草田編年の 2 期に近い様相を示す。出土数量はあまり多くはない。

最も数が増えるのは草田 3 期に当たる時期と思われ、 $37-2\cdot 15$ などが典型的なものと言えるだろう。また、 $36-6\cdot 8$ が、 $36-1\cdot 2$ などとの中間的なものと思われる。

その次の段階の、甕の口縁部外面が無文化する時期も比較的多く、39-4・6 などが口縁端部を 尖らせ、草田4期の特徴を持っている。

最も新しいと思われるものでは、鼓形器台に、筒部が極端に短くなるもの(42-5 など)も見られ、おおむね、草田5期までの遺物が含まれているようである。

渦巻き状のスタンプ文を施した41-6 は、草田 3 期前後に位置づけられるものと思われ、松江市の福富 I 遺跡などに類例が見られる。

1号建物跡は、15-1が、薄い口縁部の先端を尖らせており、草田4期頃と考えられる。1号建物跡では、掘建柱建物と竪穴建物の切り合いがあるが、竪穴建物が新しいと判断されたため、これらの遺物は竪穴建物跡に伴うと考えられる。2号建物跡出土遺物(第18図)は、いずれも口縁部外面が無文であるが、肥厚して端部を丸くおさめる形状は、草田3期に近い。3号建物跡は数棟が切り合っており、出土遺物には草田3期と考えられるもの(22-2)と、草田4期と考えられるもの(22-4)がある。4号建物跡出土遺物はいずれも残存状況が悪いが、形態からは、草田3期頃だ

ろうか。4 号建物跡からは管状土錘(25-3)も出土しており、包含層出土の土錘(46-1~3)も同時期と考えられる。

- 註1 土器の年代観については、八東郡鹿島町の南講武草田遺跡での編年を使用したが、南講 武草田遺跡は低地の遺跡であり、宍道町の丘陵部の遺跡にそのまま当てはめての年代決定 には躊躇するものがある。よって、あくまで目安として使用する。
- 註2 赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』 鹿島町教育委員会 1992年 上記報告書の他、松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 1992年を参考にした。



第4章 女夫岩西遺跡

第1節 調査の概要と経過

女夫岩西遺跡は、宍道湖から約1.5km南の標高およそ50mの丘陵とその斜面に位置する。

遺跡のすぐ東側の斜面には『出雲国風土記』に記載の「猪像」との関連が指摘されている巨石、 女夫岩(遺跡)がある。平成8年度には、女夫岩遺跡の性格を把握するための部分的な発掘調査が おこなわれ、古代以来の祭祀遺跡としての性格が濃厚であることが明らかとなっている。

調査は平成10年4月より開始した。調査区を便宜上I区~Ⅲ区に分け、遺跡の概要を把握するためのトレンチ調査をI区から開始し、それと平行してI区に認められた2つの高まりの地形測量を行った。その結果、一部のトレンチから遺物が確認され、また、高まりのうちの1つが古墳と判断されたため、その部分について本調査を実施した。これと平行して、Ⅲ区、Ⅲ区も順次トレンチ調査を行った。その結果、Ⅲ区においても遺物が確認されたため本調査を行うこととなった。

本調査においては重機等の使用ができなかったため、表土の除去からすべて人力によって行った。 また、遺跡の直下に鉄道や人家等があり、周辺へ土砂が流出するのを防ぐ必要があったため、防護 柵を作りながらの調査となった。

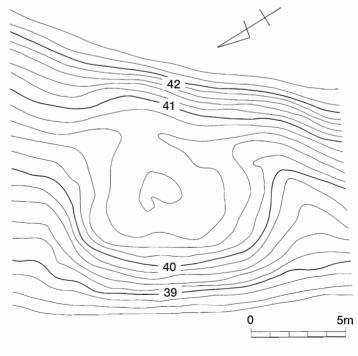
調査の結果、I区では古墳と土壙のほかに遺構は確認されず、また、遺構の存在が考えられたⅢ 区においても確認はされなかったため、8月にすべての調査を終了した。

第2節 I区の調査

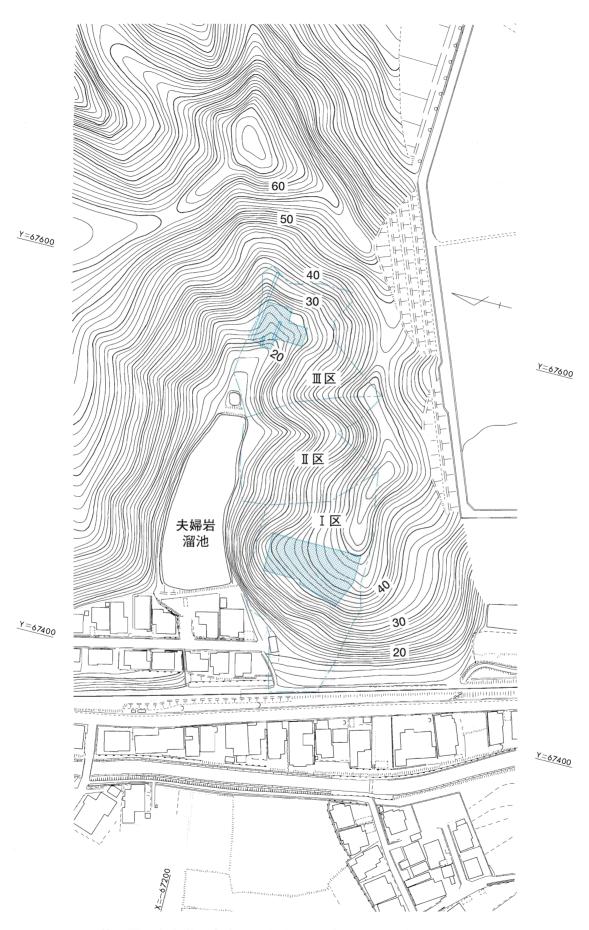
I区は調査区の西側、佐々布川沿いの平野を望むことができる丘陵尾根とその斜面に位置する。標高は最高所で49mを測る。当初横穴墓の存在が考えられた西側斜面では、トレンチ調査の結果、遺構・遺物とも確認されなかったので調査はおこなわず、古墳と判断された個所とその周辺の調査を実施した。以下、遺構ごとに記す。

古墳(第47図・第49図) (立地)

尾根の頂上部からやや下がった、斜面が一度緩やかになる付近にあり、上 方側によせて造られている。標高はお



第47図 古墳調査前地形測量図 (S=1:200)

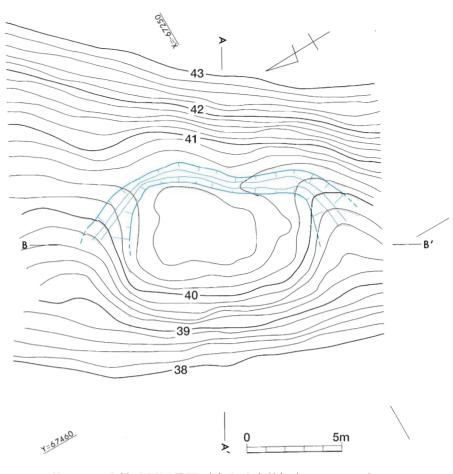


第48図 女夫岩西遺跡周辺地形図・調査区配置図 (S=1:2000)

よそ40mを測る。古墳の 西側ではその斜面が急斜 面に変化して崖のように なっており、また北側で はなだらかな面が認められる。古墳がある場所からは宍道湖を望むことも できる。周囲に古墳は認められず、1基単独で築 かれているようである。

(墳丘・溝)(第51図・第 52図)

墳丘は南東側(斜面上 方側)に溝を掘って区切 り、盛土をして築造して いる。規模は長軸方向で 12m、短軸方向で8mを 測る。土層を観察すると、 最下層に旧表土と考えら



第49図 古墳地形測量図 (表土除去後) (S=1:200)

れる黒色土があり、その上に土が盛られていることがわかる。

盛土は斜面上方側で約30cmほど、多いところでは約1mなされているが、西斜面側への流出も認められた。斜面上方側の溝は幅が約1m、深さが30cm \sim 40cmのもので、北側と南側に廻ったあと広がりながら消滅する。溝内からは多数の須恵器片が出土したが、特に南側からまとまって出土した。

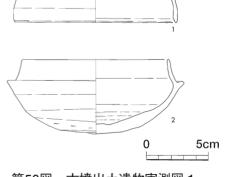
(主体部)

土質に変化が見られず、確認できなかった。ただし、墳丘中央よりやや南側の盛土内から、須恵

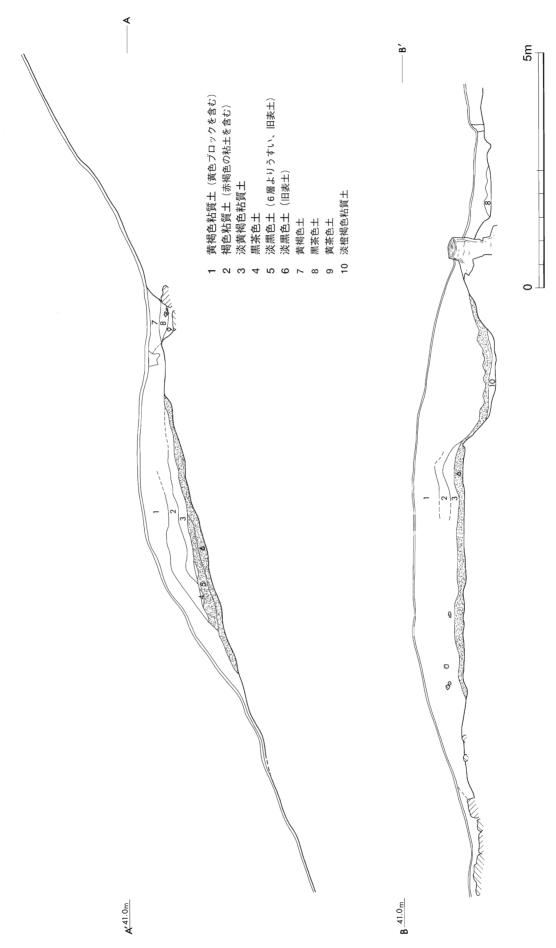
器の坏蓋、坏身が出土しており、確認ができなかっただけ と思われる。

(出土遺物) (第50図・第53図)

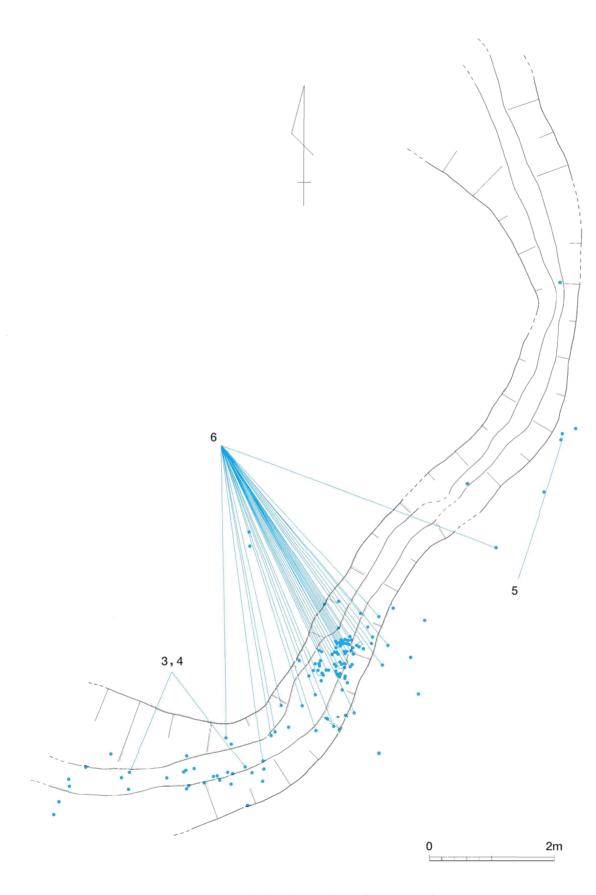
遺物は溝内を中心に出土している。それらの内、図化できるのは以下のものである。 1,2 は墳丘盛土内から出土したものである。 1 は坏蓋で口径12.9cmを測る。口縁部と肩部には沈線を、天井部外面はヘラケズリを施す。 2 は坏身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、底部外面はヘラケズリを施す。 3,4 は直口壷で同一個体のものと思われる。口径9.0cmを測る。 5 は坏蓋である。外面には自然釉



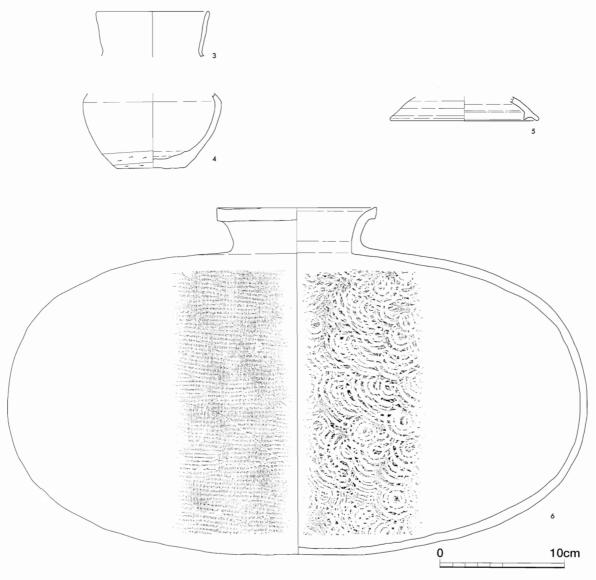
第50図 古墳出土遺物実測図 1 (S=1:3)



第51図 古墳土層図 (S=1:80)



第52図 古墳溝遺物出土状況 (S=1:60)



第53図 古墳出土遺物実測図 2 (S=1:3)

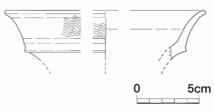
が多く付着する。 6 は横瓶である。破砕された状況で見つかり、約半分が欠損している。口径 12.7cmで外面は平行タタキののちカキメ、内部は同心円文タタキを施す。

これらの遺物には時期差が認められるが、1, 2 から、この古墳が築造されたのは 6 世紀中頃と考えられる。

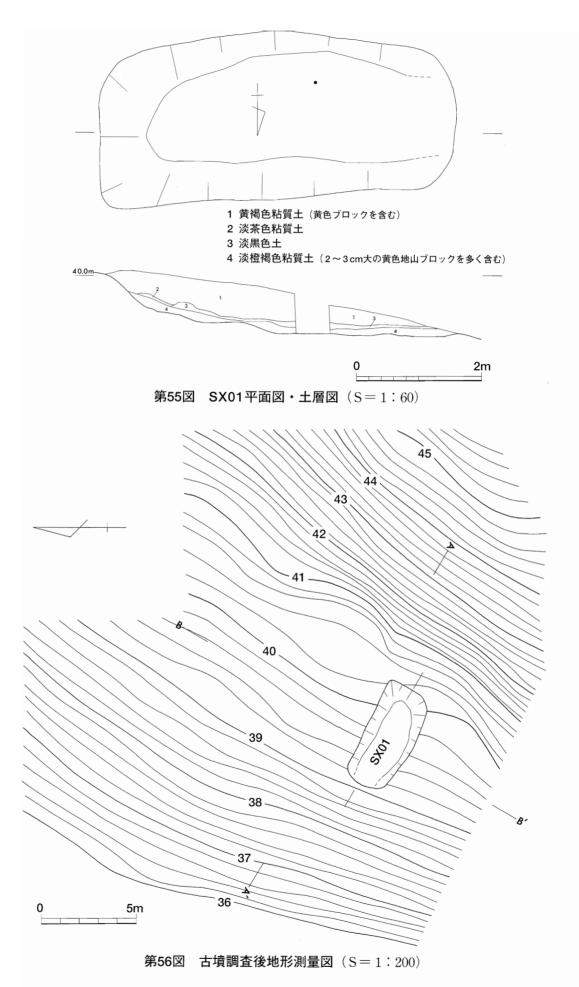
SX01 (第55図)

古墳にトレンチをいれた際に、不自然な落ち込みとして認識していたもので、盛土を取り除いた あとに、土壙として確認した。規模は長さ5.5m、幅2.5mを測

る比較的大きなものである。古墳の主体部の可能性も考えたが、旧表土の層が落ち込んでいることや、出土した遺物などから別のものと判断した。遺物は1点が出土している(第54図)。複合口縁の甕と考えられ、口縁部外面には波状文を施す。弥生時代後期後葉頃のものと思われる。

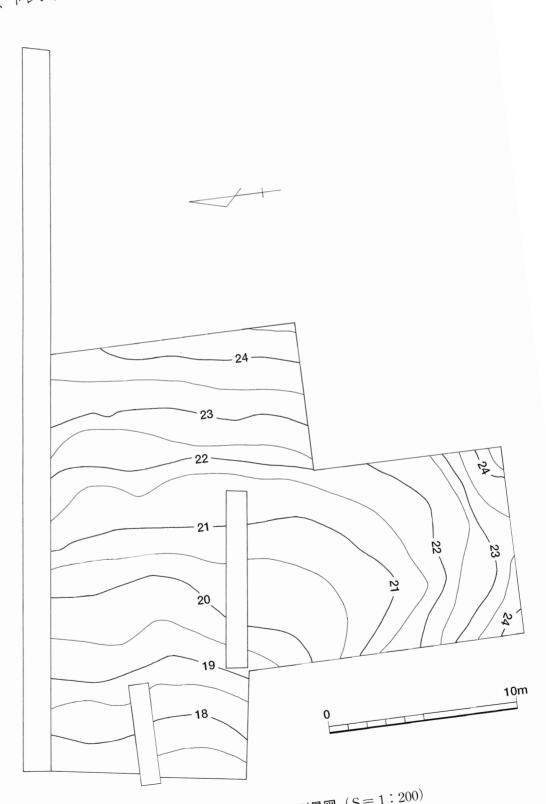


第54図 SX01出土遺物実測図 (S=1:3)



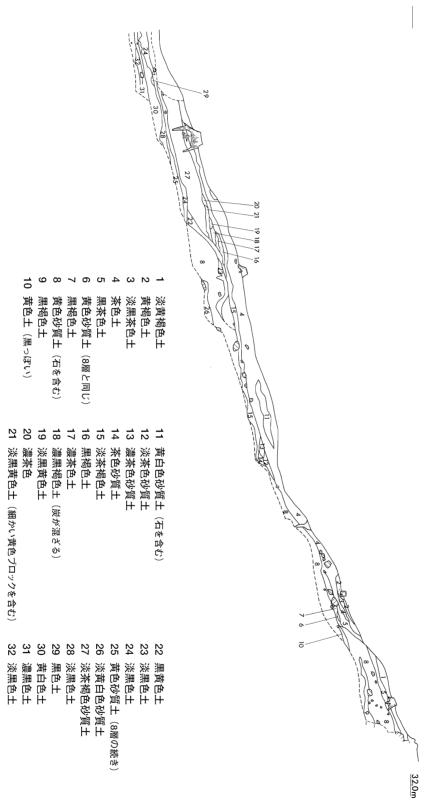
- 55 -

Ⅲ区は調査区の東側、夫婦岩溜池から女夫岩(遺跡)にかけての斜面に位置する。平成8年度の 第3節 皿区の調査 部分調査において、トレンチが数本入れられており、その際に土師器片、須恵器片が出土している。



第57図 Ⅲ区調查後地形測量図 (S=1:200)

そうしたことから、なんらかの祭祀に関係した遺構が存在する可能性が考えられたため、前回トレンチをいれた周辺を中心に調査を行った。しかし、遺物(須恵器片など〈コンテナ約 1 箱分〉)は 確認されるものの、明確な遺構を確認するには至らなかったため、一部の調査で終了した。



(007:I=S) 図順美層土図II 図83策

第4節 まとめ

今回の調査した女夫岩西遺跡の周辺では、清水谷遺跡や矢頭遺跡、そして水溜古墳群などが知られている。清水谷遺跡は、弥生時代後期の墳丘墓(2号墓)や古墳時代後期の古墳(1号墳、6号墳)などからなる遺跡である。そして、そのすぐ南側にあるのが水溜古墳群で、30基の古墳からなる宍道町内では最大規模のものである。また矢頭遺跡では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居址群が検出されており、これらは密接な関わりをもつと考えられるものである。今回確認した古墳と土壙はその出土遺物から、6世紀の中頃と弥生時代後期後半のものと思われる。これらは尾根頂部を間に挟んではいるものの近い距離にあり、こうした遺跡との関係が推測される。しかしながら、古墳・土壙とも一基単独で存在していることは、周辺のものと異なった様相をみせており注目される。

- 註1 島根県教育委員会、宍道町教育委員会『宍道·女夫岩遺跡―第1次発掘調査報告書』 1999
- 註 2 宍道町教育委員会『宍道町埋蔵文化財調査報告 4 島根県中央地区団体営畜産経営環境整備事業に伴う清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書』1985

宍道町教育委員会『宍道町埋蔵文化財調査報告6水溜古墳群』

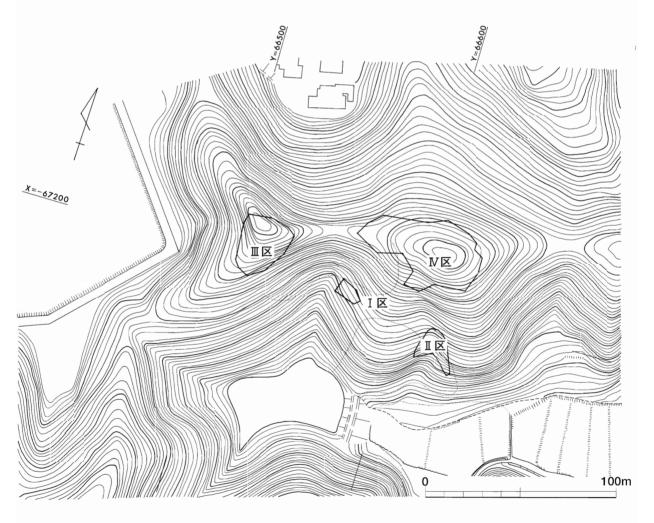
土器の年代については、大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11、1994、松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』を参考にした。

第5章 城 山 遺 跡

第1節 調査の概要

城山城跡は、八東郡宍道町大字佐々布2574-1他に所在する。佐々布川の両岸の山地には多くの山城跡が知られているが、城山城跡もその一つで、谷の左岸の枝谷の一つである岡田谷の北側の小字名「城山」と呼ばれる山を中心に広がっている。佐々布川の右岸には、宍道氏の居城である金山要害山城や宍道湖に面した宍道要害山城、左岸には、城山城跡から小さな谷を挟んで南の山の上にある上野山城、佐々布氏の居城である佐々布要害山城等がある。本城跡の主郭のある城山の標高は約70m、麓の集落からの比高は約50mである。付近には「弓場」「的場」「座在」「殿ヶ市」「矢迫」「土居」など、城と関係が深いと思われる小字名が分布する。

平成9年度に島根県教育委員会が実施した県内の城館調査では、表面観察によって縄張り図を作成し、平成9年度の夏には工事区域内を伐採してトレンチ調査を実施、平成10年度に本調査を行った。工事区域の東の境界が城山の東斜面の途中までであったため、本調査の調査区もその範囲内に



第59図 城山遺跡調査区配置図 (S=1:2000)

限定されたが、これより東にも、虎口、堀切などの城の痕跡が上記の縄張り調査で確認されている。 主郭部分(IV区)のほかに、主郭の南西側の谷(II区)、南東側の谷(II区)、また主郭から尾根続 きの西側の峰(II区)と、合計 4 箇所に調査区を設定した(第59図)。また、必要に応じ調査区の 外にもトレンチを設定した(第60図)。 I 区からは遺物、遺構とも検出されなかった。

第2節 遺構と遺物

以下、各遺構について述べる。本城跡の遺構は大きく 2 段階に分けることができる(79~80頁に詳述)。特に、IV区の主郭付近については、第 1 段階から第 2 段階にかけて大きく地形が改変されていることが判明したので、調査途中(第65図)と調査後(第66図)の 2 回にわたり、空中撮影による地形測量を実施した。1 回目の測量(第65図)が第 2 段階、2 回目の測量(第66図)が第 1 段階にほぼ対応している。

(1) SE01、SE02、SD01 (Ⅱ区)(第61図・第62図)

2郭、3郭の先へ伸びる二つの尾根に挟まれた谷の最奥部にある。岩盤を削って井戸を掘るための平坦面を造成しているが、谷側の境界は明確でない。SE01は直径1.5m、深さ1.2m、SE02は直径0.9m、深さ1.8mである。ともに岩盤を掘り下げて井戸としたもので、埋土は上から順に黒褐色土、暗褐色粘質土(SE02のみ)、暗黄褐色粘質土、黒褐色粘質土が認められる(第62図)。SE01からは土師質土器の破片が出土しているが、図化できなかった。水量はSE01が圧倒的に多く、降雨の後は一晩で湧水が溢れ出す。これらの井戸の底には、径10~30cm程度の石が多数残っていた。井戸を廃絶させる時に投げ込まれたと見られる。

最初に掘られたのは恐らくSE02であったが、深掘りしたにも関わらず水量が不足したため、 その隣に、より面積の広いSE01を掘り直したものと思われる。堆積している土が大体同質であ るから、両者の作られた時期は大きく隔たってはいないであろう。

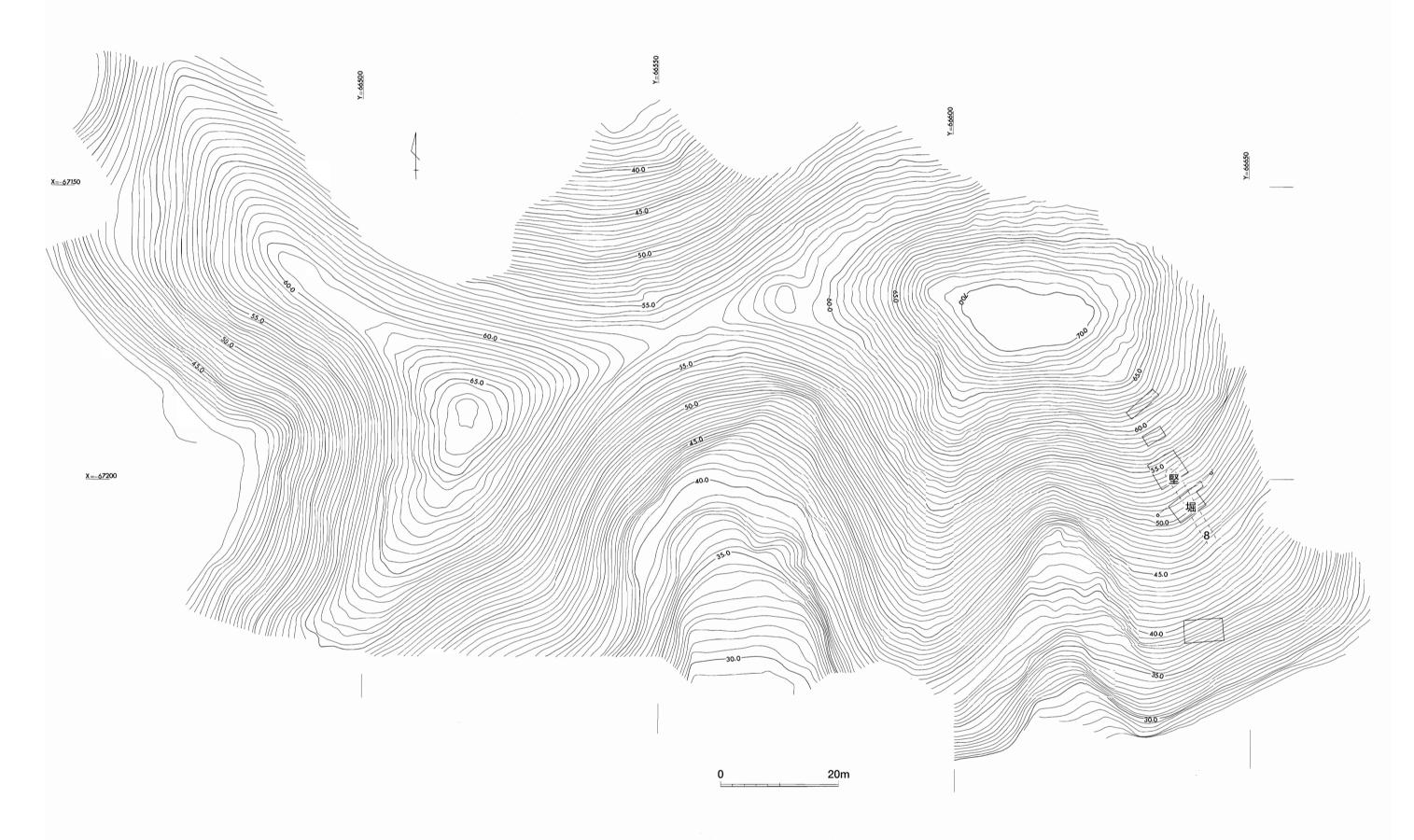
調査区の東の際に沿うように、溝状遺構 SD01が伸びているのを確認した。岩盤を削って造られており、下は斜面が急角度に変換する地点で消失している。上は調査区の外に伸びているが、土量が多過ぎて人力での掘削は困難なため、調査を断念した。

(2) 西1郭、通路4(Ⅲ区)(第63図)

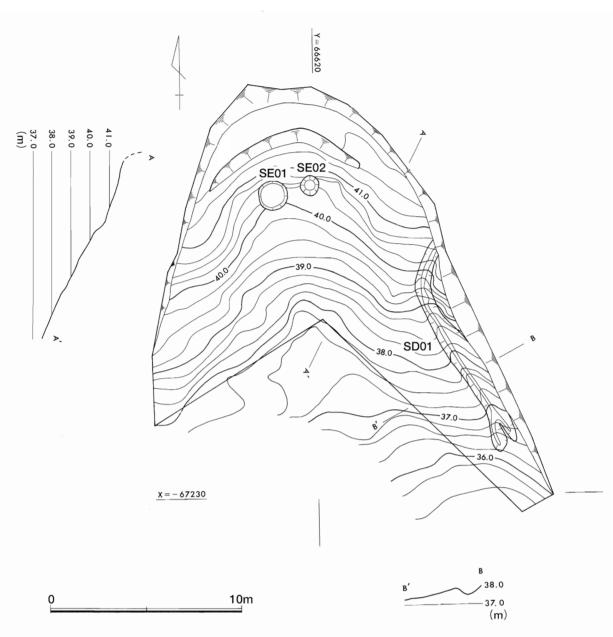
主郭から尾根続きの西側の峰の南斜面に位置し、平面は半月形、規模は全周21m、面積25㎡、尾根筋方向の長さが4m、直交方向が7mである。この郭から主郭の方へ向かい、岩盤を削り出して造られた通路が6mにわたって確認された。幅は郭の入口付近で1m、東へ行くにしたがって最小50cmと狭くなる。遺物は、遺構から離れた場所で明治14年の二銭硬貨が出土している。

(3) 主郭 (第65図・第66図)

城山の頂上を削平して造成された、本城跡で最も高い標高70mの平坦面である。周囲54m、面積は180㎡、東西22.5m、南北11mの、東西に長い楕円形の平坦面である。表土と地山の間に淡橙色の埋土が薄く堆積している。地山の質は、南~西斜面は黄白色の岩盤であり、北~東斜面ではこの岩



第**60**図 城山遺跡地形測量図 (調査前) (S=1:600)



第61図 I区地形測量図 (調査後) (S=1:200)

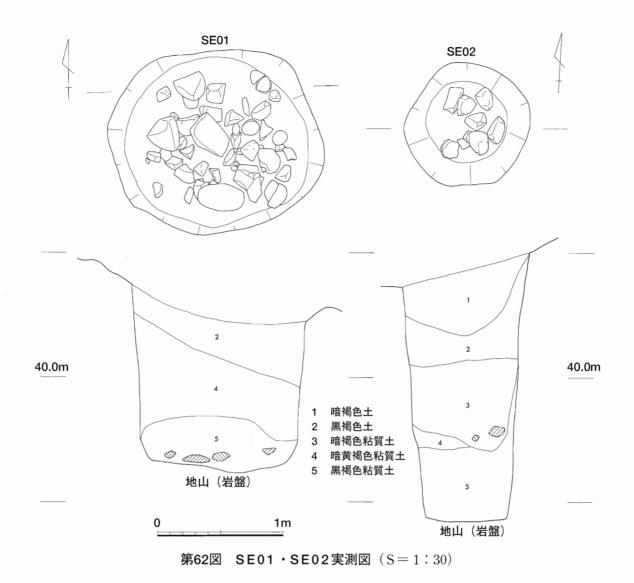
盤の上に厚く堆積した赤橙色の固い土である。検出されたピットは数も少なく、建物や柵列、木戸と判断できるものでは無かった。しかし、ピット付近の埋土から奈良火鉢の破片(第71図 5 ~ 7)が出土しているので、この場所に建物が建っていた可能性はある(第66図)。

(4) 通路 1 (第65図·第66図)

主郭の南東部から1郭の西側へ降りる通路である。主郭の出口から緩い傾斜が続き、1郭の入口にはステップが作られている。主郭の南側には、この通路1につながるように高さ30cm前後の段差が約14mにわたって西へ続いているが、通路1との関係は明らかでない。

(5) 1郭

第1段階(第66図)



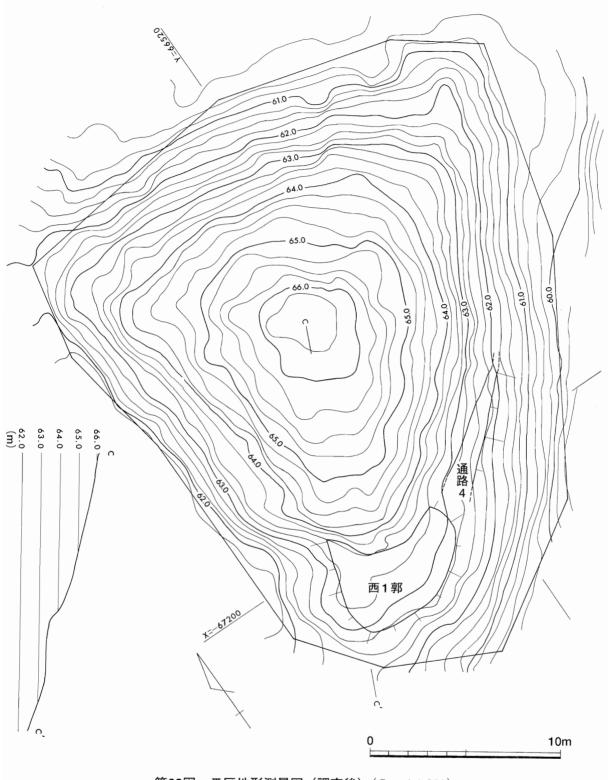
主郭の北東側の斜面にあり、主郭より2.5m低い標高67.5mに位置する。規模は全周35m、面積36㎡、等高線に沿う方向の長さは東斜面で10m、北斜面で12mを測るのに対して、等高線に直交する方向の長さは東斜面で4m、北斜面で1.5mと細長い郭である。平面形が山の斜面に張りついた三日月形となり、北斜面に掘られた畝状竪堀の上端近くまで伸びている。赤橙色土や岩盤地山を削り出して作っており、盛り土はなされていない。

北側の畝状竪堀の上端近くで地山面に掘り込まれたピット 2 穴を検出したが、建物や柵列、木戸の存在を推定する材料にはならなかった(第66図)。郭の東側では、長径2.2m、短径1.4mの土坑 SK01が検出された(第69図)。底の一部が焼けており、火を使用した施設であることが判明した。用途としては烽火台、カマド、暖房用の炉などが考えられるが、いずれにも限定はできない。

第2段階(第65図)

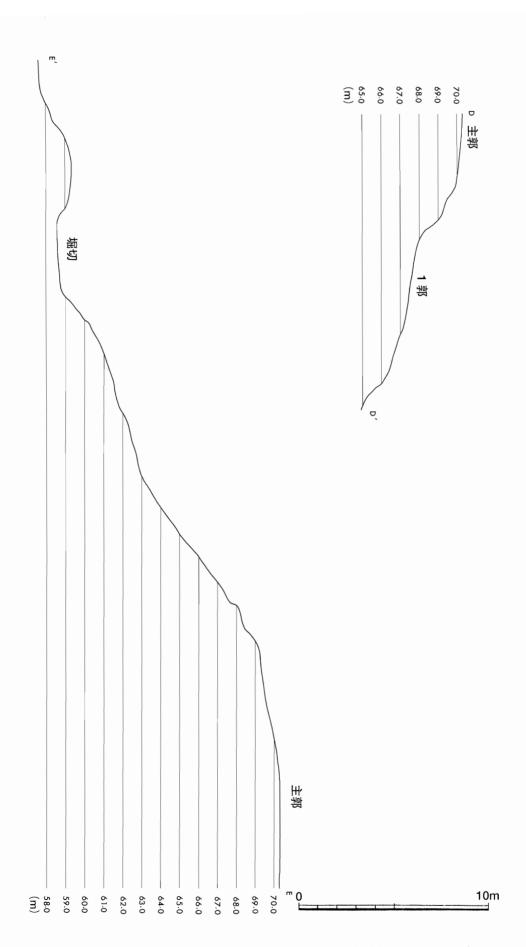
北側のピットのあった部分に粒の細かい暗黄灰色粘質土を40cmの高さで盛っており、更にその上には地山が崩れて流れ落ちたと見られる礫を含む赤橙色土が厚く堆積していた(第68図b-b!)。この暗黄灰色粘質土による盛り土の目的は不明である。

(6) 2郭 (第65図・第66図)

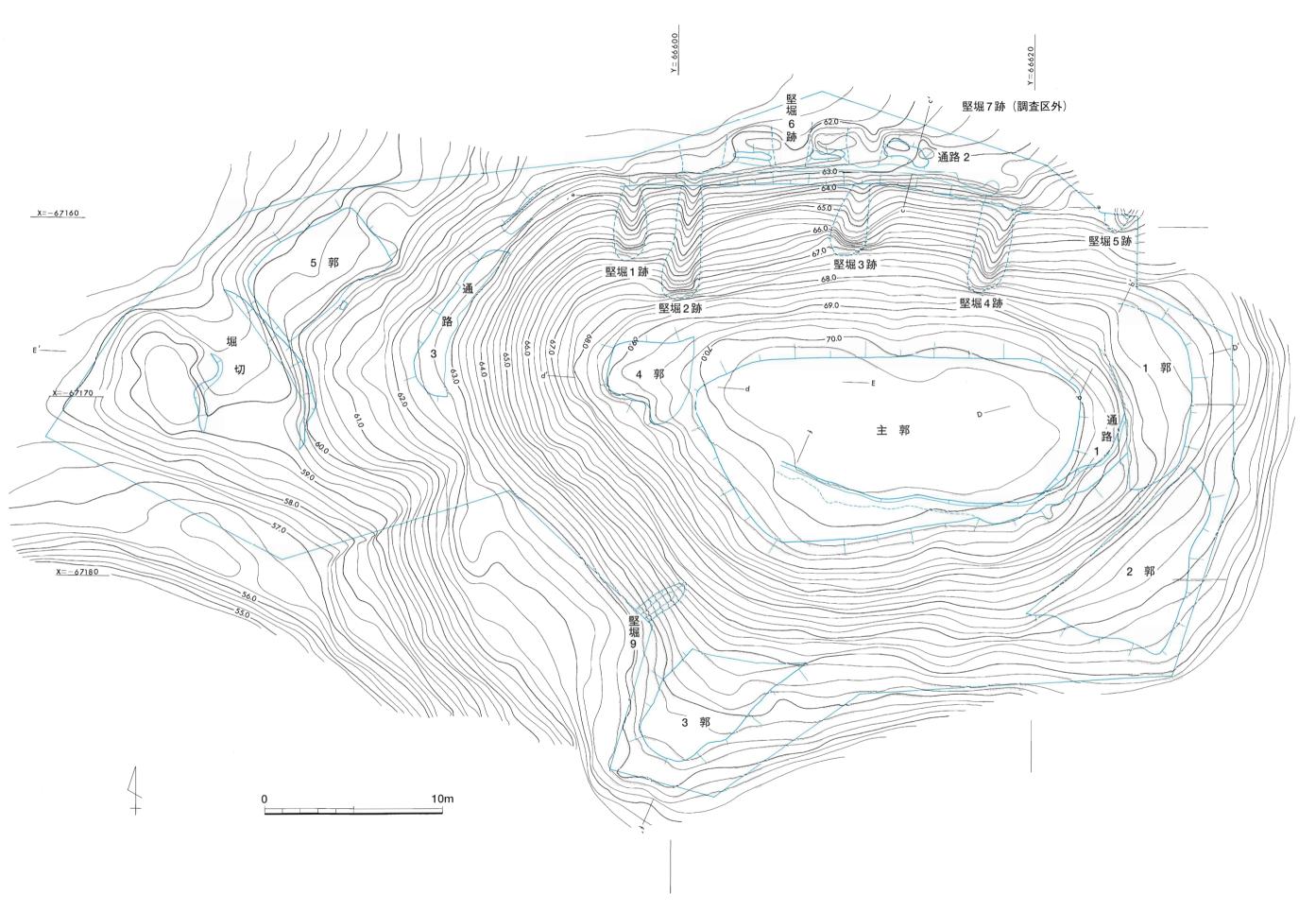


第**63**図 Ⅲ区地形測量図 (調査後) (S=1:200)

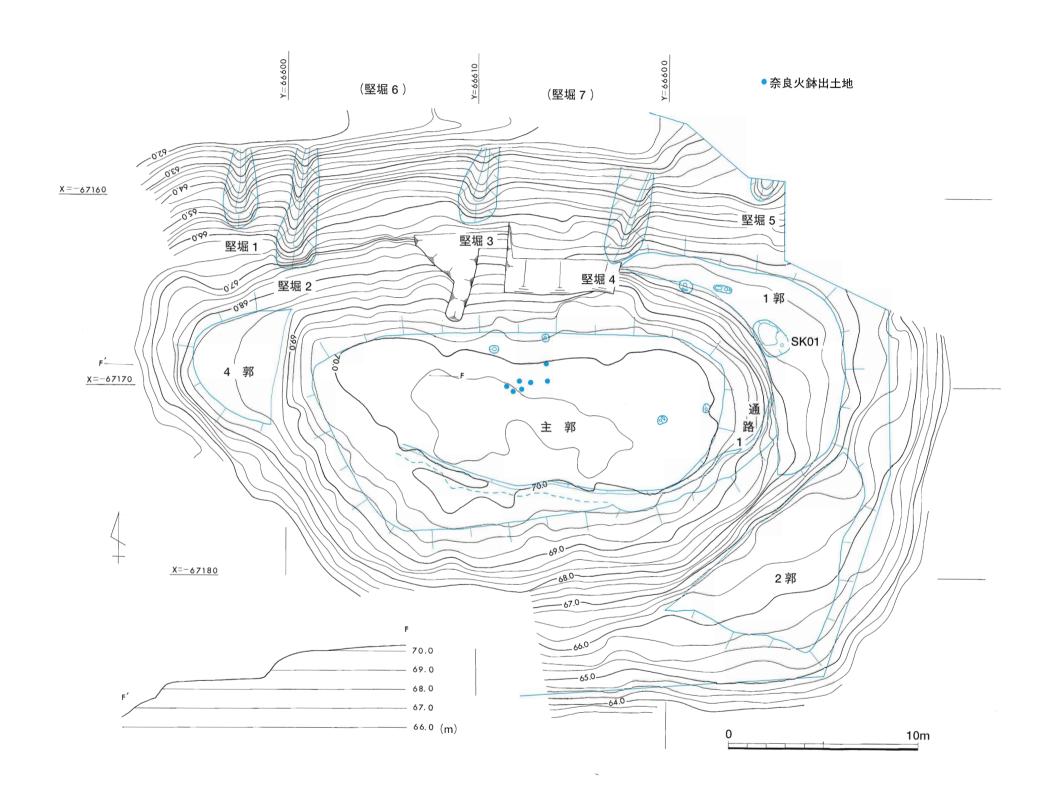
1 郭の南に隣接するように作られている。主郭の南東側斜面にあり、主郭から4.5m、1 郭からは2 m低い、標高65.5mに位置する。平面は半月形であり、規模は全周31m、面積50㎡、等高線に沿う方向の長さ12.5m、直交する方向の最大の長さ6.5mである。赤橙色土(一部は岩盤)の地山を削り出して造られている。遺構は無く、遺物は木炭が出土したが、図化できなかった。



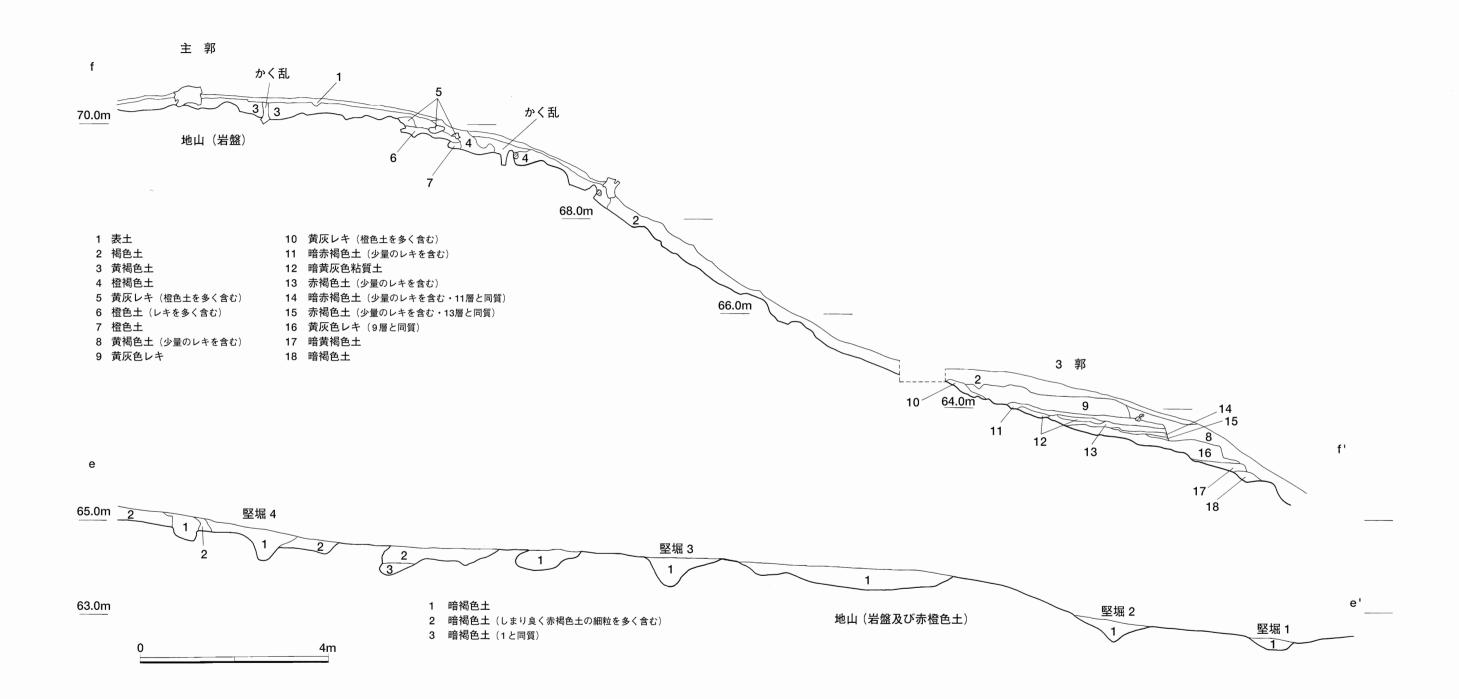
第64図 Ⅳ区地形断面図 (図中の記号は第65図に対応) (S=1:200)

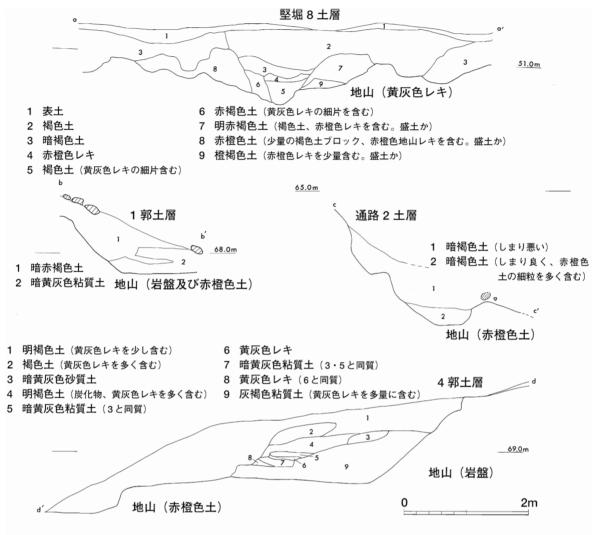


第65図 N区地形測量図 (調査途中) (S=1:200)

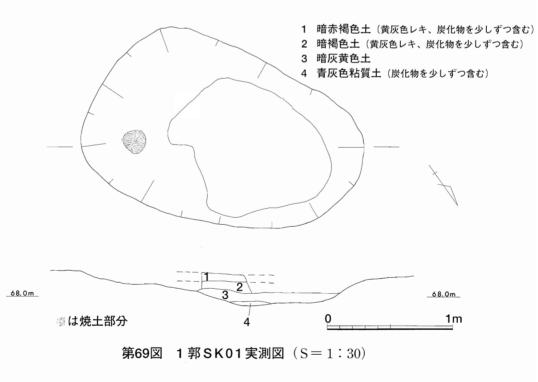


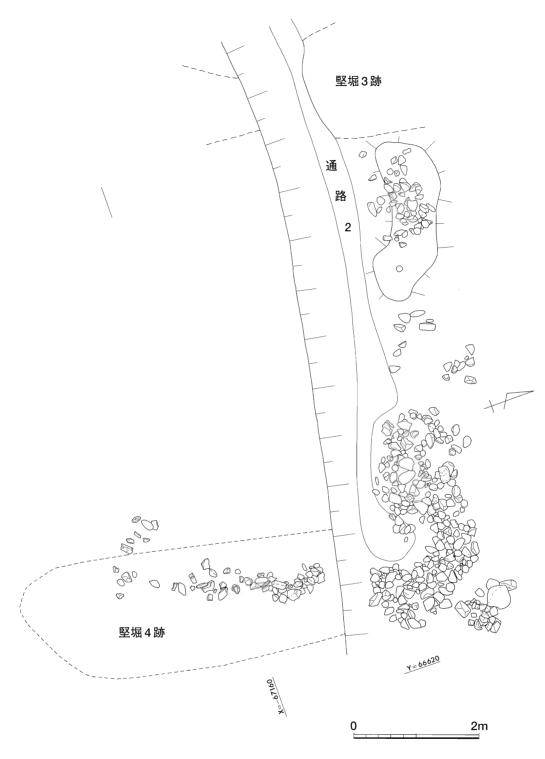
第66図 N区地形測量図 (調査後) (S=1:200)





第68図 $I \cdot IV$ 区土層断面図(図中の記号 a, a'は第60図に、 b, b', c, c', d, d' は第65図に対応) (S=1:60)

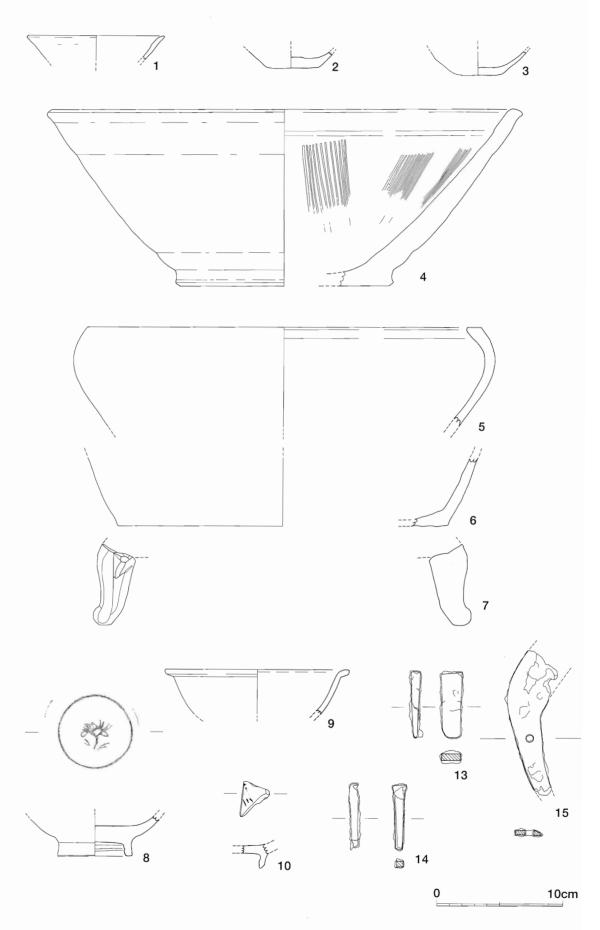




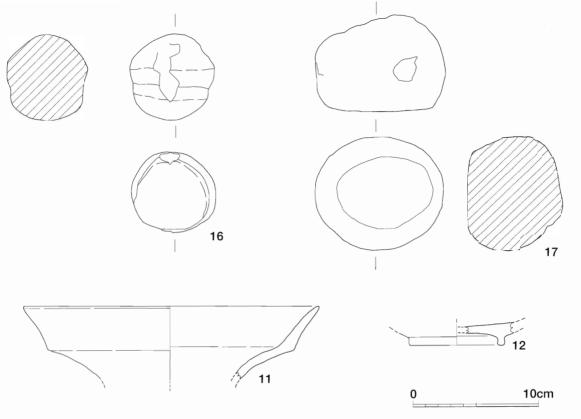
第70図 礫石出土状況 (S=1:60)

(7) 竪堀 8 (第60図)

2郭の下は尾根となっており、この尾根の上には幅1.6m、深さ90cmの竪堀が掘られている。急峻な地形のため全面調査は不可能であり、数箇所にトレンチを掘削し、この竪堀の続く範囲を確認するという調査方法をとった。その結果、2郭より16m南東、10.5m下がった位置で、上端を確認することができた。下端は確認できなかったが、少なくとも2郭より25m南東、15.5m下がった位置まではこの竪堀が続いていることを確認した。



第71図 土師質土器・瓦質土器・陶磁器・鉄器実測図 (S=1:3)



第72図 石製品及び土器実測図 (S=1:3)

(8) 3郭、竪堀9(第65図)

3 郭は山の南西方向へ張り出す尾根の付け根部分に当たり、主郭より 7 m南西に位置し、主郭より5.5 m低い標高64.5 mであり、先端部へ向かって緩く傾斜する。規模は全周15 m、面積30 m、尾根筋方向の長さ 5 m、直交する方向の長さ 6 mである。遺構、遺物とも確認できなかった。土層は、岩盤の地山を破砕したような礫層が厚く堆積し、その間に薄い暗黄灰色粘質土や暗赤褐色土の層がはさまっている。前者は 1 郭(第 2 段階)の盛土にも使用されていた土である。最上層は礫を含む褐色土である。盛り土によって郭を造成したものと考えられる(第67図f - f!)。

3郭のすぐ西には、幅1m、深さ66cmの竪堀の上端が検出された。これを竪堀9とした。

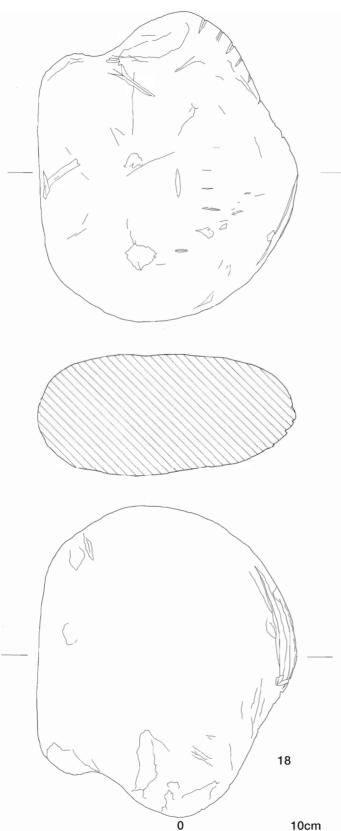
(9) 4郭

第1段階(第66図)

山の西斜面にあり、主郭より 2 m西にあり、主郭から1.5 m低い標高68.5 mに位置する。規模は尾根筋方向の長さ4.5 m、これに直交する方向の長さ6 m、全周18 m、面積21 m であり、平面形は半月形である。地山は赤橙色土または岩盤であり、地山を削り出して郭を造っている。(第66図 F-F'・第68図 d-d')

第2段階(第65図)

第1段階の郭の上に、3郭と同じような礫層と暗黄灰色粘質土、礫を含む褐色土層などが互層状に重なっており、盛り土によって郭を造成したと考えられる(第68図 d-d')。規模は南北の長さ $6\,m$ 、東西の長さ $4.5\,m$ 、全周 $16\,m$ 、面積 $17\,m$ である。 $2\,$ つの段階を通じて、遺構、遺物とも確認できなかった。





(10) 堀切、5郭(第65図)

山の西斜面がほぼ平坦な尾根に変換する境界付近に、尾根を南北に切って堀切を造っている。堀切の西側の壁は尾根を削り残しているため、土塁状の高まりが出来ている。現地形では上幅5.0m、下幅3.5m、深さが0.9mで(第64図E-E!)、底が広くて浅い、防禦効率の低い形状となっているが、本来は堀切の西側に、現在より高く盛土によって土塁が築かれており、それが流失した可能性が考えられる。

堀切の北東に接して、平坦面が岩盤を削ることによって造成されており、これを5郭とした。平面形は長方形に近く、等高線方向の長さ7.5m、直交する方向の長さ4.5m、全周23m、面積30㎡である。5郭の山側には、幅40~50cm、奥行き20~30cmのステップが一段作り出されており、ここから5郭の背後の緩斜面へ登れるようになっている。遺構、遺物とも確認できなかった。

第73図 石製品実測図 (S=1:3)

(11) 畝状竪堀群(第66図)

山の北斜面に掘られている。調査区内で確認されたのは斜面の上方まで続いている長い竪堀4本と、それらより短く上方まで達していない2本の計6本であり、竪堀1~6とした。竪堀の中心間の間隔は竪堀1~竪堀2間が3.2m、竪堀2~竪堀6は5.5m、竪堀6~竪堀3は4m、竪堀3~竪堀4は8m、竪堀4~竪堀5は6mであり、竪堀3~竪堀4間の8mが特に長いことがわかる。そこで、調査区外の地形を地表面で観察したところ、竪堀3と竪堀4の間に調査区まで達していない短い竪堀のあるのが確認され、これを竪堀7とした。これを含めると、竪堀間の間隔は竪堀3~竪堀7は5m、竪堀7~竪堀4は4.8mで、他の竪堀間の間隔に近くなる。これにより、畝状竪堀群の竪堀の本数は合計7本となった。いずれも赤橙色土や礫混じり赤橙色土、または岩盤の地山を掘削して造られており、埋土は暗褐色土であった(第67図e-e¹)。

また、竪堀2の埋土からは青磁碗の底部が出土した。

(12) 通路 2、集石遺構(第65図・第70図)

前述の竪堀 2、3、4を横切るように東西方向に造られた通路で、18mにわたり確認された。畝 状竪堀との前後関係は土層からは確認できなかったが、通路 2 よりも堅堀が先行する可能性が高い (77~78頁に詳述)。赤橙色土の地山を削り、谷側を土手状に削り残すことで逆台形状の断面を持つ 通路を造成している(第68図 c - c')が、竪堀と交わる部分では土手は無い。底部分の幅、土手の 高さともに40cm前後である。通路 2 の東端は竪堀 4 と交差する部分に近く、ここに拳~人頭大の 石が大量に集積されていた。さらに竪堀 4 の底部にもやはりこのような石が多数集積されていた (第70図)。これらは、戦闘の際に礫石として使用する目的で置かれていたものと考えられる。

(13) 通路 3 (第65図)

山の西斜面から北斜面にかけてカーブしながら続く通路であり、12.5mにわたって確認された。 岩盤を削って造られており、幅は1.5m~1m程度である。西斜面側から10mほど進んだ地点から 1 m低くなり、このレベルで2.5m続いて途切れる。通路3の東端と通路2の西端とは、距離にして 約4m離れているものの、標高が61.5mとほぼ一致しており、本来は一続きの通路であった可能性 が高い。途中が切れているのは、地崩れなどで失われたのであろう。

(14) 遺物 (第71図・第72図・第73図)

1はI区の埋土から出土した土師質の坏の口縁部である。器壁は薄く、端部が僅かに外反する。内外面ともロクロの使用痕が明瞭に残る。また、図化できなかったがこの坏の底部が同時に出土しており、糸切りの痕が見られた。2、3は主郭の南東部のピット付近の埋土から出土した土師質の皿である。2は、風化が激しいが底面に僅かに回転糸切りの痕跡がある。3は内面の底部が黒変しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。4は通路2の西端近い底面から出土した擂鉢である。釉薬を使用しない素焼きの土器で、胎土は土師質土器に似て白っぽい。口縁部は、底部に対して128°の角度でほぼ直線的に開く。口縁端部は平坦面が見られるが、やや丸みを帯びる。調整は、内面上半分と外面に回転ナデが認められた。底部の外面はヘラ切りの後調整がされていない。口縁端部から2.4cm下より、1単位12本からなる幅3.4cmの摺目が、6単位施されている。内面の下

半分は使用による磨滅が著しく、調整も擂目も消えてしまっている。本品は半分弱が残存しているので、完形品は11~12単位の擂目を施していたであろう。類似の擂鉢が出雲市の矢野遺跡第2地点(平成2年度調査)から合計6個体出土している。時期は、これに伴って出土した青磁や常滑焼、土師質土器の年代から、14~15世紀のものと報告されている。

 $5 \sim 7$ は瓦質の奈良火鉢である。焼きはもろく、胎土の色は一部淡橙色、一部淡灰色とばらつきがある。5 は鉢部の口縁から胴部、6 は底部、7 は脚部である。比較的狭い範囲からまとまって出土しており(第66図)、本来一個体であったと思われるが、接合できなかった。鉢部の形態は立石堅志氏の編年で浅鉢V(14世紀末~15世紀後半)とされているものに似るが、口縁部に文様帯がめぐらされていない点が異なっている。また、脚部の形は浅鉢Vのそれよりも細長く、同編年で浅鉢V(14世紀末~15世紀後半)とされているものに似る。これらの特徴から、本品は奈良で生産された物を部分ごとに模倣して在地で製作された可能性もある。同氏によれば、浅鉢V0 や浅鉢V1 は14世紀末には奈良に出現しており、V15世紀後半に盛行するとされている。

8は、竪堀2の埋土から出土した青磁碗の底部である。釉薬は高台の内面途中までかかっており、畳付の釉薬の削り取りは行われない。釉薬のかかっていない底部外面には、高台を作り出すとき土を抉り取った痕が残る。見込み中央には草花文がスタンプされ、周囲には幅2mmの圏線がめぐる。9は頂上部の埋土から出土した青磁碗の口縁部で、端部が外反するタイプのものである。出土場所は離れているが、本来は一個体と見られる。これらの青磁の類似品は紀淡海峡出土の中国陶磁の中に見られ、上田秀夫氏によれば15世紀前後~15世紀中葉のものと考えられる。10は染付の底部~高台部である。底部は全面に、また高台部は内外面とも先端を除いて施釉する。磁器類ではこの他に白磁の破片が2点出土しているが、いずれも図化できなかった。2点とも断面に黒漆が付着しており、再利用の意図があったことがわかる。

11は主郭北斜面の包含層中より出土した弥生土器の壷の口縁部である。松江市矢田町の平所遺跡 1号住居出土土器の中に類似品があり、松本岩雄氏の編年でV-4様式に位置付けられている。

12は I 区の包含層中より出土した須恵器の坏の高台部分であり、奈良時代以後のものである。

13~15は鉄器で、いずれも 1 郭より出土した。13は楔状の鉄製品、14は釘と見られる。15は鎌の茎の部分であり、目釘穴と見られる小孔が穿たれている。16~18は石製品でいずれもN区から出土した。16の用途は不明だが、高さ1.5~4.2cmの範囲を浅い凹みが一周しており、加工がなされていることは確かである。石材はノジュール(砂岩)を使用している。17も用途不明であるが、明かに底部を平たく削っている。石材はノジュール(泥岩)を使用している。18は、側面の一部が刃物の砥石として利用されたもので、14箇所の使用痕跡がある。石材は、風化して軟らかくなった安山岩を使用している。

第3節 小結

各遺構の前後関係、同時性と、城の存続した時期、今後の問題点

各遺構の時期については、前後関係や同時性を、土層堆積状況などからは直接確かめられないものが大部分であった。以下は、主として遺構同士の位置関係から、どの遺構が同時に機能していたと言えるかを考察したものである。

- ①1郭十通路1 1郭を主郭と結ぶ通路1は、当然1郭とともに機能していなければならない。
- ②1郭+2郭 主郭から2郭へは4.5mの比高がある。また、2郭の山側(つまり主郭側)は急峻な崖になっており、主郭と直接行き来するのは困難である。従って、2郭と主郭との行き来には1郭を通らざるを得ず、2郭が機能している時期には1郭も機能していなければならないであろう。但し、逆に2郭が棄てられていても1郭が機能しているという時期はあってもよい。
- ③1郭(第1段階)+畝状竪堀+4郭(第1段階) 第1段階の1郭は北斜面に掘られた畝状竪堀の直上まで伸びている。畝状竪堀と組み合わせて、北東からの攻撃に対する防禦をはかるのが目的だったことは明かであろう。第1段階の4郭も、北側が竪堀1、2の直上に来ており、やはり畝状竪堀と組み合わせて防禦の効果を上げようと意図したものであろう。これら三者は同時に機能していたと考えられる。

だが、第2段階になると両郭とも盛り土がなされ、畝状竪堀とは離れてしまう。

- ④ SE 01 + SE 02 + SD 01 +竪堀 8 + 2郭+ 竪堀 9 + 3郭- 竪堀 8 と 2 郭との組み合わせで 東尾根から、竪堀 9 と 3 郭との組み合わせで西尾根から井戸を守ったものと思われる。
- ⑤堀切+5郭+通路3+通路2+集石遺構 5郭は堀切の東に接して造られており、堀切とともに西からの攻撃に対するためのものであろう。5郭の背後は人が通行できる程度の緩い斜面である。5郭の山側のステップは、この緩斜面を通って通路3へ登るためのものと考えられ(第65図)、従って5郭と通路3も同時に機能していたと考えられる。通路3と通路2が本来連続していたことは前に述べた。通路2と集石遺構の同時性は説明を要しないであろう。

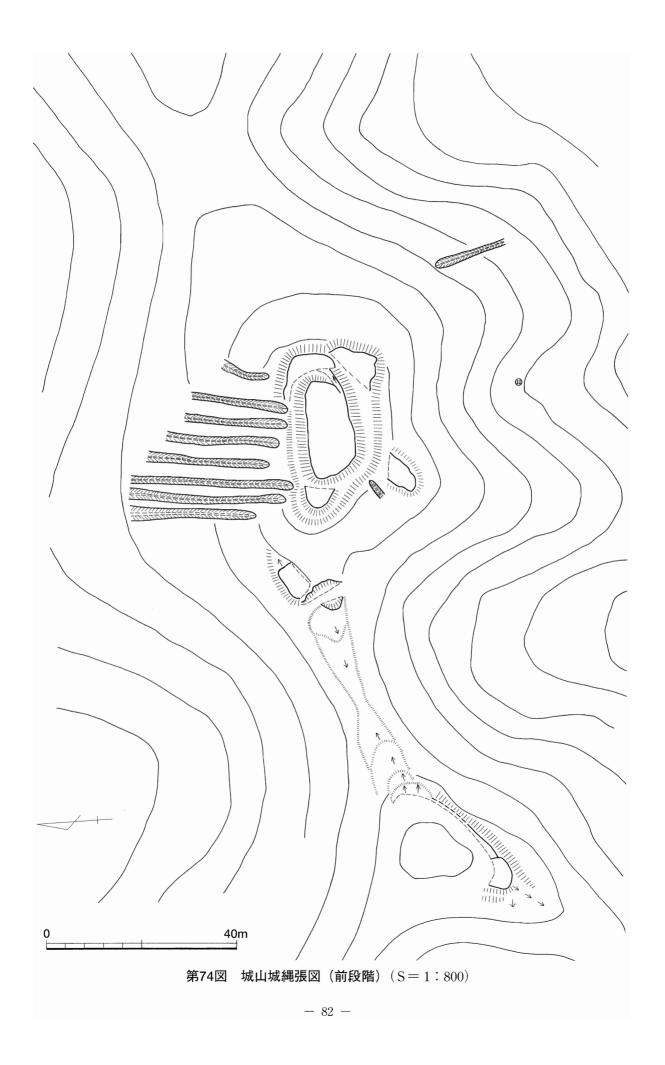
上記の組み合わせのうち、特に③と⑤は畝状竪堀とそれを横切る通路 2 の前後関係如何という難しい問題をはらんでいる。畝状竪堀が掘られる目的は、山を登ってくる敵の横移動を妨げるためとされているが、途中に通路 2 が既にあったとすると、敵はここを通って自由に横移動してしまう。また、通路 2 東端では礫石を積み置くのに竪堀 4 の中を利用しているので、この点からも礫石だまりがある以前に竪堀 4 がなければならない。従って、③が⑤に先行する関係と考えられる。

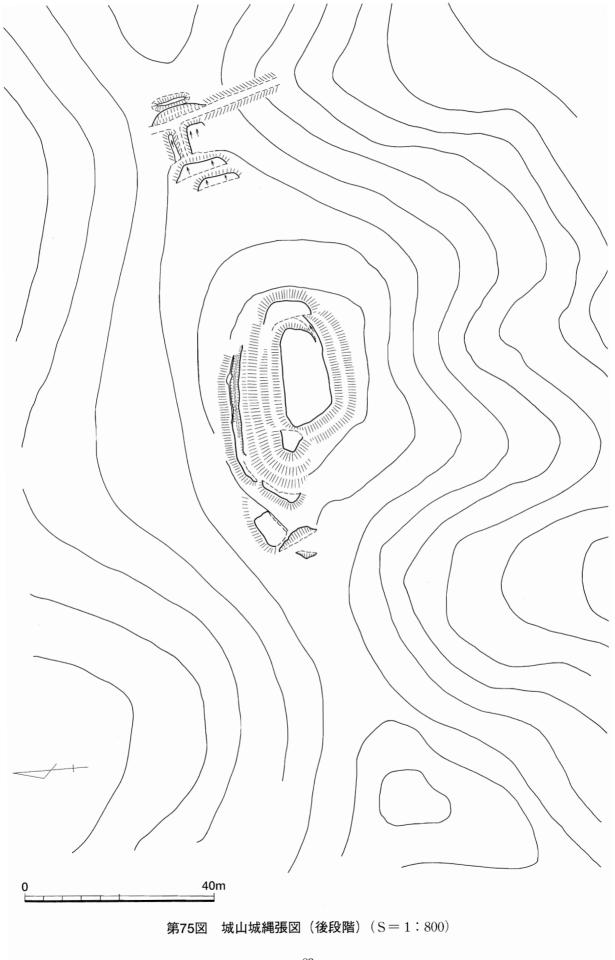
以上のような時間的関係を基に、前後 2 段階の縄張り図(第74図・第75図)を作成した。その結果、畝状竪堀の段階から通路 2 と礫石だまりの段階へ移っていくという大きな流れはわかったが、それ以外の遺構の同時性や前後関係については厳密にいうことは困難である。

次に、城の存続した期間について述べる。上限については、青磁碗の底部、奈良火鉢、擂鉢などの遺物より見て、15世紀には築城されたと考えてよい。他方、下限については、染付が広範に流通するのが16世紀であり、また畝状竪堀の発生するのが永正末年(1521年)頃とされていることから、16世紀までは存続していたと考えられる。

このような調査結果は、中世城館調査の方法について幾つかの問題を投げかけている。通常、縄張り調査で作成される縄張り図には、その城の最終段階の姿が反映されると言われている。しかし城山城の場合は、縄張り調査で見出されていた畝状竪堀よりも、縄張り調査時にはわからなかった通路2と礫石だまりが後行することが判明した。縄張り図に表れるのは必ずしも城の最終段階の姿ではなく、あくまでも地表面に現れた部分の姿であることを再確認せねばならない。また、城山城は畝状竪堀だけを見れば16世紀の山城のようであるが、出土遺物から15世紀に遡ることが判明したように、上限の確定にはやはり発掘調査が不可欠であると言える。

- 註1 『宍道町歴史史料集(地名編)』(宍道町教育委員会、1995年)。山根正明氏は、字「土居」 を城山城の領主の居館とされる。(山根正明「普請未成の山城について」(『島根県中近世 城館跡分布調査報告書第2集 出雲、隠岐の城館跡』(島根県教育委員会、1998年))
- 註2 島根県教育委員会註(1)前掲書
- 註3 『矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』(出雲市教育委員会、1991年)。それ以外の類例には古志公民館建設に伴う調査、及び荻杼遺跡出土品(いずれも出雲市内の出土)があるが、ともに未見。
- 註4 立石堅志「奈良火鉢」(中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』(1995年) 10章 「瓦質土器 | 第1節)
- 註5 上田秀夫「14~16世紀の青磁椀の分類について」(「貿易陶磁研究」 2、1982年)
- 註6 正岡睦雄・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-』(木耳社、1992年) 及び「平所遺跡 1」(『国道九号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(島 根県教育委員会、1976年))
- 註7 石材の種類については中村唯史氏の御教示によった。
- 註8 山根正明「宍道町の山城」(宍道町教育委員会、1991年)。





-83-



第6章 野津原Ⅱ遺跡と周辺の弥生時代集落遺跡

宍道町内では、中国横断自動車道尾道松江線建設工事に伴い、多くの遺跡の発掘調査が行われてきたが、その中でも白石地区から佐々布地区にかけて、弥生時代後期の遺跡が数多く発見されており、この時期の様相がかいま見えるようになってきた。野津原Ⅱ遺跡(西区)を中心に気づいた点を整理したい。

なお、本文では弥生土器の時期を示す場合、鹿島町の南講武草田遺跡での編年を使用している。 日本海に近い平地の遺跡である南講武草田遺跡での編年観が、宍道町の遺跡の年代を示すのに必ず しも有効であるとは思えないが、近接地域内の各遺跡間の相対年代を考える上では大過無いと判断 し、使用している。よって本文での編年観は、南講武草田遺跡や他地域の遺跡との並行関係を直接 示すものではない。

野津原Ⅱ遺跡(西区)では弥生時代後期の竪穴建物跡4棟を検出したほか、更にそれ以上の数の竪穴建物跡があったことが推定された。また、隣接する野津原Ⅱ遺跡(東区)や山守免遺跡でも多数の同時代集落が発見されている。

建物跡出土の確実な遺物としては、山守免遺跡出土の甕が、最も古い要素を持つと考えられ、草田1期に近いものと思われる。山守免遺跡1区の多くの遺構についても草田1~2期と考えられ、野津原Ⅱ遺跡(西区)の遺物包含層中からも同時期の遺物が少量見られる。山守免遺跡SB1からは、土器は出土していないが、鉄鎌が出土しており、草田1~2期のものであろう。山守免遺跡では、標高の低い3区からも草田1~2期の遺物が出土しているが、これらの遺物は、上方からの流れ込みである可能性が高い。よって、この丘陵の最初の集落は、山守免遺跡の丘陵頂部から始まったものと思われ、高所に存在する小規模なものであったと考えられる。

野津原Ⅱ遺跡(東区)の遺構出土遺物は、ほとんどが、草田3期の特徴を持ち、一部に草田4期の特徴を持つものが見られる。こうしたことから、野津原Ⅲ遺跡(東区)の集落は、草田3期に始まり、草田4期まで存続したものと思われる。それと同時期と考えられるものに野津原Ⅲ遺跡(西区)の2・4号建物跡がある。いずれも小型の建物ではあるが、草田4期の遺物が出土している3号建物跡についても数回の建て替えが認められることから、開始時期は、草田3期に遡る可能性が高い。また、草田4期の遺物しか出土していない遺構に野津原Ⅲ遺跡(西区)の1号建物跡があるほか、野津原Ⅱ遺跡(西区)の遺物包含層中からも多くの草田4期の遺物が出土している。

野津原Ⅱ遺跡(西区)の遺物包含層中出土遺物の内、最も新しい要素を持つものは、鼓形器台などで、草田5期の特徴を持つものと思われるものが含まれている。それより新しい遺物は見られない。また、草田5期の遺物を出土する遺構は見られなかった。山守免遺跡3区の遺構は古墳時代以降のもので、丘陵頂部の集落が廃絶以降しばらくはこの丘陵での集落は見られず、古墳時代以降の集落は周辺の谷に降り、低地での生活が始まっているようである。

上記のことからこの付近の弥生集落は、草田1~2期に山守免遺跡の丘陵頂部で、小規模に始まり、草田3~4期に野津原Ⅱ遺跡(東区)まで範囲を広げ、最盛期を迎える。その後、草田5期頃

に、その役割を終えるようである。

山守免・野津原Ⅱ遺跡の集落は、いずれも稲作を行うには不便と思われる丘陵の高所に立地する。こうしたいわゆる「高地性集落」は、全国規模の緊張状態の中での見張りや通信、防衛などの機能を持つ集落であると考えられる場合が多かった。一般国道9号(安来道路)建設に伴う発掘調査では、多くの弥生時代後期の集落遺跡が調査され、山上に立地し、「高地性集落」として認知される遺跡も増加する結果となった。それらの多くは、中海を見下ろす丘陵の先端や、平野に面した場所に立地し、他の弥生集落を相互に望見できるという点から、通信の機能を持つ集落と考えられている。中でも塩津丘陵遺跡群の調査によって、単位集団だけでなく、拠点集落までもが山上に立地している点は注目に値するものである。安来地域でのこれらの「高地性集落」は、そのピークが草田1期と4期であるという点でも、山守免・野津原Ⅱ遺跡と一致するものである。

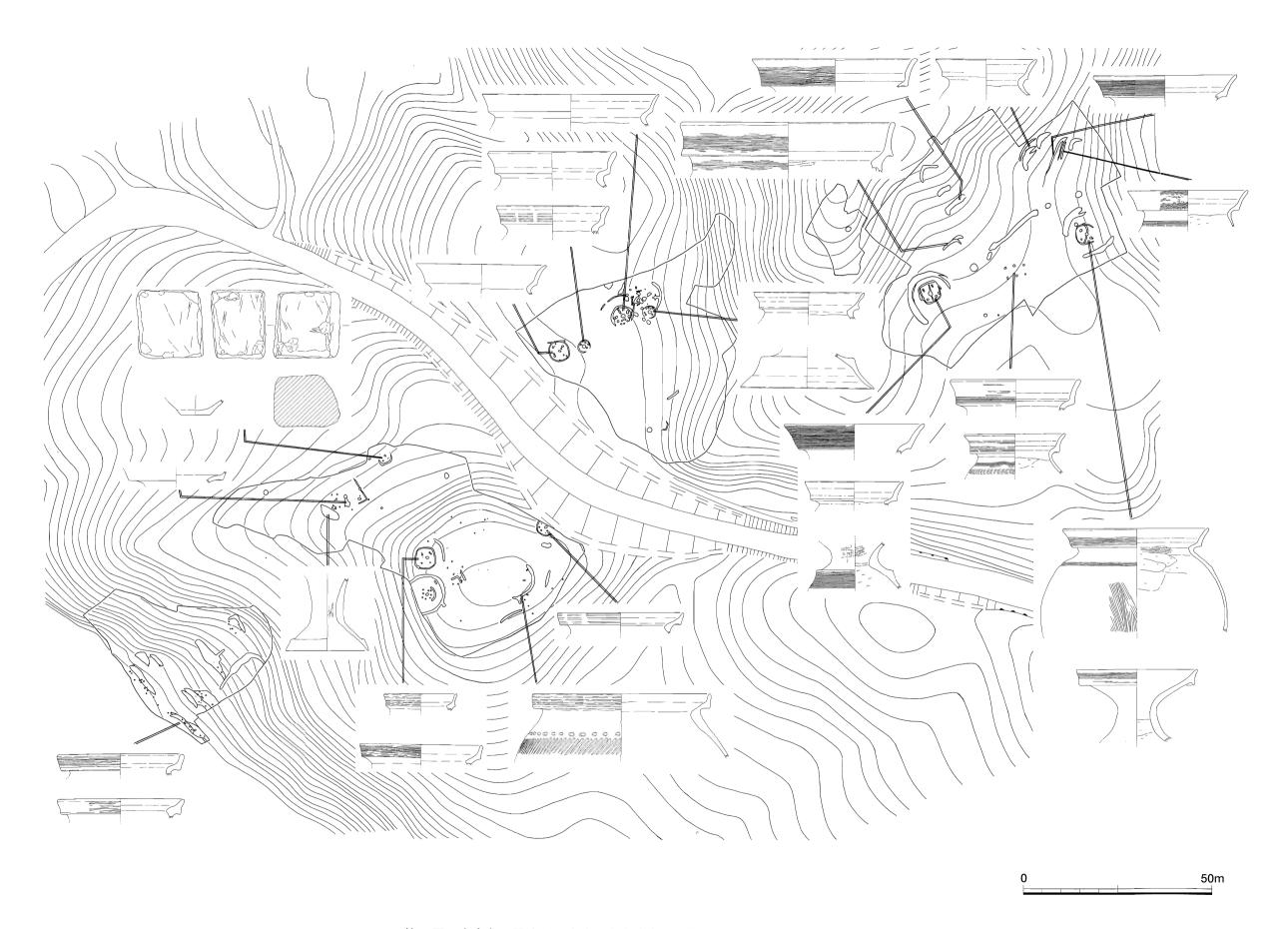
しかしながら、山守免・野津原II遺跡での様相を見る限り、高所に立地するという点以外、緊張状態を示すような状況が感じられない。草田 $1\sim2$ 期の段階で、山守免遺跡1区の集落が出現するが、その位置は、決して眺望が利く位置ではない。北側の谷筋から宍道湖・島根半島までを見通すことはできるが、その範囲は極めて狭い。

眺望が利き、通信機能を思わせる集落となるのは、次の草田 3 ~ 4 期の段階である。標高約 100mの野津原 II 遺跡(東区)に遺跡の中心が移り、広い範囲を見渡せる立地となる。野津原 II 遺跡(東区)の遺跡最高所からは、遥か西に位置する上野遺跡(佐々布地区)の弥生集落が見えたはずであるが、上野遺跡の弥生集落は、草田 4 ~ 5 期のものであり、野津原 II 遺跡が同時併存していたかどうかは疑わしい。

佐々布地区には、当時の宍道湖に面した標高10m程の位置から始まる北ヶ市遺跡があり、この時期の集落が必ずしも高所だけに存在しないことが解っている。北ケ市遺跡は平成10年に調査され、2棟の竪穴建物跡が検出されているが、出土遺物は草田2~3期のものであり、山守免遺跡・野津原Ⅱ遺跡と同時に存在したと考えられる。

元々、山陰地方はいわゆる「高地性集落」の存在しない地域と言われてきた。しかし、近年の安 来道路建設に伴う発掘調査で、通信機能を持つと考えられるような集落が次々と発見され、山陰地 方においても「高地性集落」が存在する可能性が指摘されるようになってきた。しかしながら、高 所に所在する集落のすべてが、防御や通信機能を持ついわゆる「高地性集落」と考えていいかどう かは別問題である。山守免・野津原Ⅱ遺跡は、多量の武器類を出土せず、さしたる眺望もない高所 に所在する集落で、同時期に低地に所在する集落も存在することなどを考えれば、この時期に、生 活圏が拡大するような社会的変化があった事をうかがわせるものである。

- 註 1 赤澤秀則「小結」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』 鹿 島町教育委員会1992年
- 註 2 丹羽野裕「塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡検出の弥生時代後期の遺構について」「塩 津丘陵遺跡群の性格について」『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会 1998年
- 註3 木下誠「北ヶ市遺跡」『宍道町史史料編』宍道町史編纂委員会 1999年 出土遺物の詳細については、宍道町教育委員会木下誠氏よりご教授を得た。



第76図 山守免・野津原 I 遺跡の弥生時代の遺構と主な出土遺物 (S=1:100)





野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡全景(西から)



野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡全景



野津原Ⅱ遺跡(西区)調査前近景(東から)



調査前 道の状況 (南から)



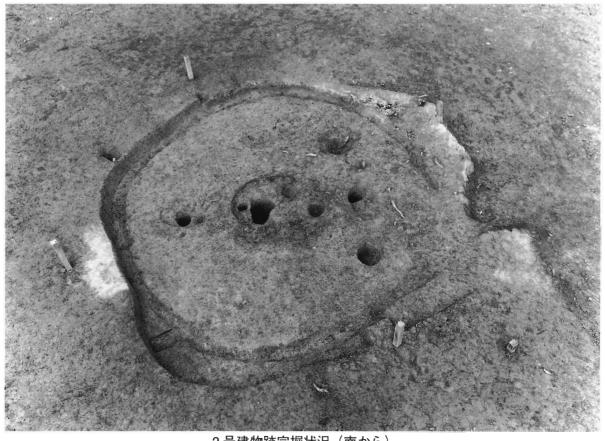
トレンチ2土層堆積状況(南から)



土壙7完掘状況(南から)



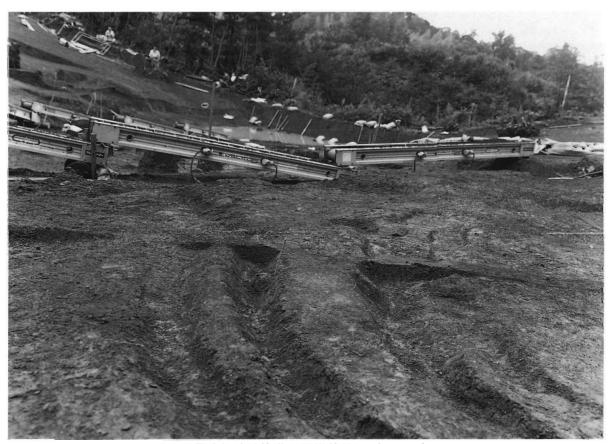
1 号建物跡完掘状況(南から)



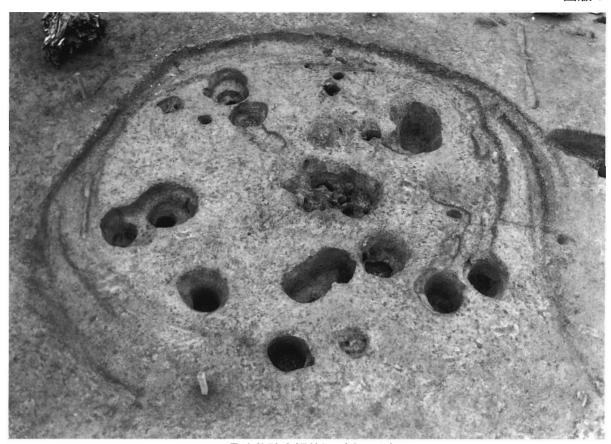
2号建物跡完掘状況(南から)



1・2 号建物跡完掘状況(北から)



3 号建物跡壁体溝土層堆積状況(西から)



3号建物跡完掘状況(南から)



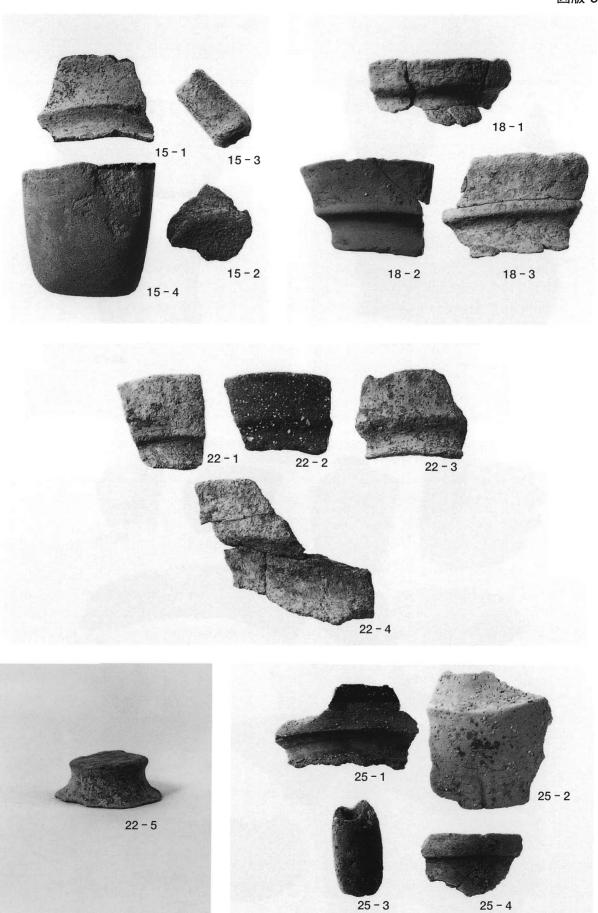
3号建物跡完掘状況(西から)



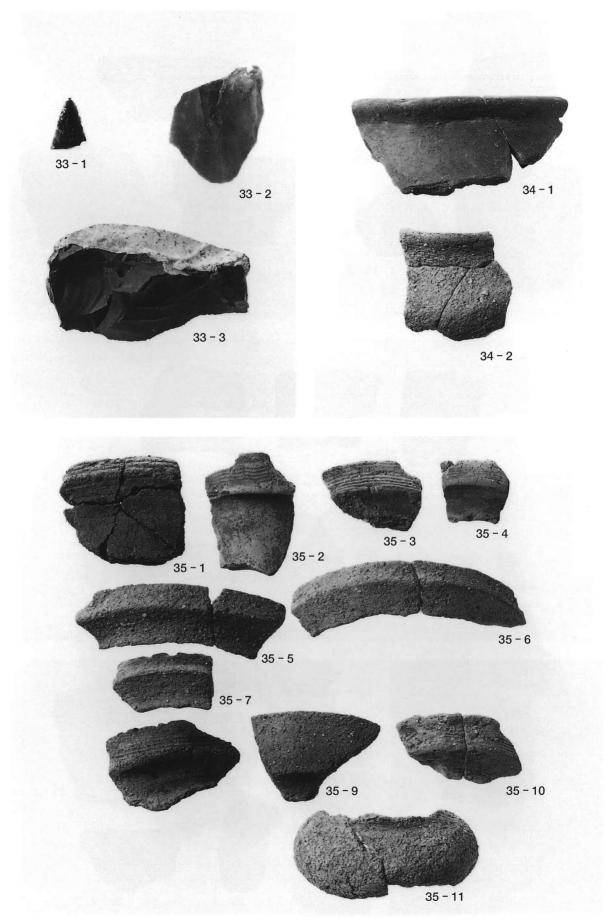
4号建物跡完掘状況(東から)



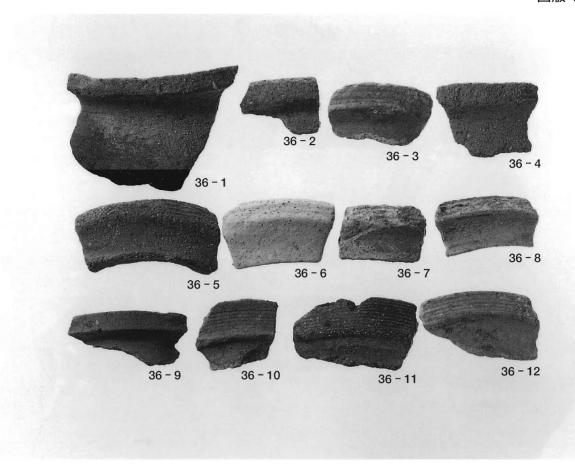
野津原Ⅱ遺跡(西区)全景(調査後・東から)

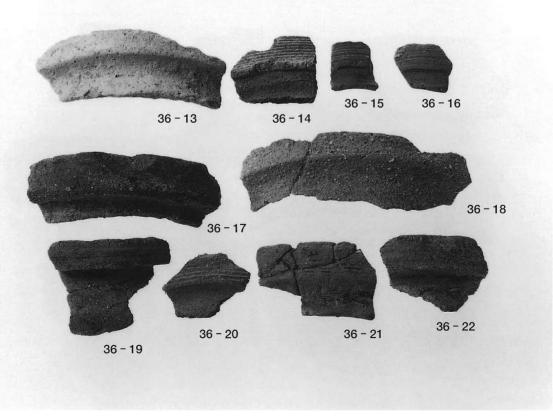


出土遺物(1)

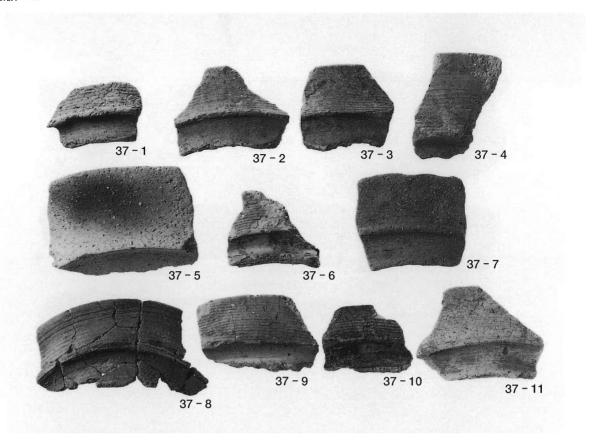


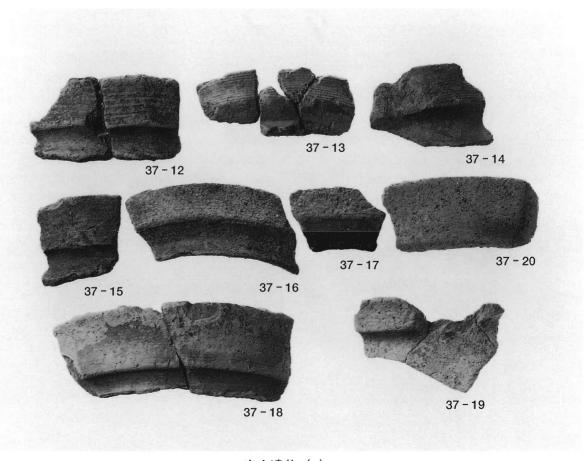
出土遺物(2)



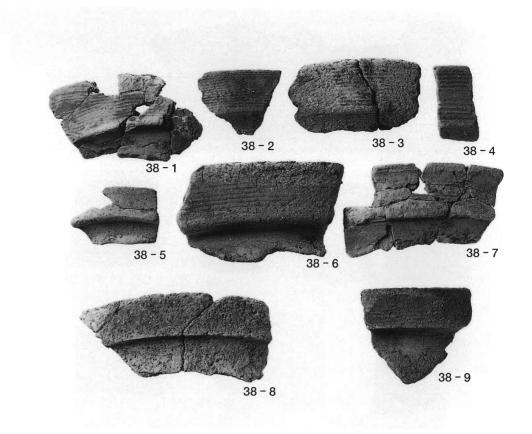


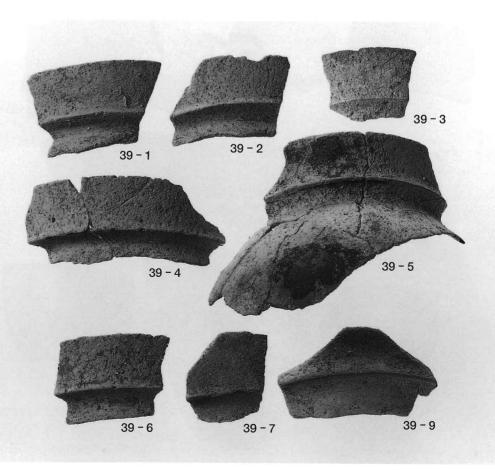
出土遺物(3)



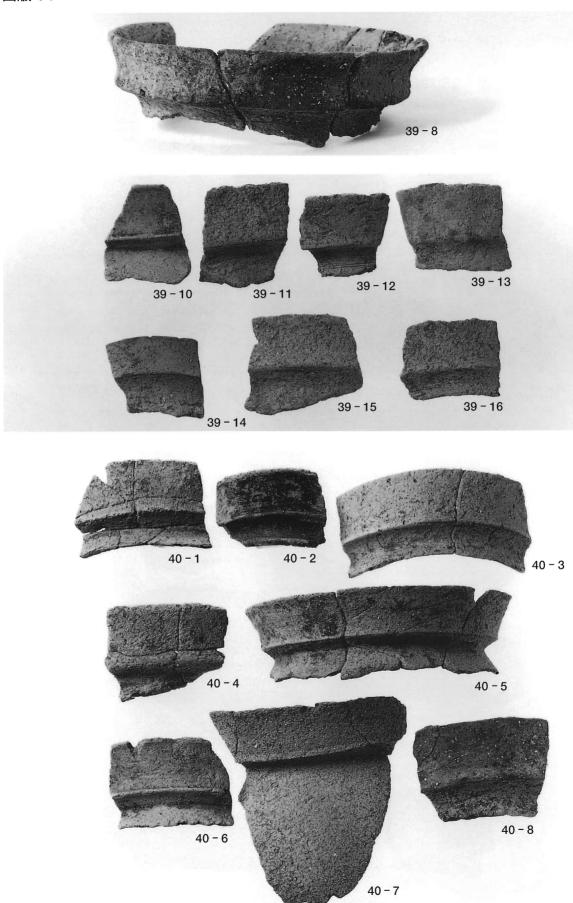


出土遺物(4)

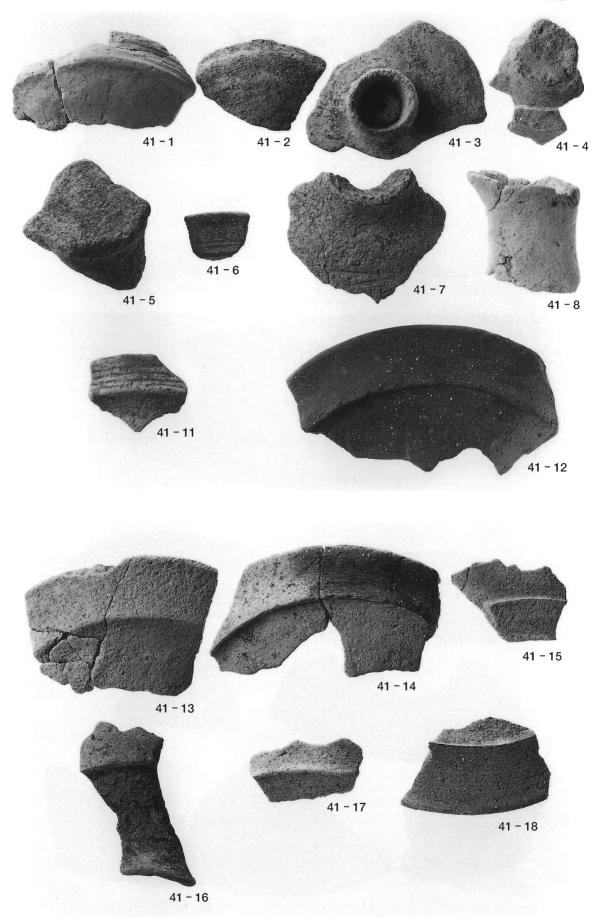




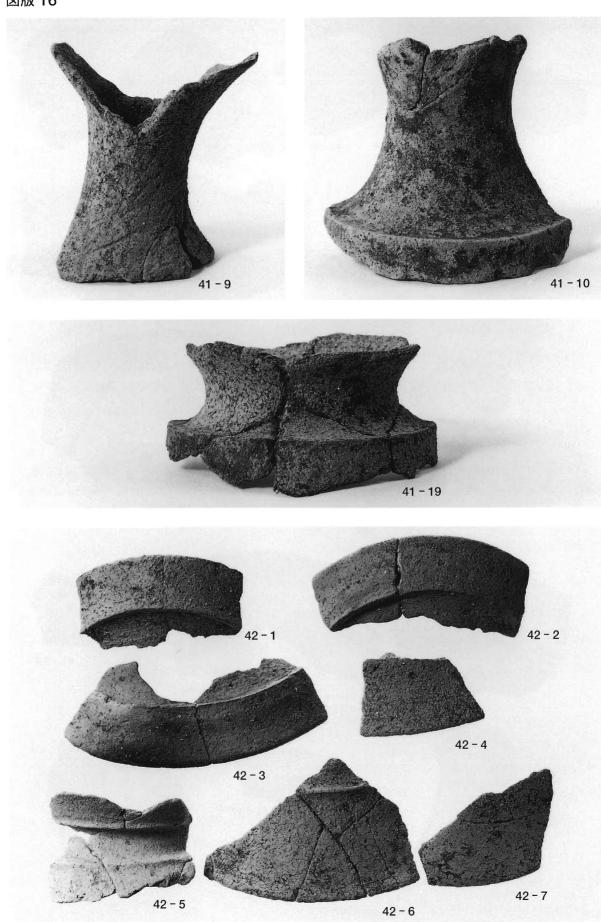
出土遺物(5)



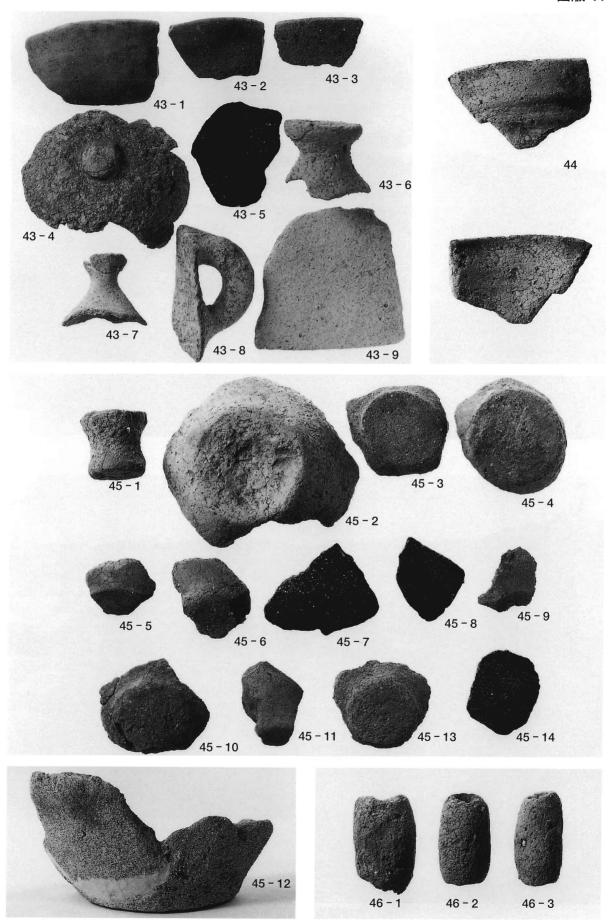
出土遺物(6)



出土遺物(7)



出土遺物(8)



出土遺物(9)



女夫岩西遺跡遠景(上野遺跡より)





古墳調査前(北から)



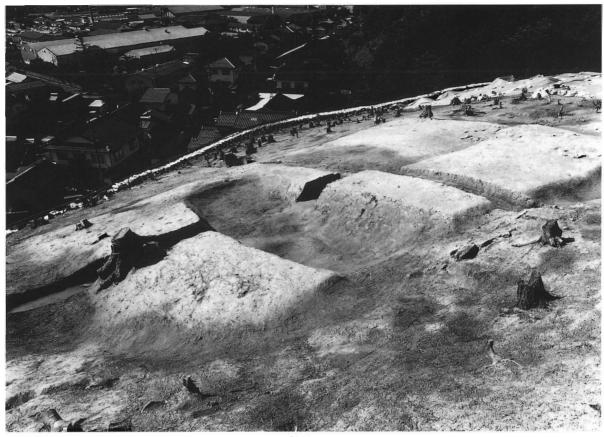
Ⅲ区調査前



古墳全景



古墳溝遺物出土状況



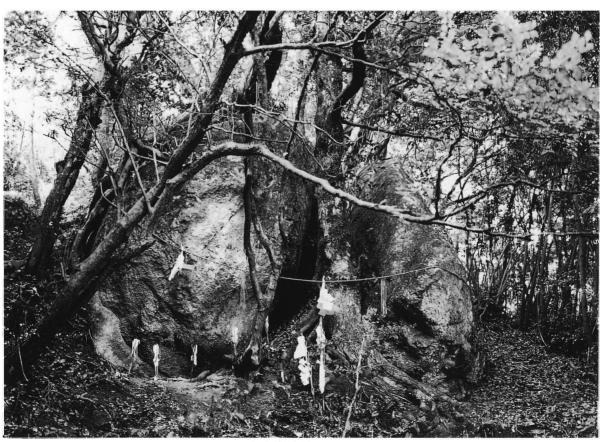
SX01



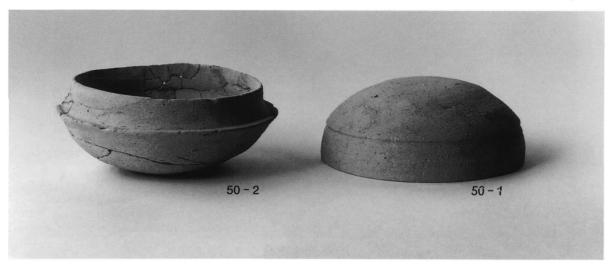
Ⅲ区調査後(北から)



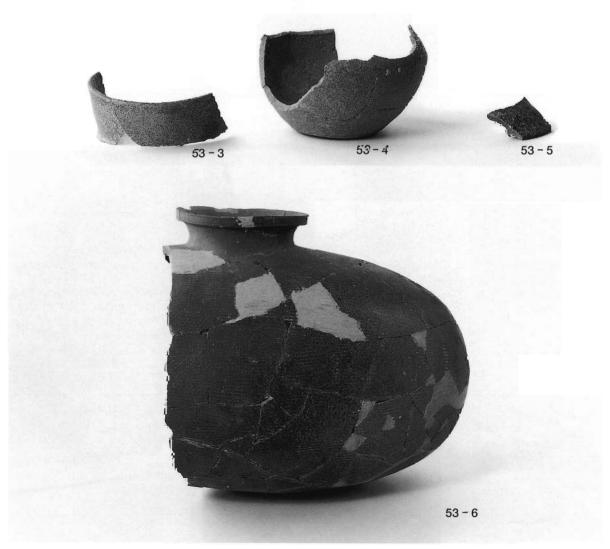
Ⅲ区調査後(東から)



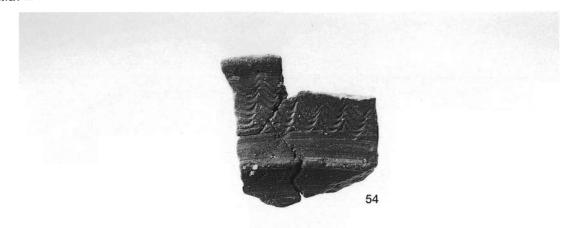
女夫岩遺跡の巨石



古墳出土遺物(1)



古墳出土遺物(2)



SX01出土遺物



大森神社



城山遺跡全景 (調査前・南西より)

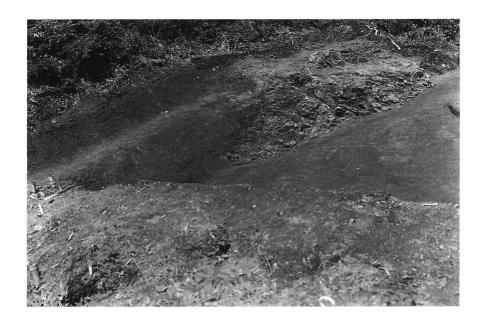


城山遺跡全景 (調査後・南西より)



城山遺跡遠景 (調査後・南西より)

図版 26



I区 (調査後・西から)



Ⅱ区 (調査後・西から)



I区SD01 (西から)



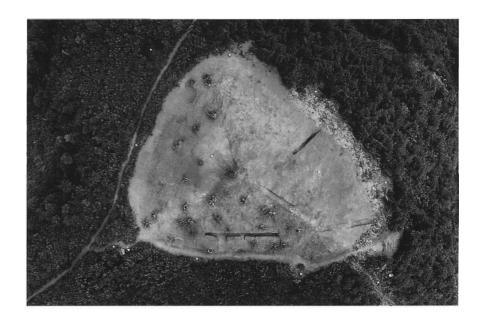
竪堀8断面



I区SE01



図版 28



Ⅲ区 (調査後)



Ⅳ区 (調査途中)



Ⅳ区 (調査後・北東から)



Ⅳ区 (調査後・北西から)



1郭(第2段階)の盛土



3郭の盛土



4郭(第2段階)の盛土



4郭(第1段階) 完掘状況



竪堀4底部に集積された 礫石

図版 31



竪堀4完掘状況



竪堀 5 上端



通路2東端の集石遺構 (南から)



通路2東端の集石遺構 (西から)



礫石除去後の通路2東端



通路1に続く主郭南側の 段差



通路 1 (1郭の出入口付近)



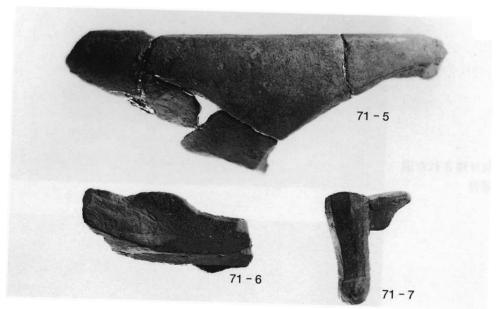
土手状に削り残された通 路2谷側部分

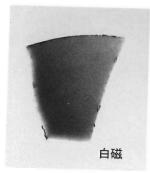


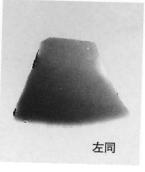
通路2(北東から)







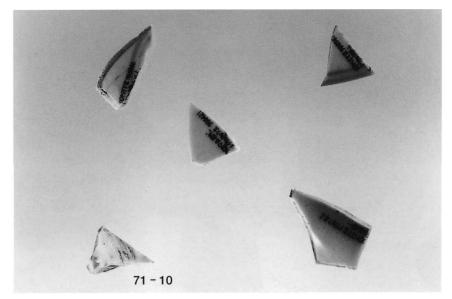




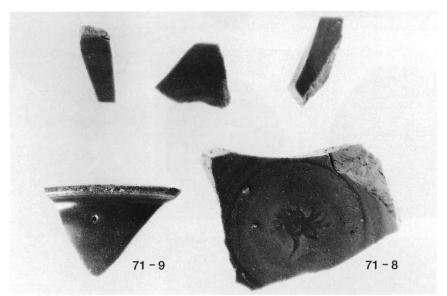




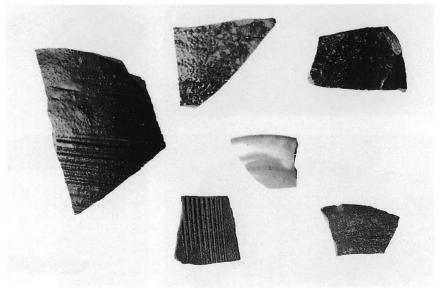
出土遺物(1)



染付



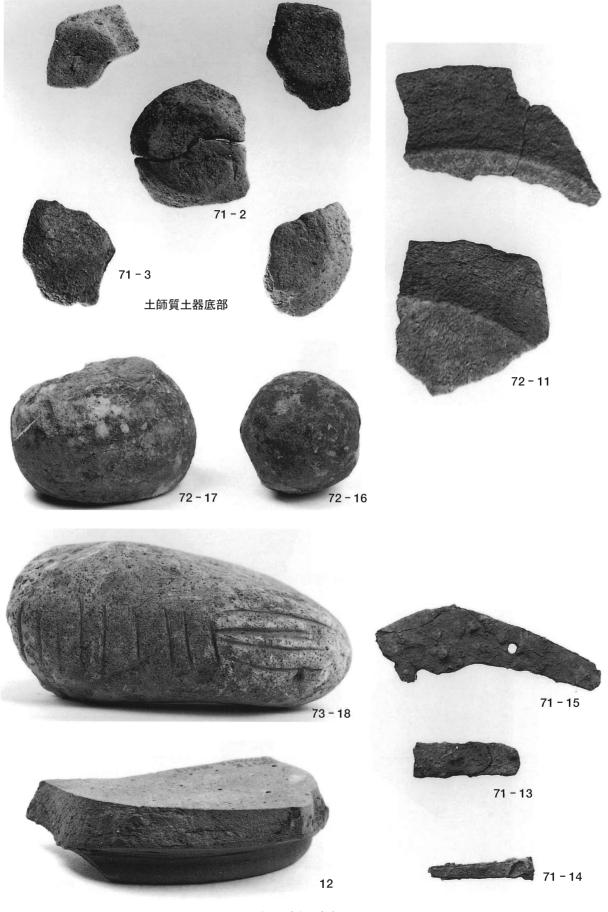
青磁



陶器

出土遺物(2)

図版 36



出土遺物(3)

報告書抄録

				•••	• н						
フ リ	ガ	ナ	ノツバラニニシクイセキ メオトイワニシイセキ シロヤマイセキ								
書		名	野津原Ⅱ (西区) 遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡								
副書		名	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻		次	3								
シリーズ名		名	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号			3								
著 者 名		名	林 健亮、田原淳史、久保田一郎								
編集	機	関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター								
所 在		地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL: 0852-36-860						8608 (代)		
発行	ě 行 月 日 西暦2000年3月31日										
所収遺跡名		所	在 地	市町村	- ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面	積 調査原因	
野津原Ⅱ(西区) ノ シ テ オ		八 ジン 字 : オオ	カグン 東郡 ジチョウ 道町 アザハクイシ 字白石	32307	X21/1 m · J	35度 23分 41秒	55分	H10.0729 ~ H10.1030	3,000	m [*] 道路建設	
女夫岩西		八シン字は	カグン 末郡 ジチョウ 首町 アザハクイシ 字白石			35度 23分 30秒	54分	H10.0408 ~ H10.0811	2,000	m [*] 道路建設	
	, 4 T	八シシスト	カグン 末郡 ジチョウ 道町 アザサソウ 字佐々布			35度 23分 31秒	53分	H10.0413 ~ H10.0925	4,000	m [*] 道路建設	
遺跡名	妳名 種		主な	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
野津原Ⅱ (西区)	住		弥生時代	Č	竪穴建物跡 4			弥生土器 石器			
女夫岩西	古	请 古墳時		Ì	古墳 1		3	頂恵器			
城山	成 山 城 5		亦 中世		郭 7 畝状竪堀群 井戸 2 集石遺構			土師質土器 瓦質土器			

野津原Ⅱ(西区)遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査書3

発行 2000年3月

編集 島根県埋蔵文化財調査センター

島根県松江市打出町33番地

印刷 ㈱谷 口 印 刷